

京都府遺跡調査概報

第 15 冊

1. 長岡京跡 右京 第165次
2. 長岡京跡 左京 第115次
3. 長岡京跡 右京 第171次
4. 長岡京跡 左京 第119次
5. 長岡京跡 右京 第153次
6. 長岡京跡 右京 第156次
7. 長岡京跡 (立会調査)
8. 長岡京跡 左京 第118次

1985

序

昭和56年4月に財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが発足し、間もなく4年が過ぎようとしています。その設立の目的は、京都府内の埋蔵文化財の調査、保存、活用及び研究を行い、その保護を図るとともに、先人の遺した文化財を大切にすの考え方の普及育成に努め、地域の文化の発展に寄与することにあります。

当調査研究センターの直面する事業は、京都府内の各地における埋蔵文化財の発掘調査であり、昭和59年度は、39件の調査を実施しました。これらの発掘調査は、いずれも道路建設、学校建設、宅地造成などの開発事業に伴う事前調査であり、調査によって発見された遺跡の多くは調査終了後破壊され、消滅する運命にあります。しかし、発掘調査したすべての遺跡が開発事業により消滅してはいはずがありません。一つでも多くの遺跡がその重要性を理解され、現状のまま保存されることが望ましいのは言うまでもありません。

この「京都府遺跡調査概報」は、遺跡の重要性を理解していただくために、またたとえ保存が困難な遺跡についても正確な記録を作成し、その活用を図るために刊行するものであります。昭和59年度は、第13冊、第14冊、第15冊、第16冊の4冊にまとめることにしましたが、この第15冊には長岡京跡第118次調査ほか7件を収録しました。調査結果を速報として掲載した「京都府埋蔵文化財情報」とあわせて御活用いただければ幸甚であります。

この報告書をまとめるまでの現地調査では、開発関係者はもちろんのこと京都府教育委員会、各市町村教育委員会をはじめ関係機関の御協力を受け、さらに炎暑の下、極寒の中で熱心に作業に従事していただいた多くの方がたがあります。この報告書を刊行するにあたって、これら多くの関係者に厚く御礼申し上げます。

昭和60年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 福山敏男

凡 例

1. 本冊に収めた概要は、

- | | |
|----------------|----------------|
| 1. 長岡京跡右京第165次 | 2. 長岡京跡左京第115次 |
| 3. 長岡京跡右京第171次 | 4. 長岡京跡左京第119次 |
| 5. 長岡京跡右京第153次 | 6. 長岡京跡右京第156次 |
| 7. 長岡京跡（立会調査） | 8. 長岡京跡左京第118次 |

を対象としたものである。

2. 各遺跡の所在地，調査期間，経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	経 費 負 担 者	執 筆 者
1. 長岡京跡右京第165次	長岡京市開田2丁目	昭和59. 5. 21 } 昭和59. 6. 14	京都府乙訓土木事務所	山口 博 三好 博喜
2. 長岡京跡左京第115次	長岡京市大字馬場小字六ノ坪ほか	昭和59. 9. 21 } 昭和59. 10. 29	建設省近畿地方建設局	三好 博喜
3. 長岡京跡右京第171次	長岡京市今里3丁目・4丁目	昭和59. 7. 9 } 昭和59. 10. 13	京都府乙訓土木事務所	石尾 政信 黒坪 一樹
4. 長岡京跡左京第119次	向日市上植野町西大田	昭和59. 10. 11 } 昭和59. 11. 30	京都府教育委員会	山口 博
5. 長岡京跡右京第153次	長岡京市今里4丁目	昭和58. 12. 9 } 昭和59. 2. 2	京都府乙訓土木事務所	長谷川 達
6. 長岡京跡右京第156次	大山崎町円明寺夏目21番地ほか	昭和59. 2. 13 } 昭和59. 3. 2	京都府乙訓土木事務所	竹井 治雄
7. 長岡京跡立会調査	長岡京市井ノ内	昭和59. 6. 17 } 昭和59. 7. 23	京都府乙訓土木事務所	長谷川 達
8. 長岡京跡左京第118次	向日市森本町小柳22～30ほか	昭和59. 10. 10 } 昭和60. 2. 14	向日市	長谷川 達 山口 博 石尾 政信

3. 本冊の編集には，調査課企画資料担当が当たった。

目 次

1. 長岡京跡右京第165次発掘調査概要	1
2. 長岡京跡左京第115次発掘調査概要	11
3. 長岡京跡右京第171次発掘調査概要	19
4. 長岡京跡左京第119次発掘調査概要	33
5. 長岡京跡右京第153次発掘調査概要	55
6. 長岡京跡右京第156次発掘調査概要	61
7. 長岡京跡立会調査概要.....	65
8. 長岡京跡左京第118次発掘調査概要	69

挿図・付表目次

長岡京跡右京第165次

第 1 図	調査地位置図	1
第 2 図	調査地周辺図	3
第 3 図	第 1 トレンチ実測図	4
第 4 図	第 2 トレンチ実測図	4
第 5 図	SD16503・16507土層図	5
第 6 図	出土遺物実測図	7

長岡京跡左京第115次

第 7 図	調査地位置図	11
第 8 図	トレンチ位置図	12
第 9 図	トレンチ平面図	13
第 10 図	トレンチ西壁断面図	14
第 11 図	出土遺物実測図	17

長岡京跡右京第171次

第 12 図	調査地位置図	19
第 13 図	調査地平面図	20
第 14 図	溝SD17102実測図	21
第 15 図	南壁，溝SD17102断面	22
第 16 図	古墳前方部実測図	22
第 17 図	住居跡SH17016実測図	23
第 18 図	遺物実測図(第 3 層)	24
第 19 図	遺物実測図(第 4 層)	25
第 20 図	遺物実測図(溝SD17102)	26
第 21 図	遺物実測図	28
第 22 図	遺物実測図	30

長岡京跡左京第119次

第 23 図	調査地位置図	33
--------	--------	----

第 24 図	SD11901土層図(トレンチ西壁).....	35
第 25 図	トレンチ平面図.....	36
第 26 図	轍群実測図.....	38
第 27 図	鉤尾実測図.....	39
第 28 図	出土土器実測図(1).....	40
第 29 図	出土土器実測図(2).....	41
第 30 図	木簡・墨書土器・ヘラ描き土器実測図及び拓影.....	43
第 31 図	軒瓦・刻印瓦実測図及び拓影.....	45
付 表 1	出土土器観察表.....	48

長岡京跡右京第153次

第 32 図	調査地位置図.....	55
第 33 図	調査地付近地形図.....	56
第 34 図	調査地全体図.....	57
第 35 図	Aトレンチ東部遺構平面図.....	58
第 36 図	Aトレンチ遺構断面図および南壁土層断面図(部分).....	58
第 37 図	遺物実測図.....	59

長岡京跡右京第156次

第 38 図	調査地位置図.....	61
第 39 図	調査地位置図.....	62
第 40 図	トレンチ配置図.....	62

長岡京跡立会調査

第 41 図	調査地位置図.....	65
第 42 図	府道大山崎大枝線調査範囲.....	66
第 43 図	立会調査位置図.....	67
第 44 図	平瓦拓影.....	67

長岡京跡左京第118次

第 45 図	調査地位置図.....	69
第 46 図	検出遺構概要図(1).....	71
第 47 図	SB11802実測図.....	73

第 48 図	SB11803・11804・11812・11817平面図	74
第 49 図	SB11810実測図	75
第 50 図	SB11811実測図	76
第 51 図	SB11815・11816平面図	77
第 52 図	南3トレンチSD11806実測図	78
第 53 図	SD11805・11807土層図	79
第 54 図	SE11818実測図	80
第 55 図	検出遺構概要図(2)	82
第 56 図	SD11805出土土器実測図(1)	86
第 57 図	SD11805出土土器実測図(2)	87
第 58 図	SD11805出土土器実測図(3)	88
第 59 図	SD11806出土土器実測図	91
第 60 図	SD11807ほか出土土器実測図	92
第 61 図	墨書土器実測図	95
第 62 図	土製品実測図	96
第 63 図	弥生土器実測図	96
第 64 図	軒瓦実測図及び拓影	97
第 65 図	木製品実測図(1)	98
第 66 図	木製品実測図(2)	99
第 67 図	木印出土状況図	101
第 68 図	SE11818井戸枠実測図	102
第 69 図	柱根・杭実測図	103
第 70 図	金属器実測図	104
付表 2	銭貨計測値一覧表	106
第 71 図	銅銭拓影	106
第 72 図	左京一条二坊十町域宅地利用図(南半町)	108

図 版 目 次

長岡京跡右京第165次

- 図版第 1 (1)第 1 トレンチ全景(西から) (2)第 2 トレンチ全景(西から)
図版第 2 (1)SD16503(北から) (2)SD16503遺物出土状況(北から)
図版第 3 (1)SD16507(北から) (2)SD16507遺物出土状況(北から)
図版第 4 出土遺物

長岡京跡左京第115次

- 図版第 5 (1)第 1 トレンチ全景(北から) (2)第 2 トレンチ全景(北から)
図版第 6 (1)第 3 トレンチ全景(北から) (2)第 4 トレンチ全景(北から)

長岡京跡右京第171次

- 図版第 7 (1)調査地全景 古墳周濠SD17102(南から)
(2)調査地全景 西二坊大路東側溝(北から)
図版第 8 (1)西二坊大路東側溝SD17104(北から)
(2)南北溝SD17101杭跡(北から)
図版第 9 (1)住居跡SH17106(南東から) (2)住居跡SH17106(北から)
図版第10 (1)東南溝SD17103西壁断面 (2)土壇SK17107(西から)

長岡京跡左京第119次

- 図版第11 (1)トレンチ全景(北から) (2)トレンチ全景—砂礫層除去後—(北から)
図版第12 (1)SD11901(東から) (2)SD11901内軒平瓦出土状況
(3)軒丸瓦出土状況 (4)轍群(南から)
図版第13 (1)SX11902(西から) (2)SX11903(南から)
図版第14 出土遺物(1)
図版第15 出土遺物(2)
図版第16 出土遺物(3)
図版第17 出土遺物(4)

長岡京跡右京第153次

- 図版第18 (1)A トレンチ全景(西から)
(2)A トレンチ東部遺構検出状況(西から)

- 図版第19 (1)Bトレンチ全景(東から)
(2)Cトレンチ全景(東から)
- 図版第20 (1)Aトレンチ遺構検出状況
(2)Cトレンチ遺構検出状況
- 図版第21 (1)Bトレンチ土層断面 (2)AトレンチP11内遺物出土状況

長岡京跡立会調査

- 図版第22 (1)府道大山崎大枝線調査地近景(北から) (2)土層断面

長岡京跡左京第118次

- 図版第23 (1)調査地遠景(東から) (2)調査地遠景(南から)
- 図版第24 調査地東部遺構検出状況
- 図版第25 (1)掘立柱建物SB11810(東から)
(2)掘立柱建物SB11811, 土壇SX11814(北から)
- 図版第26 (1)掘立柱建物SB11803・SB11812(北から)
(2)掘立柱建物SB11817・SB11813(北から)
- 図版第27 (1)掘立柱建物SB11816(北から) (2)掘立柱建物SB11819(南から)
- 図版第28 (1)溝SD11805・SD11807(東から) (2)溝底足跡SD11805(部分, 東から)
- 図版第29 (1)溝SD11806(南3トレンチ北から) (2)溝SD11806(南3トレンチ東から)
- 図版第30 (1)井戸SE11818(南から) (2)井戸SE11818(南西から)
- 図版第31 (1)調査地北部溝群(南から) (2)SX11856遺物出土状況
(3)SB11811柱穴内柱根遺存状況(南から) (4)SD11805土層堆積状況(西から)
- 図版第32 出土遺物(1) 土師器・須恵器
- 図版第33 出土遺物(2) 須恵器・瓦
- 図版第34 出土遺物(3) 墨書土器
- 図版第35 出土遺物(4) 木製品
- 図版第36 出土遺物(5) 木製品
- 図版第37 出土遺物(6) 金属製品
- 図版第38 出土遺物(7) 金属製品・銭貨

昭和59年度長岡京跡の発掘調査

昭和59年度当調査研究センターでは、長岡京跡の発掘調査として右京城2件、左京城3件の計5件行った。この他、府道大山崎大枝線の拡幅工事に伴う立会調査を行っている。所在地等については、下記表及び位置図のとおりである。

これらの調査のうち、府道開田・神足線歩道設置工事に伴う右京第165次調査では西一坊大路の東西両側溝を確認し、都市計画街路外環状線街路改良工事に伴う右京第171次調査では、西二坊大路の東側溝を検出するとともに、右京第27次調査で検出していたL字状に曲がる古墳時代の溝を検出し、これが帆立貝形をした古墳の周濠である可能性がでてきた。また、この調査では弥生時代中期の円形竪穴式住居跡を検出した。この他、左京第115次調査は、国道171号線の歩道設置工事に伴う調査で、古墳時代中期の溝を検出している。左京第118次調査は、向日市体育館建設に伴う調査で、狭小な面積が多い長岡京の調査のなかでは、広大な面積の調査であった。南一条条間大路の南北両側溝を検出し、整然と並ぶ長岡京期の多数の掘立柱建物跡や井戸を検出した。また、墨書土器も多く出土し、「内膳」と記したものなどがあつた。左京第119次調査は、向陽高校のトレーニングルーム建設に伴う調査で、三条大路北側溝や長岡京造営に伴うわだち群などを検出した。また、「□□□板一村□」と記された木簡や「廣」・「女」・「福」等と記された墨書土器が出土している。立会調査は、長岡京跡の西縁部に当り、丘陵裾に位置した場所である。長岡京に関する顕著な遺構は認められなかった。

本概報では、これら6件の調査と、昨年度調査のうち右京第153次・156次調査を6の府道立会調査の中で併せて報告する。右京第153次・156次の2件の調査の所在地等は、表のとおりである。

昭和59年度長岡京跡調査地一覧表

次数	地区名	所在地	期間	
1	右京第165次	7ANKSM-3	長岡京市開田3丁目	S. 59. 5. 21~59. 6. 14
2	〃 第171次	7ANITT-10	長岡京市今里4丁目	59. 7. 9~59. 10. 13
3	左京第115次	7ANMKK	長岡京市神足上八ノ坪他	59. 9. 21~59. 10. 29
4	〃 第118次	7ANDKG-3 EJS-3	向日市森本町小柳・鶏冠井町十相	59. 10. 18~60. 2. 14
5	〃 第119次	7ANFNT-4	向日市上植野町西大田	59. 10. 11~59. 11. 30
6	府道立会調査		長岡京市粟生	59. 6. 23~59. 7. 26

調査地一覧表（昭和58年度調査）

次数	地区名	所在地	期間
7 右京第153次	7 ANIAE-3	長岡京市今里4丁目・井ノ内赤ノ上	S. 58.12. 9~59. 2. 2
8 // 第156次	7 ANSNM	大山崎町円明寺字夏目21	59. 2.13~59. 3. 2



調査地位置図

1. 長岡京跡右京第 165 次発掘調査概要

(7ANKSM-3 地区)

1. はじめに

京都府乙訓土木事務所では、府道開田・神足線の歩道設置工事の計画があり、当該地が長岡京跡の一部に当ることから、京都府教育委員会と協議した結果、発掘調査の必要があり、当調査研究センターにその依頼があった。今年度依頼のあった場所は、現在の長岡京市開田二丁目で、長岡京跡の右京六条二坊一町及び六条一坊十六町と西一坊大路の推定地に当る。西一坊大路については、今回調査地の南方にある長岡京市立神足小学校の体育館改築工事に伴う右京第77次調査によって、東西両側溝を検出し、道路位置が確認^(注1)されている。しかし、西側溝と推定されるSD7790は、後世の削平が著しい状況であった。

この他、近辺の調査としては、西方約180mのところ、府道開田・神足線歩道設置工事に伴う調査として実施した右京第148次調査があり、長岡京期の東西5間の規模を有する掘立柱建物跡^(注2)を検出した。また、西方約300mのところの右京第11次・96次調査では五条大路の



第 1 図 調査地位置図 (1/5,000)

南北両側溝を^(注3)確認し、西北約 200 m のところで実施した右京第155次調査では、くり抜きの井筒を有する長岡京期の井戸を^(注4)検出している。

今回の調査では、西一坊大路の東西両側溝を検出することを主要な目的とし、道路や隣接地への進入路を確保するため、両側溝推定地に幅約 2.2 m・長さ 10 m 前後のトレンチを入れて行うこととした。調査は、当調査研究センター調査員の山口 博・三好博喜が担当し、昭和59年5月21日から6月14日まで実施した。その間、調査補助員として、またその後の整理作業に整理員として、肥後弘幸・萬谷幸美・山下京介・戸波みどり・神山久子・加藤由美・赤司 紫・山本弥生等の諸氏の参加を得た。また、京都文教短期大学教授中山修一先生を始め、長岡京市教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センター・長岡京跡発掘調査研究所の方々には、調査に際して御指導・御協力を得た。記して謝意を表したい。

なお、本概要の執筆は、「3. 検出遺構」を三好が、他を山口が担当した。

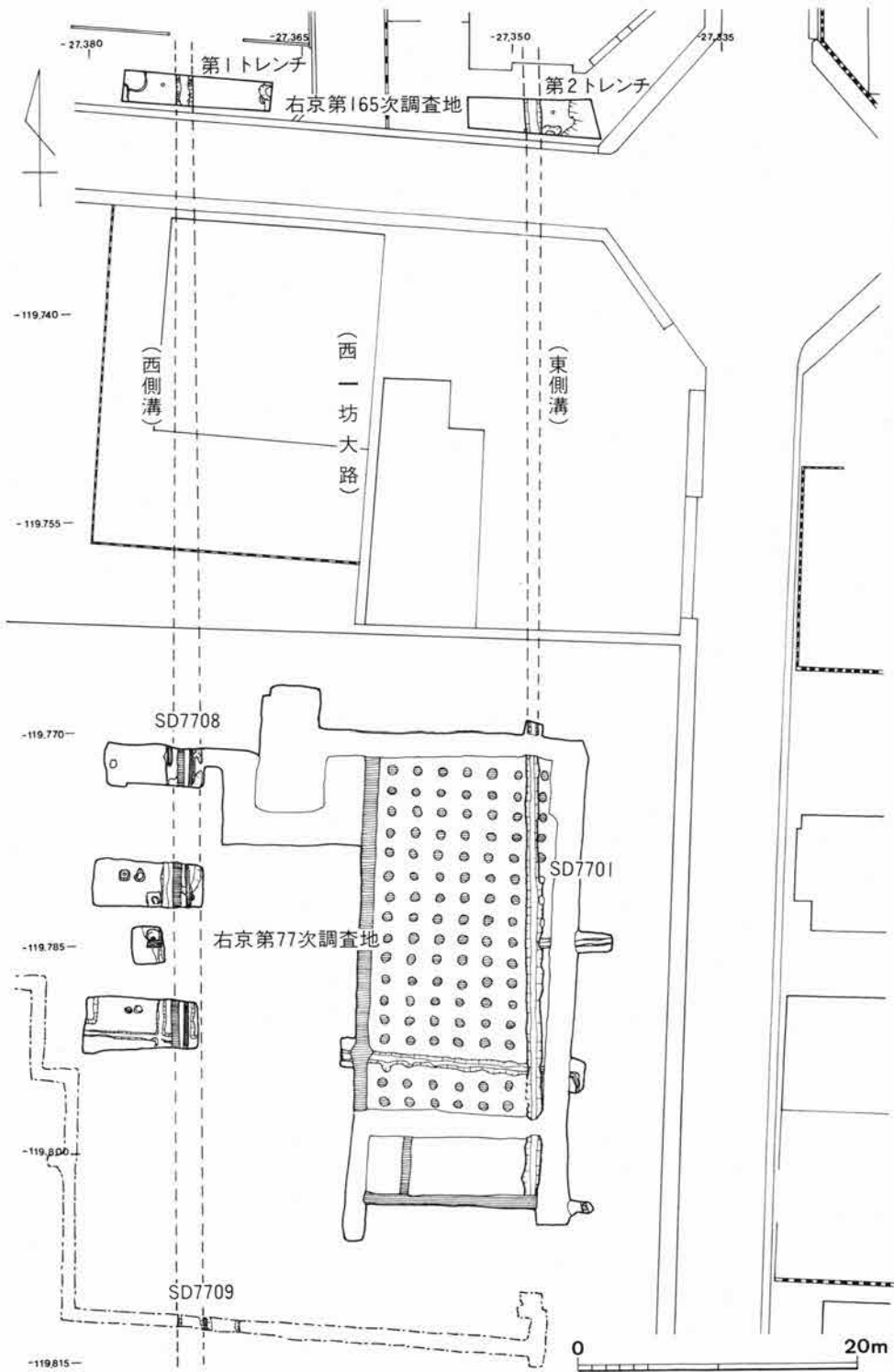
2. 調査の経過

現地調査は、昭和59年5月21日から資材の搬入及び右京第77次調査の成果から国土座標値を介してトレンチ位置を決めるなどの作業を行い、5月25日に重機を入れて盛土等を除去し、翌日から人力での掘削に入った。トレンチは、前述したように西一坊大路東西両側溝推定地に幅約 2.2 m・長さ約 10 m 前後のものを2本入れ、西を第1トレンチ、東を第2トレンチとした。

遺構検出作業は、まず第1トレンチから入った。第1トレンチでは、床土の下に長岡京期の遺物を含む灰褐色粘質土層が約 0.2 m 存在し、この層を除去して黄褐色粘質土層の地山となり、この面で西一坊大路の西側溝と推定される南北溝 (SD 16503) や長岡京期の土坑 (SK 16501)・ピット等を検出した。これらの遺構を掘りあげ、写真撮影・遺構実測等を終え、断ち割りの小トレンチを入れて土層図の作成等を行った後、6月3日に埋め戻し、第1トレンチの調査を終了した。

第2トレンチは、トレンチ西端部や東端部に近世から現代の攪乱があり、5月30日からまずこの攪乱の除去作業に入った。このトレンチでは、近世から近代の遺物を含む褐色土層の下に濃褐色粘質土の長岡京期の遺物包含層が約 0.15 m 存在し、この層を除去すると暗黄褐色粘質土層となり、この層の上面で西一坊大路東側溝と推定される南北溝 (SD16507) 等を検出した。この暗黄褐色粘質土層は、厚さ約 0.1 m で、この層の下に地山の黄褐色粘質土層が存在し、長岡京期に整地を行った際の客土かと思われる。

その後、遺構を掘りあげ、写真撮影・遺構実測等を終え、6月6日に関係者説明会を開い



第2図 調査地周辺図

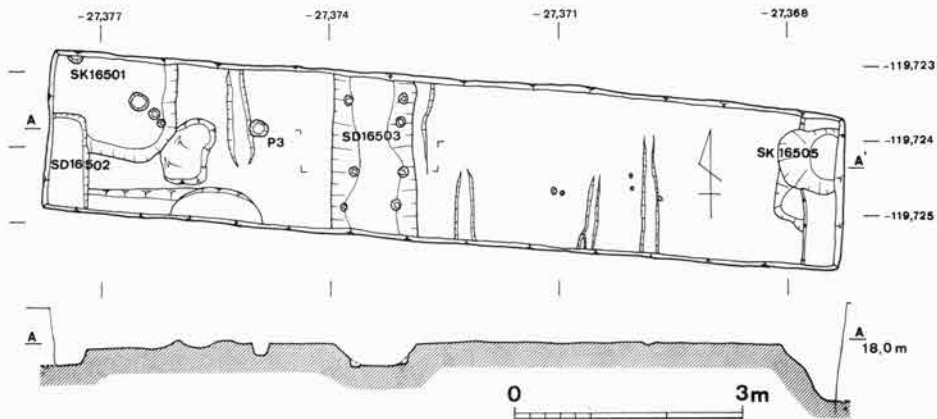
た後、断ち割りの小トレンチを入れて土層図作成等を行い、6月8日に第2トレンチを埋め戻した。そして、資材等の運搬や周辺の地形測量等を行い、6月14日に現地調査を終了した。

3. 検出遺構

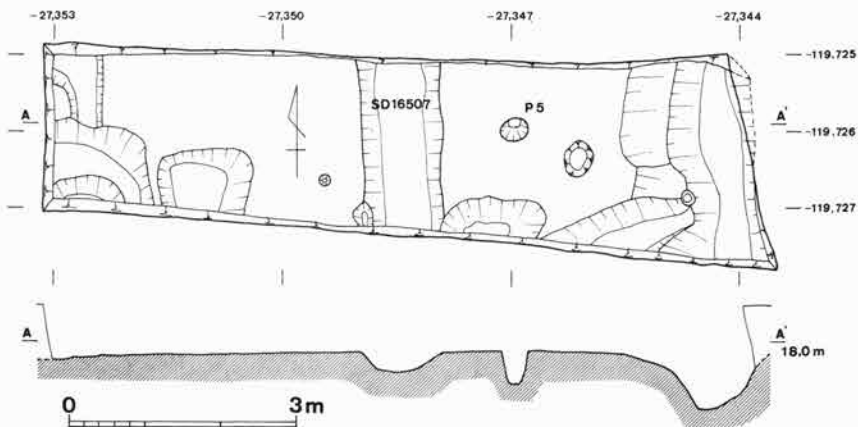
第1トレンチで検出された遺構には土壇2か所(SK16501・SD16504)、溝2条(SD16502・SD16503)およびピット数か所がある。ほかに、中世に属すると思われる溝も数条検出されている。第2トレンチでは、近世から現代にかけての攪乱が著しく、溝1条(SD16507)とピット数か所とが検出されただけであった。

以下、各遺構の概要を記述する。

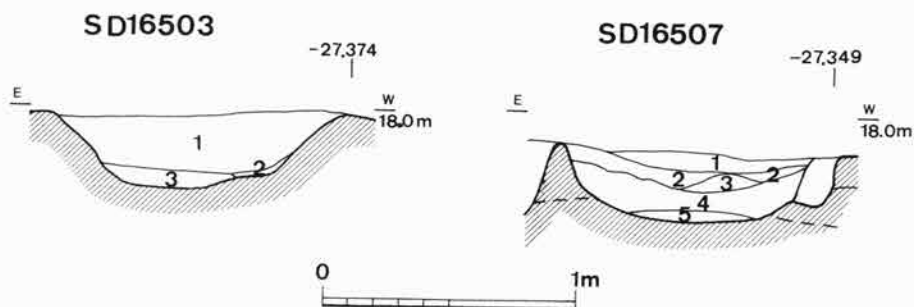
SK16501 第1トレンチ北西辺部で検出した。トレンチ外に延びており規模は不明である。深さは約0.1mを測る。土壇内には暗褐色の粘質土が堆積しており、長岡京期の土師器・



第3図 第1トレンチ実測図



第4図 第2トレンチ実測図



第 5 図 SD16503・16507 土層図

SD16503

1. 暗褐色粘質土層
2. 暗褐色粘質土層（黄褐色粘質土を含む）
3. 灰色砂層

SD16507

1. 褐色砂質土層
2. 暗褐色粘質土層
3. 暗褐色砂質土層（礫を含む）
4. 暗褐色土層
5. 暗褐色砂質土層（黄褐色土混じる）

須恵器などが出土した。

SD 16502 第 1 トレンチ西辺部で東肩部を検出した。深さは約 0.2 m を測る。溝内には暗褐色の粘質土が堆積しており、長岡京期の土器類が若干出土した。土塚 SK 16501 との時期差はほとんど認められない。しかし、重複関係から土塚 SK 16501 よりも古いことが判る。

SK 16503 南北方向の素掘りの溝で、約 2.1 m にわたって検出した。幅約 1.1 m・深さ約 0.3 m を測る。埋土は 2 層に分かれ、上層に暗褐色粘質土があり、下層に薄く砂礫が堆積していた。遺物の大半は砂礫層から出土したもので、長岡京期の土師器や須恵器・土馬などがある。

また、溝内には両肩部から約 0.15~0.3 m の地点に径 0.1~0.15 m、深さ 0.1 m 程度のピット列を検出した。このピット列は、間隔は不揃いであるが、東西のものがほぼ対応して並んでいる。土留用の杭あるいは橋などの溝に付属した何らかの施設が考えられる。

なお、国土地標値から溝 SD 16503 は、溝 SD 7709 および溝 SD 7708 の延長線上に載るもので、^(注5)西一坊大路西側溝にあたると思われる。

SK 16505 径約 1.2 m・深さ約 0.7 m を測り、第 1 トレンチの東辺部で検出した。埋土は 2 層に分かれる。上層は褐色土で、下層は黄褐色粘質土(地山)が混入した褐色土であった。遺物はまったく含まれておらず、時期は不明である。

SD 16507 南北方向の素掘りの溝で、約 2.2 m にわたって検出した。幅約 1.1 m・深さ約 0.3 m を測る。溝内の埋土は 5 層に分かれる。第 1 層は礫を含む褐色の砂質土である。第 2 層は暗褐色粘質土で、第 4 層はやや砂質の暗褐色土となっている。第 3 層は礫を含んだ褐色砂質土で第 2 層と第 4 層との間にレンズ状に堆積している。第 5 層は黄褐色土の混じった暗

褐色の砂質土である。遺物の大半は、第2層および第3層から出土しており、土師器・須恵器などがある。時期は長岡京期のものである。

国土座標値から溝SD 16507は、溝SD 7701の延長線上に載るもので、西一坊大路東側溝にあたると思われる。^(注6)

その他の遺構 大路東西側溝に予想される溝SD 16507および溝SD 16503から宅地側へ約1mの地点に P 3 および P 5 がある。P 3 は径約0.2m・深さ約0.15mを測り、P 5 は径約0.3m・深さ約0.5mを測る。いずれも1か所のみ検出しただけで詳細は不明であるが、柵などの構造物が存在した可能性も考えられる。

4. 出土遺物

今回の調査では、SD 16503・16507 を中心に、長岡京期の須恵器・土師器・瓦等が出土した。以下遺構別に出土遺物について説明する。

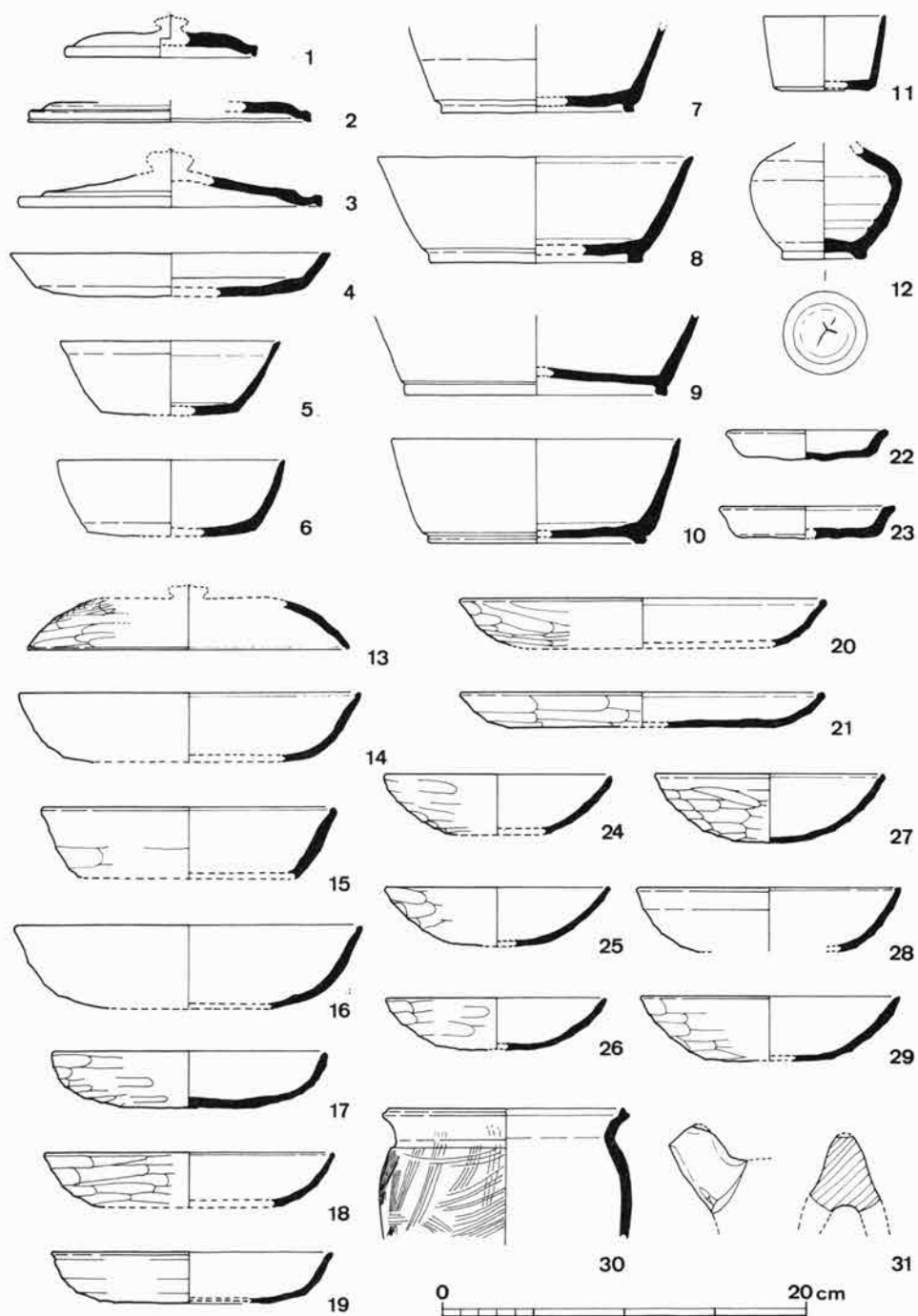
SK 16501 出土遺物 この土塚からは、須恵器の蓋・杯(6)、土師器の椀・甕(30)等が出土した。6は、口径12.4cm・高さ4.2cmを測り、平底の底部からやや内彎気味に外上方に伸びる体・口縁部を持つ。内面及び体・口縁部外面には回転なでを施す。30は、口径12.8cmを測り、くの字状に外反する口縁部を持ち、端部を内側に肥厚させる。体部外面に荒く刷毛目を施し、口縁部内外面には横なでを行っている。

SD 16502 出土遺物 須恵器の蓋(1)・杯等が出土した。1は、口径10.6cmを測り、平坦な天井部と屈曲する縁部からなる。内外面回転なでを施す。

SD 16503 出土遺物 須恵器の蓋(2)・皿(4)・杯(5・7・8)・壺(12)・甕、土師器の蓋(13)・杯(14)・皿(17・20)・椀(24~28)・甕、土馬(31)等が出土した。

2は、口径16.7cmを測り、平坦な天井部と屈曲する縁部からなる。4は、口径17.6cm・高さ2.4cmを測り、平底の底部と短く外上方に立ち上がる口縁部からなり、端部に水平な面を有する。内面及び口縁部外面は回転なでを施す。5は、口径10.1cm・高さ4.1cmを測り、平底の底部から外上方に開く体・口縁部を持ち、端部は尖り気味に丸くおさめる。体・口縁部の内外面に回転なでを施す。7・8は、体・底部の境いやや内側に高台を付し、体・口縁部は外上方に開く。8は、口径17.3cm・高さ5.7cmを測り、口縁端部をやや尖り気味に丸くおさめる。いずれも体・口縁部内外面に回転なでを施す。12は、倒卵形の体部を持ち、底部に貼り付け高台を有する。口頸部を欠失するが、体部最大径が体部高を上回るものである。体部最大径は、体部中央よりやや上にあり、底部外面に篋記号を持つ。

13は、口径17.6cmを測り、外面は篋削りの後篋磨きを加えている。14は、口径18.8cm



第6図 出土遺物実測図

1~12: 須恵器 13~30: 土師器 31: 土馬 6・30: SK 16501出土 1: SD 16502出土
 2・4・5・7・8・12~14・17・20・24~28・31: SD 16503出土 3・9・10・15・16・18・
 19・21~23・29: SD 16507出土 11: 包含層出土

を測り、口縁端部を内側にやや肥厚させる。外面には篋削りを施していた模様である。17は口径15.1cm・高さ3.1cm、20は、口径19.9cmを測る。内彎気味に外上方に広がる口縁部を有し、17は端部を丸くおさめ、18は内側に肥厚させる。いずれも外面篋削りを施している。24～27は、口径12～12.5cmを測り、丸底乃至は小さな平底から内湾気味に外上方に開く体部および口縁部を持つ。27は、端部をわずかに内側におりまげ、他は丸くおさめている。28は、口径17.5cmを測り、端部をやや内側に肥厚させる。24～28はいずれも外面篋削りを施すが、27は、口縁部外面に削り残しの横なでが見られる。31は、土馬の頸部で、他は欠失している。現存長4.2cm・現存幅3.6cmを測る。他に高台を有する土師器の杯の破片も数片出土している。

SD 16507 出土遺物 須恵器の蓋(3)・杯(9・10)・壺・甕、土師器の杯(15・16)・皿(18・19・21～23)・椀(29)・甕等が出土している他、瓦や製塩土器も若干認められる。

3は、口径16.6cmを測り、平坦な天井部と屈曲する縁部からなり、口縁部内外面に回転なでを施す。9・10は、体・底部の境いのやや内側に高台を付し、10は、口径15.8cm・高さ5.8cmを測る。体・口縁部内外面は回転なでを施す。

15・16は、口径18.7cmと19.1cmを測り、15は、端部を内側にやや肥厚させ、外面調整は口縁部に横なでを行い、体部以下に篋削りを施す。18・19は、口径14.7cmと15.3cm・高さ3cm前後を測り、21は、口径19.8cm・高さ2cmを測る。平坦な底部と内湾気味に外上方に開く口縁部からなり、21は端部を内側に肥厚させる。18もわずかに肥厚させ、19は丸くおさめる。18・21は、外面篋削り。19は、口縁部外面に横なでを施し、底部外面篋削りをする。22・23は、口径9cmと9.7cm、高さ1.6cmと1.8cmを測る小型の皿で、口縁端部を外反させ、口縁部外面に横なでを施す。端部に炭の付着が認められるものがある。29は、口径14.1cm・高さ3.6cmを測り、小さな平底から内彎気味に開く体・口縁部を持つ。外面には篋削りを施している。

製塩土器は、器壁が比較的薄く、胎土は密で砂粒を含んでいる。この他、河内産と思われる胎土をしたかまどの破片も出土している。なお、土師器の線刻土器は認められなかった。

その他の出土遺物 包含層から、須恵器の杯(11)・蓋・甕、土師器の椀・皿・瓦等が出土した。11は、口径6.3cm・高さ4.2cmを測り、平底の底部からやや外傾して上方に延びる。瓦は、平瓦片・丸瓦片が少量出土し、1点のみであるが格子目叩きを有する平瓦片が出土した。

他に、床土や中・近世の遺構から、瓦器や近世陶磁器、棧瓦が若干出土している。

5. 小 結

今回の調査では、既述したように、右京第77次調査で検出した西一坊大路の東西両側溝—SD 7701 及び SD 7708・7709—の北への延長を確認することができた。なかでも、SD 7708・7709の延長上に SD 16503 を明瞭な形で検出したことなど、前回の調査成果をさらに裏付ける一資料となるであろう。今回検出した西一坊大路東西両側溝と推定される南北溝(SD 16503・16507)は、いずれも幅1m前後を有し、溝心々間で24.9m、溝の両肩での路面幅は、23.8mを測る。溝の埋土や遺物の出土状況は、SD 16503とSD 16507でやや様相を異にし、水の流れていた状況及び溝の埋積過程に差があったことが判る。東側溝であるSD 16507の方が、比較的早く埋積が始まり、水の流れも弱かった模様である。

出土遺物については、両溝とも同様なものが出土しているが、SD 16503には、燈明皿として使用されたとと思われる小形の皿等が含まれないなど若干の相違がある。この相違は西一坊大路の両側の宅地(右京六条一坊十六町と六条二坊一町)の性格の違いをあらわすものであろうか。また、右京第77次調査での出土遺物と比べて、土師器の線刻土器が認められなかったことを除き、供膳形態のものが大半を占め、土師器の杯を中心に口縁外面に横なでを行っているものがある程度見られるなど、器種構成や調整手法において同様の傾向を示している。

SD 16503で検出したピット列は、東西のものが対応して存在することや直線的に並ばず、肩の斜面に位置するものがあることなどから、橋脚の一部である可能性が考えられるが、断定するには至らない。現時点では、橋乃至は護岸等の施設があったものと指摘するにとどめたい。また、SD 16503・16507の宅地側約1mのところ検出したピット(P-3・P-5)も、宅地を囲む柵列の可能性はあるが、推測の域を出るものではない。

今回の調査は、トレンチ幅も狭く、面積も狭小であり、検出した遺構もごく限られた範囲でしかない。まだまだ不明な点も多く、今後の調査に期待したい。

(山口 博・三好 博喜)

注1 山本輝雄・木村泰彦「長岡京跡右京第77次(7ANKSM地区)調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第9冊 長岡京市教育委員会)1982

注2 黒坪一樹「長岡京跡右京第148次(7ANKHTの2地区)」(『京都府埋蔵文化財情報』第11号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1984

黒坪一樹「長岡京跡右京第148次調査概要(7ANKHT-2地区)」(『京都府遺跡調査概報』第11冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1984

注3 戸原和人「産業文化会館建設に伴う発掘調査概要—長岡京跡右京第11次調査(7ANKUT地区)—」(『長岡京市文化財調査報告書』第5冊 長岡京市教育委員会)1980

木村泰彦「長岡京跡右京第96次(7ANKUT-4地区)調査概要」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和57年度(財)長岡京市埋蔵文化財センター)1983

木村泰彦他「長岡京跡右京第96次調査概要 (7ANKUT-4 地区)」(『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第1集 (財)長岡京市埋蔵文化財センター)1984

注4 岩崎 誠「長岡京跡右京第155次 (7ANKST 地区) 調査概要」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和58年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター)1984

注5 S D16503 と S D7708・7709 の国土座標値は下記のとおりである。

S D 7708	X = -119,812.4	Y = -27,373.5	標高 16.88 m
7709	X = -119,777.6	Y = -27,373.4	// 16.88 m
16503	X = -119,724	Y = -27,373.5	// 17.76 m

注6 S D16507 と S D7701 の国土座標値は下記のとおりである。

S D 7701	N	X = -119,769.6	Y = -27,348.8	標高 17.05 m
	S	X = -119,803.8	Y = -27,349.0	// 16.749m
16507		X = -119,726.2	Y = -27,348.6	// 17.598m

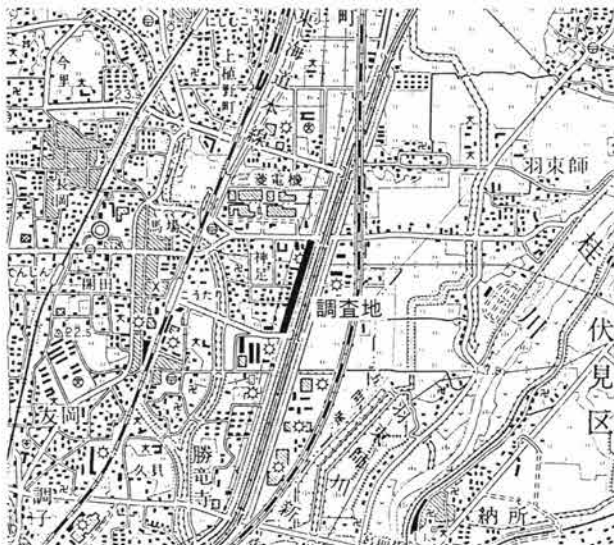
2. 長岡京跡左京第115次発掘調査概要

(7ANMKK地区)

1. はじめに

この調査は、京都府長岡京市の東部を南北に縦貫する国道171号の歩道設置工事計画に先立ち、建設省近畿地方建設局京都国道工事事務所の依頼を受けて、当調査研究センターが行った発掘調査である。調査対象地は、国道の上り車線に沿って、延長約650mにわたる区間であった。該当する字名は、大字馬場小字六ノ坪、大字神足小字上八ノ坪・四反田・麦生・雲宮・大張の6か所におよぶ。この付近は、標高12~14mを測る沖積地で、本来、水田や畑地として利用されていた地域である。ところが近年、店舗・住宅・工場などの建設が著しく、国道に沿って農耕地が残されている部分は減少してきている。発掘調査は、歩道工事幅・工法・地下埋設管などを考慮して、農地に隣接した部分について掘削した。そのほかの部分については立会調査を実施した。

調査対象地は、長岡京跡の条坊復元によれば、左京の五条二坊と六条二坊との西部にあたる。実際に掘削した地点は、長岡京跡の五条二坊三町にあたる神足小字上八ノ坪、六条二坊一・二町にあたる雲宮、および東一坊大路に近い大張の3か所である。また、この付近は、長岡京跡の範囲に含まれるとともに、弥生時代の雲ノ宮遺跡としても知られている地域である。ここ



第7図 調査地位置図(1/50,000)

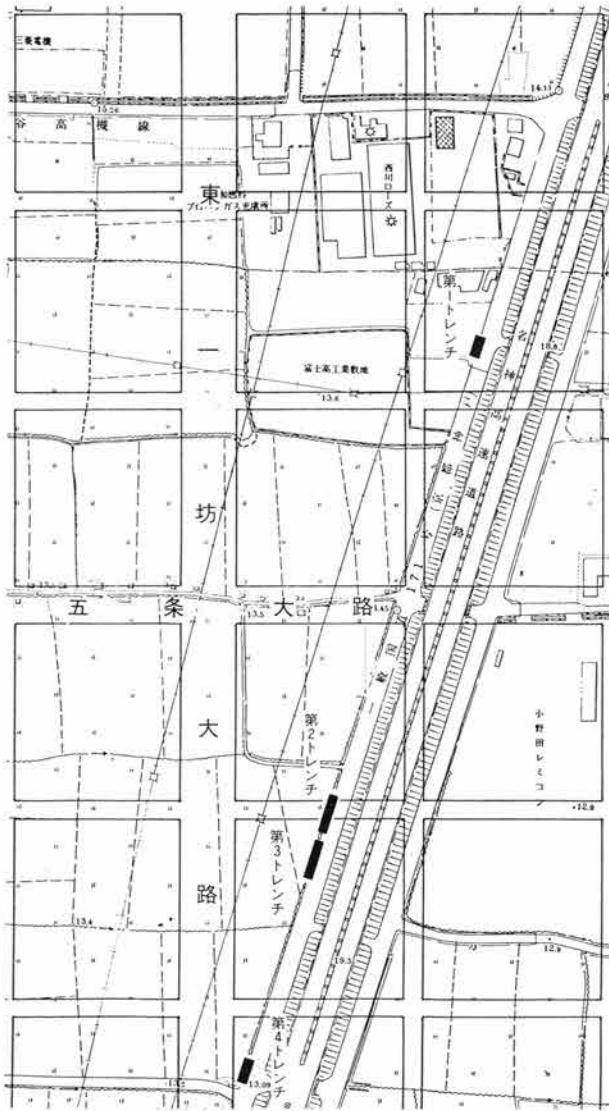
では、名神高速道路建設の際の
(注1) 調査や、(注2) 左京第18次・35次調査などによって、弥生時代前期から後期の土器や石器・木製品など、多量の遺物が出土している。歩道設置工事に伴い、昨年度調査を行った左京第103次調査においても、瓦器などの遺物や古墳時代前期の遺物を検出している。

調査は、長谷川 達・三好博喜が担当し、昭和59年9月21日から同年10月29日まで、断続的に行った。

なお、調査に際しては、長岡京市教育委員会・財団法人長岡京市埋蔵文化財センターをはじめ、御協力をいただいた方々には、改めて御礼申し上げます。
(注3)

2. 調査概要

調査対象地に設けたトレンチは、歩道設置という工事の性格上、道路に沿った細長いものになった。さらに、埋設管や標識・電柱などの保護や、盛土崩落の防止・排水などの対策を



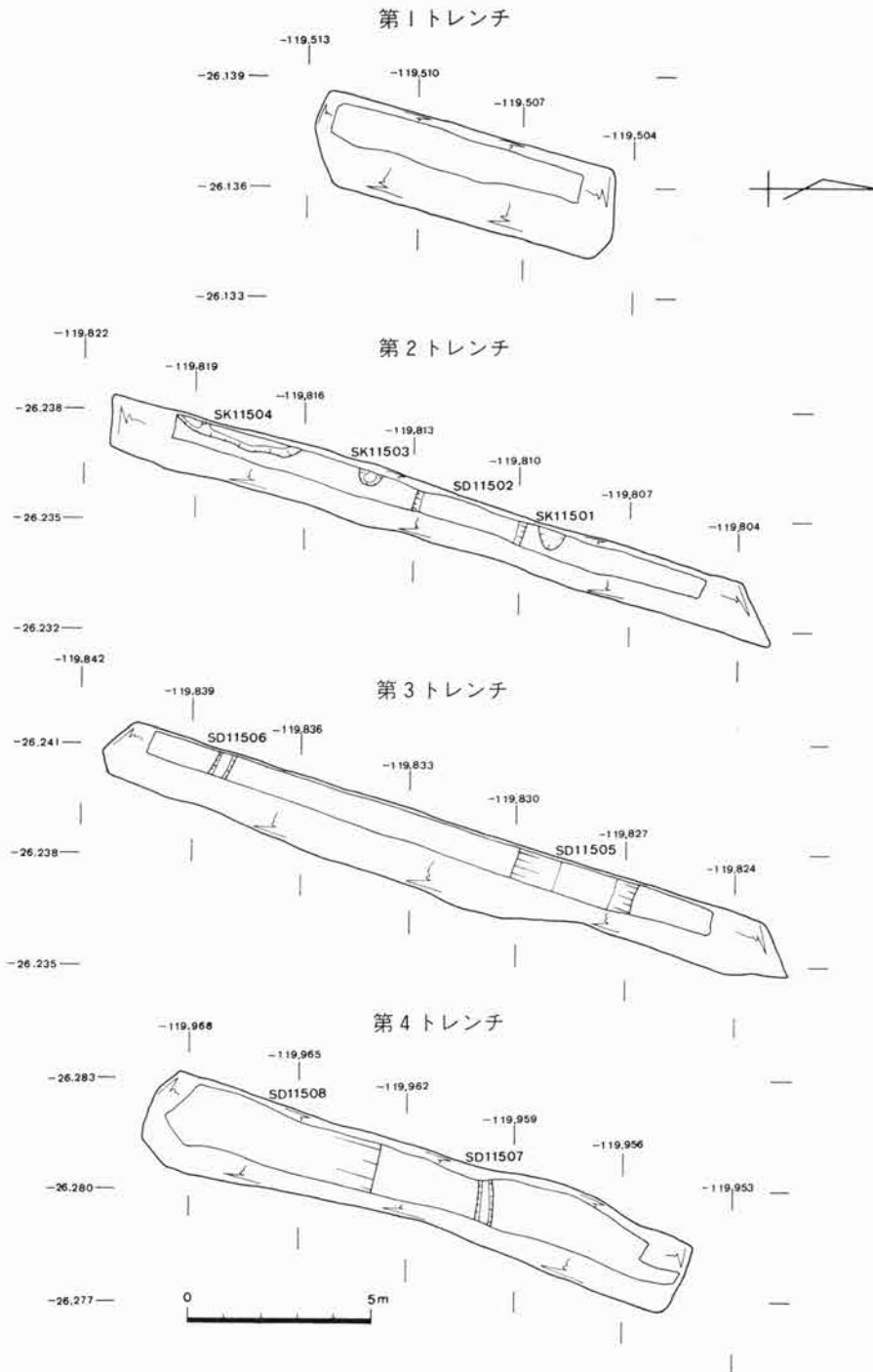
第8図 トレンチ位置図 (1/5,000)

講じなければならなかった。

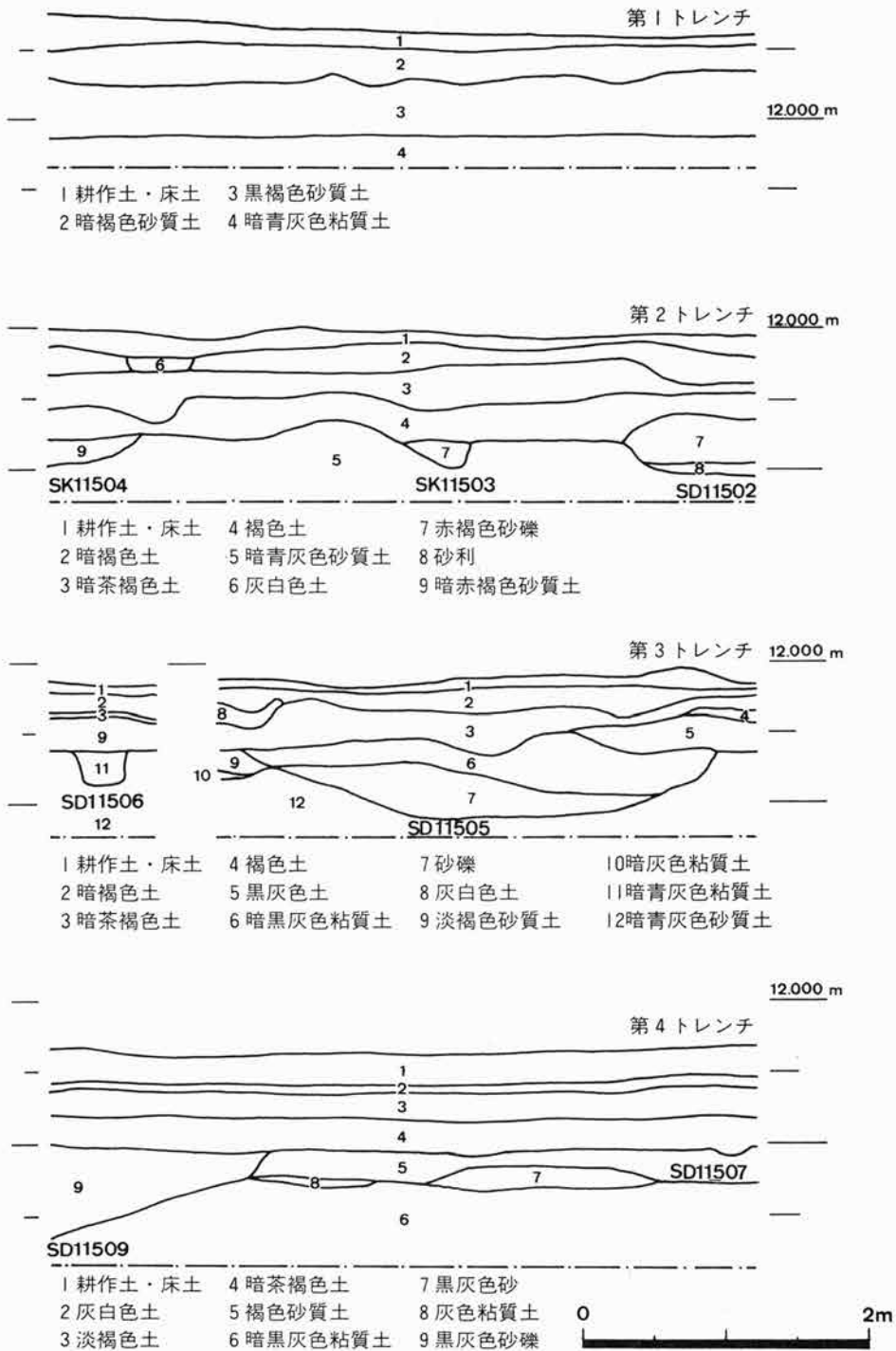
このため、検出された遺構は、非常に断片的なものとなった。

調査は、全長約 650 m の工事区間のうち、水田・畑地に隣接した3地点について4本のトレンチを設けて行った。

第1トレンチは、9月21日に重機掘削を行った後、人力による掘削を進め、9月28日に調査を終了した。トレンチの長さは約8.5m・幅は約2.4mを測る。基本的な土層は、約1mの盛土の下に耕作土・床土・暗褐色砂質土・黒褐色砂質土・暗青灰色粘質土の順で堆積していた。暗青灰色粘質土は、湿潤な状況を呈し、調査中は湧水に悩まされた。このため、掘削・精査作業は困難を極めた。調査の結果、暗青灰色粘質土の上面で暗黒灰色の汚れを認めたが、自然地形の微妙な起伏と判断した。土層断面の観察によっても遺



第 9 図 ト レ ン チ 平 面 図



第10図 トレンチ西壁断面図

構の存在は確認できなかった。遺物については、まったく出土していない。

第2トレンチおよび第3トレンチは、9月25日に重機による掘削を行った後、人力による掘削を進めた。第2トレンチは10月5日、第3トレンチは10月6日にそれぞれ調査を終了した。この地点における基本的な土層は、約90cmの盛土の下に、耕作土・床土・暗褐色土・暗茶褐色土・褐色土・暗青灰色砂質土の順で堆積していた。

第2トレンチは、長さ約19.4m・幅約1.5mを測る。ここでは、盛土部分が砂利であったため、盛土の崩落が続いた。そのうえ、湧水もあり、調査は困難を極めた。しかし、約0.7m掘り下げた暗青灰色砂質土の上面で、土壇状の落ち込みを3か所(SK11501・SK11503・SK11504)、溝状の落ち込みを1か所(SD11502)を検出することができた。遺物は、弥生土器・土師器・須恵器が少量出土しただけで、土壇状あるいは溝状の落ち込みに伴うものはなかった。

第3トレンチは、長さ約19.6m・幅約1.8mを測る。ここは湧水も少なく、比較的順調に作業が進んだ。約0.6m掘り下げた暗青灰色砂質土の上面で、溝状の落ち込み2か所(SD11505・SD11506)を検出することができた。遺物は、弥生土器・土師器・須恵器が出土している。その大半は、溝SD11505から出土したものであった。

第4トレンチは、10月15日に重機による掘削を行った後、人力による掘削を進め、10月23日に調査を終了した。トレンチの長さは約15.3m、幅は約2.0mを測る。基本的な土層は、約1mの盛土の下に、耕作土・床土・灰白色土・淡褐色土・暗茶褐色土・褐色砂質土・暗黒灰色粘質土の順で堆積していた。調査の結果、約0.7m掘り下げた褐色砂質土の上面で、溝状の落ち込み1か所(SD11507)を検出した。また、約0.9m掘り下げた暗黒灰色粘質土の上面でも溝状の落ち込み1か所(SD11508)を検出することができた。遺物は、土師器・須恵器が少量出土している。

なお、測量作業は、掘削作業の合間を見て、断続的に行い、10月29日にはすべての調査を完了した。

3. 検出遺構

土壇 SK 11501

第2トレンチ中央付近で東側の一部を検出した。径約0.8m・深さ0.12mを測る土壇状の落ち込みである。暗青灰色砂質土に赤褐色砂礫が堆積したもので、遺物は出土していない。自然地形の落ち込みとも考えられる。

溝 SD 11502

第2トレンチ中央で検出した東西方向に走る溝状の落ち込みである。幅約3.15m・深さ

約0.16mを測り、長さ約0.6mにわたって検出した。暗青灰色砂質土の落ち込みに褐色砂礫が堆積したもので、遺物は出土していない。

土壇 SK 11503

第2トレンチの中央付近で東側の一部を検出した。暗青灰色砂質土に赤褐色砂礫が堆積した土壇状の落ち込みである。径約0.6m・深さ約0.2mを測る。遺物の出土はみられなかった。土壇SK 11501同様、自然地形の落ち込みとも考えられる。

土壇 SK 11504

第2トレンチの南側で東端の一部を検出した。規模・平面形などは確定できていないが、深さは約0.28mを測る。暗青灰色砂質土に掘り込まれたもので、暗赤褐色砂質土が埋土であった。遺物は含まれていなかった。

溝 SD 11505

第3トレンチの北側で検出した東西方向に走る溝状の落ち込みである。幅約3.4m・深さ約0.5mを測り、長さ0.9mにわたって検出した。埋土は2層であった。上層には0.3m程度の暗黒灰色粘質土があり、下層には砂と礫との互層が約0.2m堆積していた。遺物のほとんどは、下層の砂礫層から出土したもので、弥生土器・土師器・須恵器などがある。遺物の出土状況には層位的な新旧関係がなく、すべてが混在した状態で出土している。遺物の時期は、弥生時代から奈良時代にかけてのものがあり、かなりの時期差がある。このような遺物の様相から、溝SD11505出土の遺物は、外からの流れ込みと判断した。溝の時期については、特定し難い。

溝 SD 11506

第3トレンチの南側で検出した東西方向に走る溝状の落ち込みである。幅約0.4m・深さ約0.3mで、U字状を呈する。長さ約0.7mにわたって検出した。埋土は暗青灰色粘質土である。遺物は、土師器の細片がわずかに出土しただけであった。

溝 SD 11507

第4トレンチの北側で検出した。褐色砂質土に暗茶褐色土が堆積したものである。幅約0.4m・深さ約0.1mを測る東西方向の溝で、長さ約1.2mにわたって確認した。遺物は出土していない。

溝 SD 11508

第4トレンチの南端で、北側肩部のみを検出した。規模は不明であるが、深さは約0.7mを測る。全体に黒灰色砂礫が堆積し、上層に暗茶褐色砂礫がわずかにのっていた。遺物は土師器の細片が少量出土した程度であった。

4. 出土遺物

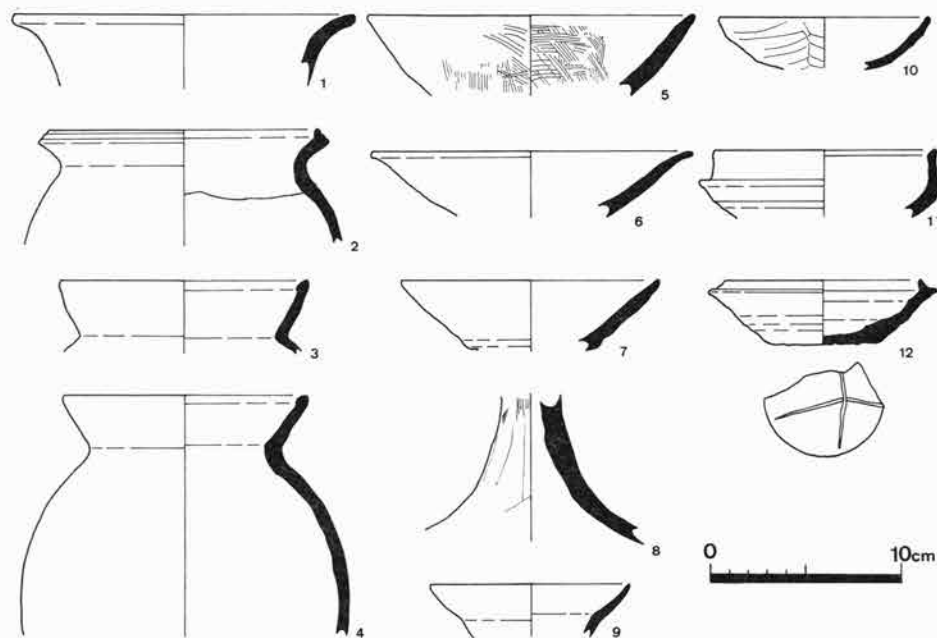
今回の調査を通して出土した遺物には、弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・陶磁器類がある。各トレンチともに、床土以下で散発的に出土したが、時期の限定された包含層はない。比較的まとまって出土したのは、第3トレンチの溝SD11505で、総出土量のほぼ半数を占める。しかし、ほとんどが細片であったため、図示し得る土器は少ない。以下、溝SD11505出土の遺物を中心として、若干の説明を加えることにする。

溝SD11505出土遺物（第12図2・3・5～8・10・11）

2は暗茶褐色の色調をもつ甕の口縁部である。口径は推定で14cmを測る。口縁端部を上方に拡張し、2条の浅い凹線を施す。磨滅のため細部の調整は不明瞭であるが、胴部内面にケズリ痕および指頭圧痕が残る。生駒西麓の胎土をもち、弥生時代後期に属する。

3は布留式甕の口縁部である。口径は推定で12.8cmを測る。形状は、頸部でくの字状に外反したのち、口縁端部でやや内湾する。また、端部内側を折り返しにより肥厚させている。全体に淡赤褐色を呈し、外面にはススの付着がみられる。

5～8は高杯である。5～7は杯部であるが、磨滅が著しく、調整の知れるものは5だけである。5は内外ともに粗いハケ調整がなされている。8は脚部である。全体にヘラケズリ調整され、杯部との接合部付近にはハケ調整が施されている。



第11図 出土遺物実測図

2・3・5～8・10・11：SD11505 9：SD11506 1：第2トレンチ 12：第3トレンチ
4：第4トレンチ 1・2：弥生土器 3～10：土師器 11・12：須恵器

10は土師器の杯身で、口径は推定11.8cmを測る。外面はヘラケズリによって調整されており、口縁端部には油煙痕が残る。長岡京期前後のものである。

11は須恵器の杯身である。口径は推定11.8cmを測る。立ち上がりは、内傾した後、直立してのびる。端部は内傾し、平面を成す。受部は上外方へのび、先端は丸みをもつ。

各トレンチ出土遺物(第12図1・4・9・12)

第2トレンチから出土した遺物には1がある。1は壺の口縁部で、口径は推定18cmを測る。口縁部は大きく外反し、端部は丸くおさまる。胎土には長石・石英・チャートなど、2～3mmの砂粒を多く含んでいる。色調は乳白色を呈している。全体に磨滅が著しく、細部の調整は不明である。

9・12は第3トレンチ出土の遺物である。9は小型丸底壺の口縁部で、溝SD11506から出土している。口径は推定10.4cmを測る。全体に黒褐色を呈し、薄手である。磨滅が著しく調整は不明である。12は須恵器の杯身で、口径10.2cm・器高3.3cmを測る。立ち上がりは内傾し、端部は鋭い。受部はほぼ水平へのび、端部は丸みをもつ。底部部は浅く、平らである。焼成は不良で、赤褐色を呈している。このため磨滅しており、細部の調整は不明瞭である。底部外面にはヘラ記号をもつ。

4は第4トレンチから出土した布留式甕である。口径は約13.0cmを測る。色調は暗赤褐色を呈し、磨滅が特に著しい。暗黒灰色粘質土層の上部から出土した。

5. おわりに

今回の調査では、東西方向に走る溝状の落ち込みが数条検出できた。しかし、調査の性格上、これらの遺構は、あまりにも断片的であるため、その形成・磨滅された時期や性格などについては不明な部分が多い。このように、当初予想した長岡京跡・雲ノ宮遺跡に関連する明確な遺構は検出できなかったが、溝SD11505から出土した遺物のあり方は、弥生時代、古墳時代などの集落が近くに存在することを暗示するものである。昨年度の長岡京跡左京第103次調査から通して、遺物に限って見れば、弥生時代から鎌倉時代の極めて長期にわたるものが存在している。西方に確認されている古市芝本遺跡との関連も含め、今後の近傍における調査に対して留意事項を提示したものと見える。

(三好 博喜)

注1 佐原 真「山城における弥生式文化の成立—畿内第I様式の細分と雲ノ宮遺跡出土土器の占める位置」(『史林』50-5) 1967

注2 山中 章ほか「第Ⅲ部 発掘と調査」(『日本考古学年報』31 1978年版) 1980

注3 補助員 浜口和宏 城田正博

3. 長岡京跡右京第171次発掘調査概要

(7ANIT T-10地区)

1. はじめに

この発掘調査は、長岡京市今里地区における都市計画道路(外環状線)改良工事に伴うものである。この道路改良工事は、長岡京市今里3丁目から4丁目にかけて、南北方向の道路を拡幅・新設するもので、総延長530m、幅員22m(一部25m)ある。

道路予定地は、北西から南東方向に流れる小畑川の西岸の氾濫原とその西方を南北に走る洪積台地の間を西から東に緩やかに傾斜する地形変換線に沿っている。道路建設に伴うこれ

までの調査によって、長岡京の条坊遺構、北方で弥生時代から古墳時代・平安時代の集落(今里遺跡)、中央部で5世紀前半の前方後円墳(今里車塚古墳)などが見つかった。

今回の調査地は、長岡京の西二坊大路にあたり、今里遺跡の南端、今里車塚古墳の北隣りに位置することから、それらに関する遺構の存在が予想された。このため、京都府教育委員会・当調査研究センターと京都府乙訓土木事務所の間で協議の後、発掘調査を実施することになった。



第12図 調査地位置図

現地調査は、昭和59年7

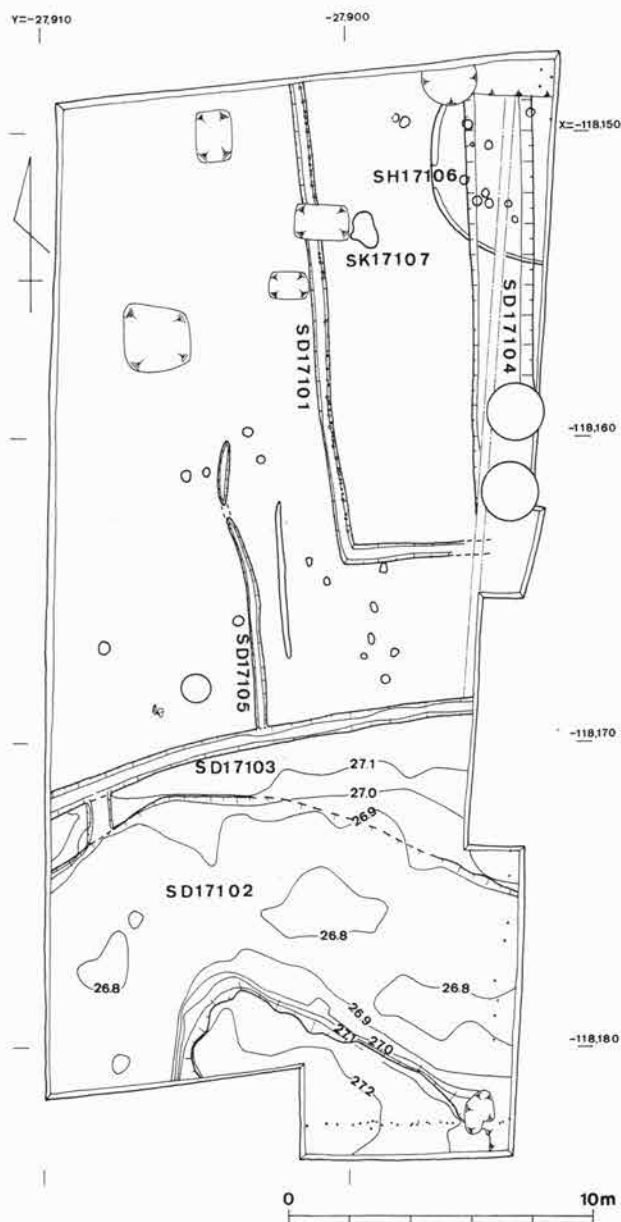
月9日から10月13日の期間に約500m²を調査した。調査は、当調査研究センター主任調査員長谷川 達、調査員石尾政信・三好博喜が担当した。

調査にあたって、京都府乙訓土木事務所、長岡京市教育委員会、財団法人長岡京市埋蔵文化財センター、向日市教育委員会、今里自治会、周辺土地所有者等の御協力を得た。

現地調査・資料整理には、諸大学学生諸氏等^(注1)の参加協力があった。石器については調査員黒坪一樹の協力を得た。

2. 調査概要

今回の調査対象地は、これまでの調査によれば7ANITT地区の北方部地区南端部の北端に位置し、民家が建っていた場所である。民家の移転した跡地で盛土や攪乱があるため、旧耕作土・床土を重機で掘削した後、人力で掘り進んだ。北方部分は、攪乱が著しいこと、地形が北西から南東に傾斜しているため西側は遺物包含層も薄く、すぐに地山とおもわれる黄褐色土(砂質)砂礫層が現われること、および長岡京西二坊大路の道路敷にあたるため遺構が少ない。トレンチ中央でL字に曲がる南北方向の溝(SD17101)と、西二坊大路東側溝(SD17104)が検出された。そして、西二坊大路東側溝の規模を明確にするため拡張を行った。この側溝の下から



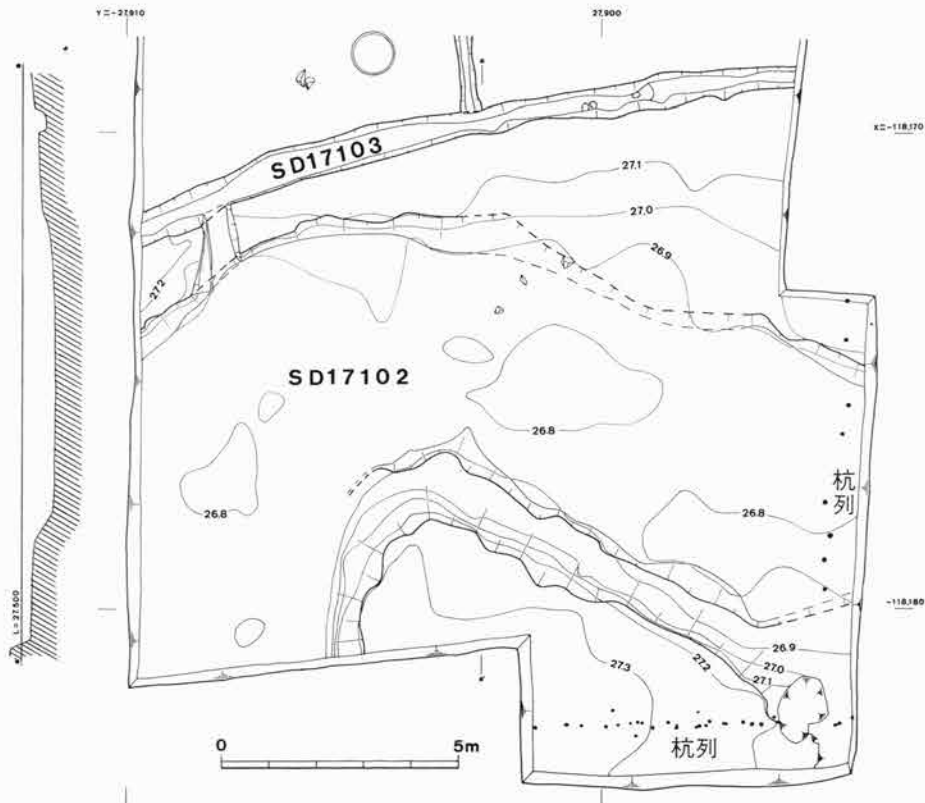
第13図 調査地平面図

住居跡(SH17106)も発見された。

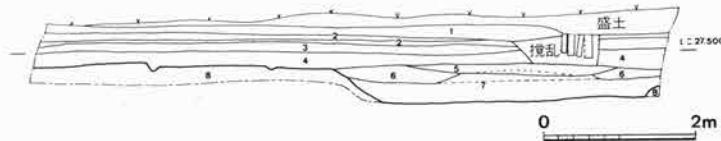
南方部分では、L字に曲がる幅の広い溝(SD17102)、その北方で東西方向の溝(SD17102)とこれに直交する浅い溝(SD17105)などが検出された。L字に曲がる溝は、右京26次調査で検出された北に向かってL字に曲がるSD1288^(注2)の延長であることが判明し、両者を合わせると古墳の前方部と考えられることから、くびれ部分の検出を目標に拡張を行ったが、近代溝・攪乱のためくびれ部分は明らかにならなかった。

今調査地の基本土層は、旧耕作土(第1層)、床土(第2層)の下に平安中期の遺物が多い灰褐色土(第3層)、長岡京期の遺物を含む褐色土・暗褐色土(第4層)、その下が黒褐色土・黄褐色土・砂礫層となる。暗褐色土層には、古墳時代・弥生時代の遺物も多い。

溝 SD 17101 トレンチ北方で検出された南北方向の素掘り溝で、中央部ではほぼ直角に東に曲がる。溝は、幅 40~60cm・深さ 10~15cm を測り、南北方向に約 15.5m、東西方向が約 4m にわたって検出された。溝の東側で杭跡が検出され、その間隔は不規則で短いものは 10~15cm である。溝からは、須恵器甕体部が出土しただけで、他にほとんど遺物がみられな



第 14 図 溝 SD17102 実測図

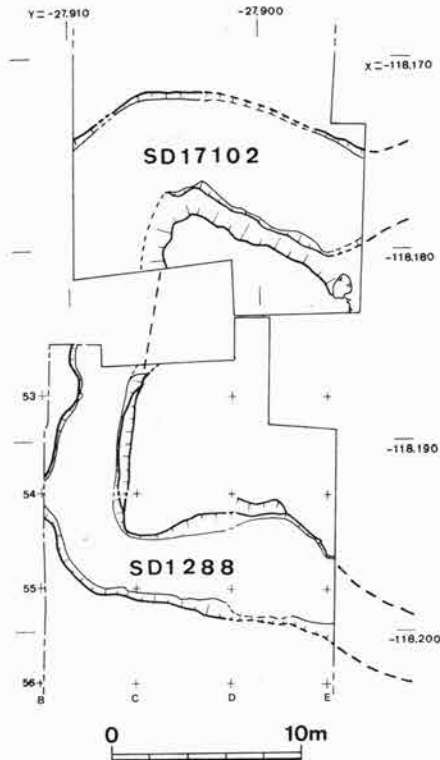


第 15 図 南壁，溝 SD17102 断面

1. 耕作土 2. 淡黄灰色土 2'. 黄灰色土(床土) 3. 灰褐色土
4. 褐色土 5. 暗灰・黄灰色砂礫層 6. 暗褐色土 7. 暗青灰色
粘質土 8. 黄褐色土

い。掘り込まれた土層からみて、長岡京期より古いものと思われる。

溝 SD17102 トレンチ南端で検出した周



第 16 図 古墳前方部実測図

濠状の溝で、南および北側掘形の西半分は黄褐色土層から掘り込まれているが、中央から東は南東に傾斜する地形と厚く堆積した暗褐色土層のため明瞭でない。溝幅は、上面で7m前後、基底部で5~6mを測り南壁断面では基底部幅が約3.5mある。

この溝は、SD1288の延長で、両者を図面上で結合すると古墳の前方部を廻る周濠となる。前方部幅は、基底部で9m強、くびれ部まで約4.5mとなる(推定くびれ部は墳丘裾がわずかに湾曲する)。そして、推定全長(周濠含む)は約40m程度とおもわれる。

溝の埋土は、上下2層に分かれ、上層が暗褐色土、下層が暗青灰色粘質土となる。この暗褐色土層には、弥生~長岡京期の遺物が含まれることから、周濠全体が長岡京期に埋め立てられたものとおもわれる。

溝中に人頭大の石数点、径10cm前後の石がみられるが、量も少なく、斜面に貼り付けた様子はみられない。

溝 SD17103 溝SD17102の北側で検出された東西方向の素掘り溝である。西で南に振られている。幅60cm前後・深さ20~30cmあり、長さ14mにわたって検出した。東部では溝の底に凹みがある。溝は、中央やや西より(Y=-27,905付近)が最も浅く、東および西に傾斜している。溝は、黄褐色土層より掘り込まれている。溝の埋土は、ほとんどが暗褐色土であるが、西部では下層に暗青灰色土がみられる。出土遺物に弥生~古墳時代のものがある。なお、西部で上層にSD17103付近から、SD17102にかけて溝状の砂礫層の広がりがある。

溝 SD 17104 トレンチ北東で検出された南北方向の素掘り溝である。幅 2.0～2.2 m・深さ 15～20 cm を測り、長さ 13 m 以上にわたって検出したが、溝の北端および南端は攪乱等のため検出できなかった。また、トレンチ南端は近代溝による攪乱のため不明である。溝中から出土する遺物は、ほとんどが小破片で量も少ない。

溝の中心座標は、北端で X = -118,150 の場合、Y = -27,894.85 前後となり、南部(7 ANIST 地区)で検出された西二坊大路東側溝 SD0732 の延長上にあることから、この溝も西二坊大路東側溝と判明した。

溝 SD 17105 この溝は、SD17103 に直交する浅いもので、北ではわずかに蛇行している。溝幅は 30～40 cm、深さは最も深い南端で約 15 cm を測る。検出した総延長は約 9.5 m である。遺物は小さく形のわかるものはない。

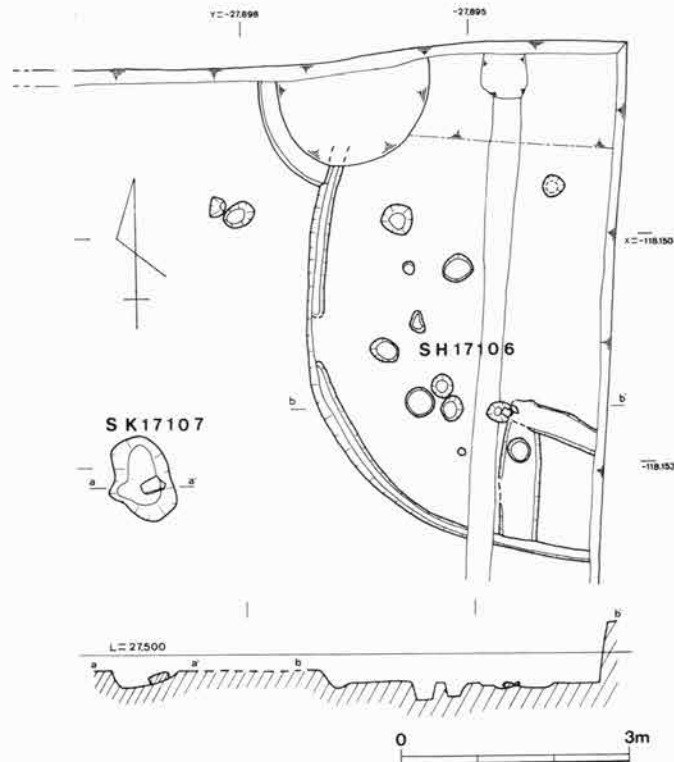
住居跡 SH 17106 トレンチ北端で、SD17104 の下層で検出した楕円形を呈した竪穴式住居跡である。復原径は 7 m 前後とおもわれる。周辺に浅い壁溝がめぐるが、西側で途切れる。検出面から床面まで深い部分で約 20 cm あり、柱穴は不規則に並び、時期の異なる柱穴が予想される。南側には、浅い溝状の凹みがある。

土壇 SK 17107 SH 17106 の西側で検出した不定形の土壇である。長径 1.1 m・短径 0.8 m・深さ約 20 cm を測る。少量の土器と人頭大の石が出土した。

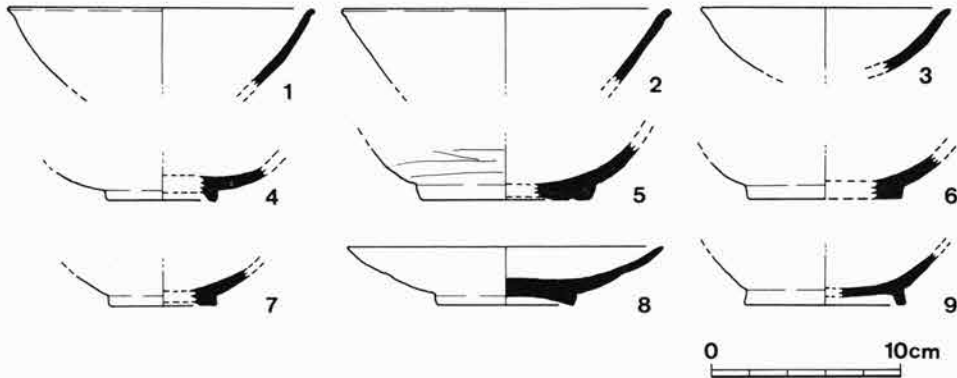
他に、中央付近でピット群が検出されたが、建物等については不明である。

3. 出土遺物

この調査で出土した遺物には、床土直下で瓦器等、灰褐色土層から緑釉等平安中期のもの、褐色土、暗褐色土層から弥生～長岡京期



第 17 図 住居跡 SH17016 実測図



第18図 遺物実測図(第3層)
1・4・7. 緑釉陶器 2・3・5・6・8. 須恵器(無釉陶器) 9. 青磁

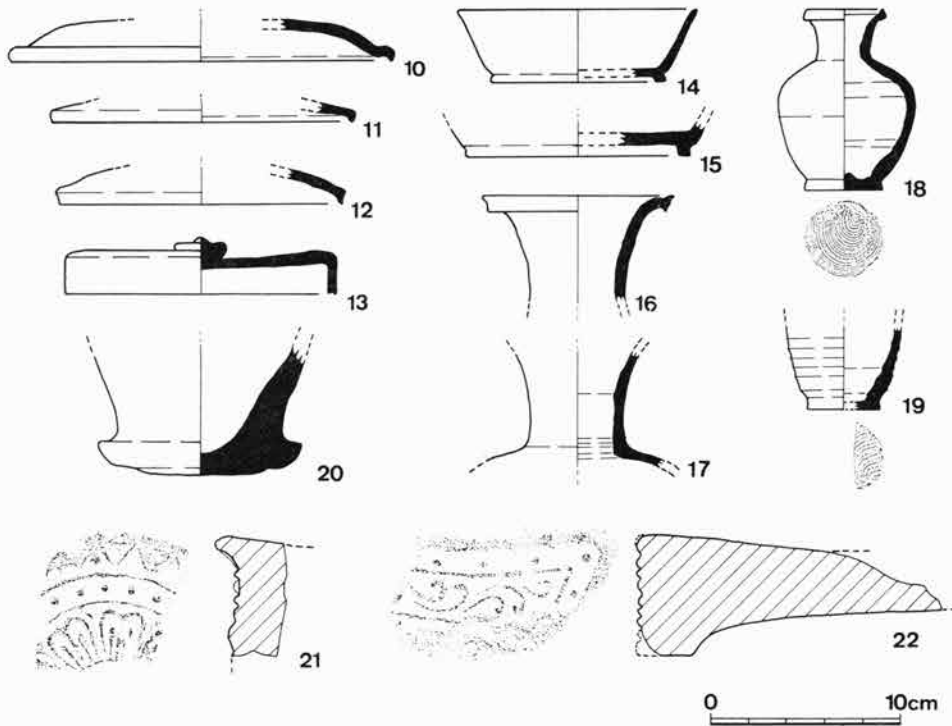
のもの、そして遺構にとまなうものがある。ここでは、上層のものから記述していくが、包含層の場合は時代の新しいものから取り扱う。

①灰褐色土(第3層)(第18図)

須恵器・土師器・緑釉・青磁などがある。(1)は、内湾ぎみの口縁部とわずかに外反する口縁端部から腕とおもわれる。外面に淡黄灰色の釉が残るが、ミガキは明瞭でない。焼成がやや甘く灰色を呈する。(2)は、直線的に外上方に開く口縁部で端部もほとんど外反しない。外面の調整はヨコナデの後、粗いミガキを行う。焼成は良好で暗灰色を呈し、胎土も精良である。(3)も腕とおもわれるもので、口縁外面の上半部をヨコナデの後、粗いミガキを行う。焼成・胎土とも良好である。(4～8)は、いずれも削り出し高台である。(4)は、焼成が良好で断面は暗灰色を呈し、釉薬は暗黄緑色に発色している。(7)は、焼成がやや甘く淡灰色を呈し、釉薬は淡緑色に発色している。また、緑釉陶器には、明緑色、黄緑色などのものがある。(8)は、胎土が緻密、焼成は甘く、口縁部外面の磨滅が著しく調整は不明である。器高 3.1 cm、復原径は 16.5 cm となる皿である。(9)は、やや細い高台の付く青磁碗である。焼成は良好、断面は淡灰色を呈す。釉薬は薄く暗黄灰色に発色している。中国越州窯系のものであろう。

②褐色土・暗褐色土層(第4層) 歴史時代の遺物(第19図)

この第4層は、褐色土・暗褐色土に明瞭に分けられる地域とそうでない地域、また、褐色土から暗褐色土へと徐々に色の変化がある地点があること、長岡京期の遺物が両者に含まれるため、同時に取り扱う。(10～12)は、須恵器の杯B・皿Bと組合わされる蓋である。蓋には、端部が屈曲するもの(10)、ほとんど屈曲しないもの(11・12)がある。(13)は、いわゆる薬壺の蓋である。口縁部は直立し、端部が外傾しないで凹み様になっている。天井部は平坦



第 19 図 遺 物 実 測 図 (第 4 層)

10~13. 須恵器蓋 14・15. 須恵器杯 16~19. 須恵器壺 20. 須恵器鉢
21. 軒丸瓦 22. 軒平瓦

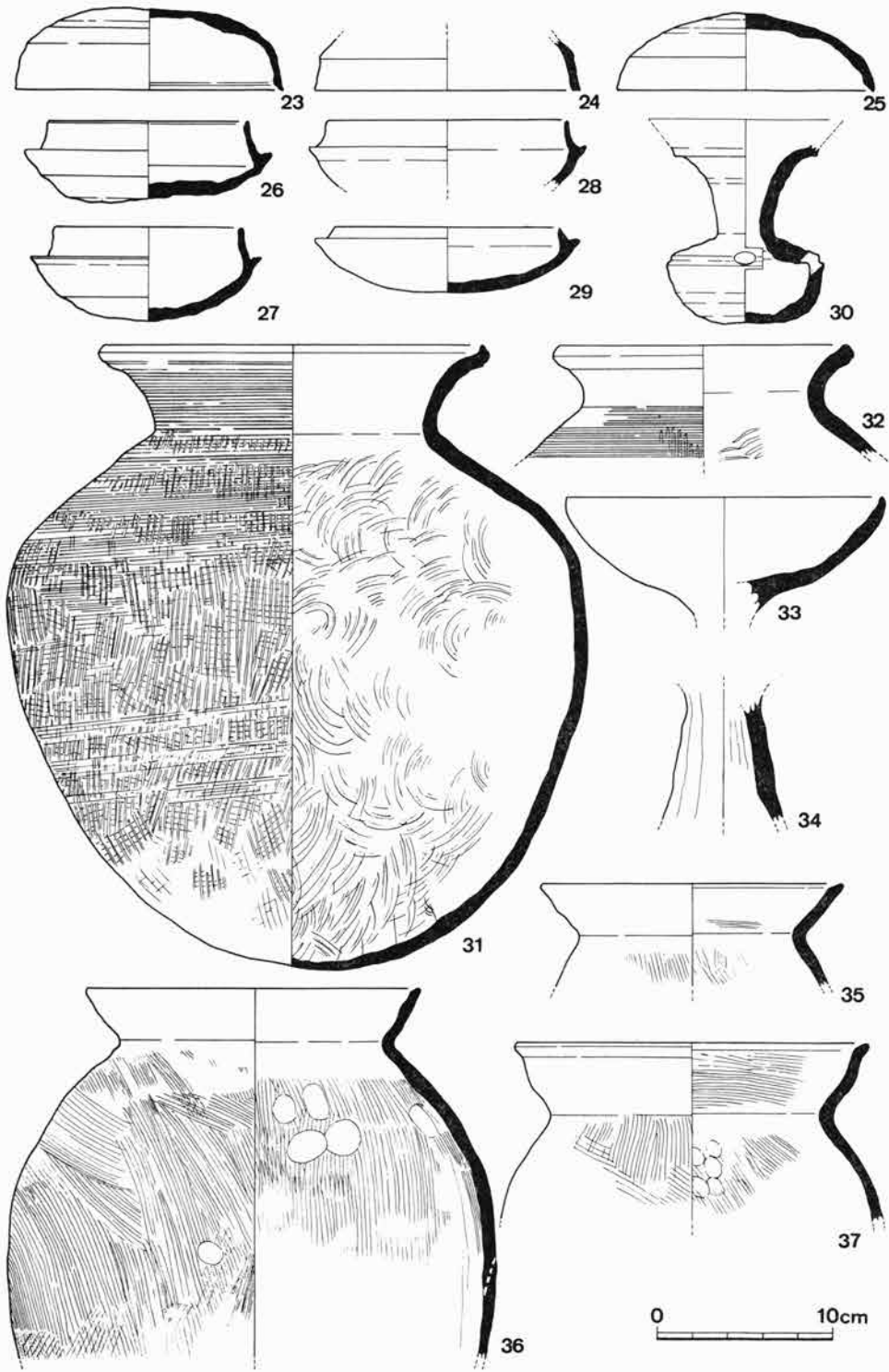
で、口縁部との境界は稜をなす。器高は 3 cm, 復原径は 14.2 cm となる。(14・15)は、高台の付く杯 B である。口縁部は直線的にたちあがる。高台を貼り付けている。(14)の器高は 3.8 cm, 復原口径は 12.5 cm となる。

(16・17)は、平城宮分類^(注3)でいう壺 L にあたる。(16)は、口縁端部を上下に挽き出している。口縁部径は 9.8 cm である。(17)は、体部と頸部の接合痕が明瞭で、わずかに段がついている。また、頸部下半にはロクロ挽きによる凹凸が目だつ。焼成、胎土とも良好で淡灰色を呈し、頸部内外面および肩部に灰釉が付着している。東海地方のものであろう。

(18・19)は、壺 L の小型品である。体部にロクロ挽き痕、底部に糸切り痕が明瞭である。(18)は、口縁部を屈曲させつまみあげている。頸部にロクロ回転による絞り痕が残る。体部に細淡線が一条廻る。口縁部径 4 cm・器高 9.8 cm・肩径 7.2 cm を測る。

(20)は平城宮分類^(注3)でいう鉢 F にあたる。円盤型の底部に斜め上方に開く口縁が付く。底部に粘土板を充填した様な痕が残りほとんど未調整である。

(21)は、複弁蓮華文軒丸瓦である。外区の珠文と凸線鋸歯文の配列から、平城宮式 6311 系



第20図 遺物実測図 (溝SD17102)

とおもわれる。瓦当面の約四分の一が剥れたもので、裏面に接合時の凹みがみられる。

(22)は、唐草文軒平瓦である。内区の唐草の展開と外区の珠文の配列から、長岡京市太鼓山(河原谷)窯の瓦であろう。これらの遺物は、長岡京期のものとほぼ一致する。

③溝 SD17102 (第20図)

溝 SD 17102 の埋土は、上下2層からなり、上層の暗褐色土層は前述したとおり弥生～長岡京期の遺物を包含する。ここでは、下層(暗青灰色粘質土)のものをとりあげた。

出土した遺物の種類は、須恵器杯蓋(23～25)・杯身(26～29)・甕(30)・甕(31・32)、土師器高杯(33・34)・甕(35～37)などがある。他に須恵器器台、埴輪片などもある。

須恵器杯蓋のうち(23)は、口径15.1cm・器高4.7cmを測る。天井部から口縁部にかけてゆるく広がり、その境界に軽い凹線がありわずかに稜をなす。口縁端部は内傾する面を有し、わずかに凹む。天井部外面の三分の二はへら削り、他は回転ナデを行う。(24)は、口縁部のみの小破片である。天井部と口縁部の境界にわずかに稜を有す。口縁端部は平坦面をなす。復原口径は15cm前後となる。(25)は、天井部から口縁部にかけてゆるく広がり、境界にわずかに稜を有す。口縁端部は内傾し、丸くおさめる。丸みのある天井部の三分の二をへら削り、他は回転ナデを行う。

杯身(26)は、口径11.2cm・受部径14cm・器高4.4cmを測る。口縁部は内傾した後、たちあがる。口縁端部は内傾し、凹線を有す。受部は外上方にのびる。底部はへら削り、底部中央はナデる。他は回転ナデを行う。(27)は、口径10.6cm・受部径13.1cm・器高5.4cmを測る。口縁部は内傾した後たちあがり、口縁端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、平坦面をなす。底部はへら削り、他は回転ナデを行う。ほぼ完形。焼成は良好で、内面は灰色、外面および断面は淡灰色を呈す。(28)は、口縁部が内傾した後、たちあがる。口縁端部は丸くおさめる。受部は外上方にのびる。(29)はたちあがり短く内傾している。口縁端部はひきあげる。受部は外上方にひきあげるが、端部を丸くおさめる。底部は丸みをおびた平坦面となる。約二分の一が残り、口径15cm・器高3.7cmを測る。

(30)は、口縁部を欠損する。残存高10.2cm・肩径8.9cm・頸径3.2cmを測る。頸部は細く、口縁部はラッパ状にひらく。肩部に一条の凹線がめぐり、注口部は回転ナデを行う。焼成・胎土とも良好で、外面は黒灰色、内・断面は灰色を呈す。

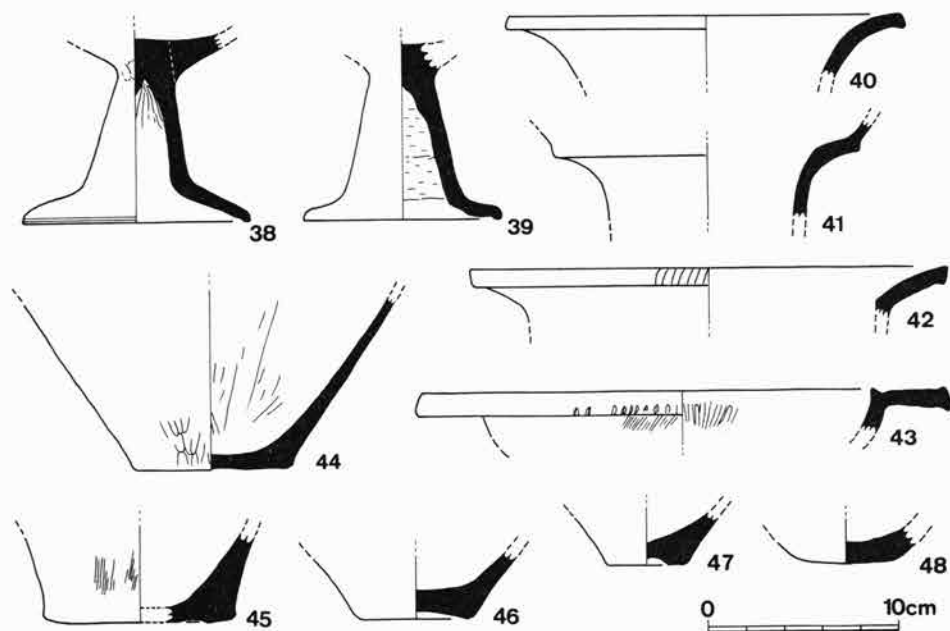
(31)は、口径21.4cm・最大腹径33.2cm・器高35.3cmを測る。口縁部は外反ぎみに立ちあがり、口縁端部をつまみあげる。体部外面は平行タタキの後、横方向のカキ目を行う。カキ目は最大径のある肩部より上で密である。口縁部はカキ目の後でナデたのか不明瞭な部分がある。体部内面は同心円のタタキの後、ナデを行う。焼成はやや甘く淡青灰色・淡灰色を呈

す。(32)は、口縁部が短く外上方にのびる。端部は丸くおさめる。肩部外面にカキ目が、内面タタキ痕が残る。復原口径は16.4 cm となる。

(30)は、内湾する高杯の杯部である。端部は丸くおさめる。焼成が甘く、表面の風化が著しく調整は不明である。復原口径は17.8 cm となる。(31)は、高杯の脚部である。内面に絞り痕が残る。調整は不明である。

(35)は、頸部が「く」字型に屈曲し、口縁部は外上方に直線的にのびる。口縁端部は内傾する。全体に表面の風化が著しいが、口縁部内面にハケ目が残り、口縁部内外面ともナデを行う。頸部より下半には、内外面とも縦方向のハケ目が残る。(36)は、頸部が「く」字型に屈曲し、口縁部は内湾ぎみに外上方にのびる。口縁の中央を内側に若干肥厚させ、端部は内傾する。体部は長円形になるとおもわれる。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面はハケ調整を行う。ススが付着している。体部内面も縦方向のハケ調整を行う。指圧痕が残る。粘土の接合痕がみられる。口径19cm・頸径16cm・残存高21 cm を測る。(37)は口縁部が内湾し、端部は内傾する。口縁部内面にハケ目が残る。

溝 SD17102 下層出土の須恵器(23・25~28)は大阪府陶邑Ⅱ期Ⅱ~Ⅲにあたり、他のものもⅡ期に含まれるものである。溝SD1288ともほぼ一致する。こうした点から、6世紀中葉と考えておきたい。



第21図 遺物実測図

④その他の遺物（第21図）

ここでは第4層出土の弥生～古墳時代のもの、その他をとりあつかう。

(38)は、溝SD17103より出土した土師器高杯の杯部である。脚は下方で屈曲して大きく開き、端部は丸くおさめる。端部外面に一条の凹線が回る。全体的に風化が著しいが、脚部上半に縦方向の稜がみられ、削りを行った後ナデている。脚部内面には絞り痕が残る。ラッパ状に大きく開く部分は内外面ともヨコナデを行っている。(39)は、トレンチ北東部の暗褐色土より出土した高杯の脚部である。脚部の下半が大きく開くものである。風化が著しいが、脚の開く部分は内外面ともヨコナデを行う。脚部内面には絞り痕、横方向の削りがみられる。(38)の脚径は11.5cm・残存高10cmである。(39)の脚径は10.2cm・残存高9.4cmである。

(40～48)は弥生土器である。(43)は土塚SK17107から出土、(45)はトレンチ北東部の断ち割りから出土したもので、後に住居跡SH17106が検出された場所にあたる。その他はいずれも第4層から出土した。いずれも全体的に風化・剝離が著しく、調整は不明瞭である。(40～42)は、いずれも壺の口縁部である。(42)は口縁端部の外面に刻みを行う。(43)は、水平に広げた口縁部の内面に凸帯をめぐらす高杯である。口縁部の端部を垂下させないもので、端部外面下半に刻みを入れる。口縁部内面の凸帯は断面三角型を呈す。口縁部内面はミガキ、外面はヨコナデを行う。杯部の内面にミガキ、外面にハケ目が残る。復原口径は27cmとなる。(44)は、壺の底部とおもわれるものである。底部から体部にかけて斜上方に直線的にのびる。体部の最下部にヘラミガキが残る。体部内面には下から上へヘラ削りを行う。座部径8.5cmを測る。(45・46)は、壺または甕の底部とおもわれるものである。大きい底部で凹みが環状にまわるもの(45)、中央が凹むもの(46・47)、丸底に近いもの(48)がある。

これらの弥生土器は、形態等からみて(43・44)は中期のものであろう。他は後期にはいるものである。

⑤石器類（第22図）

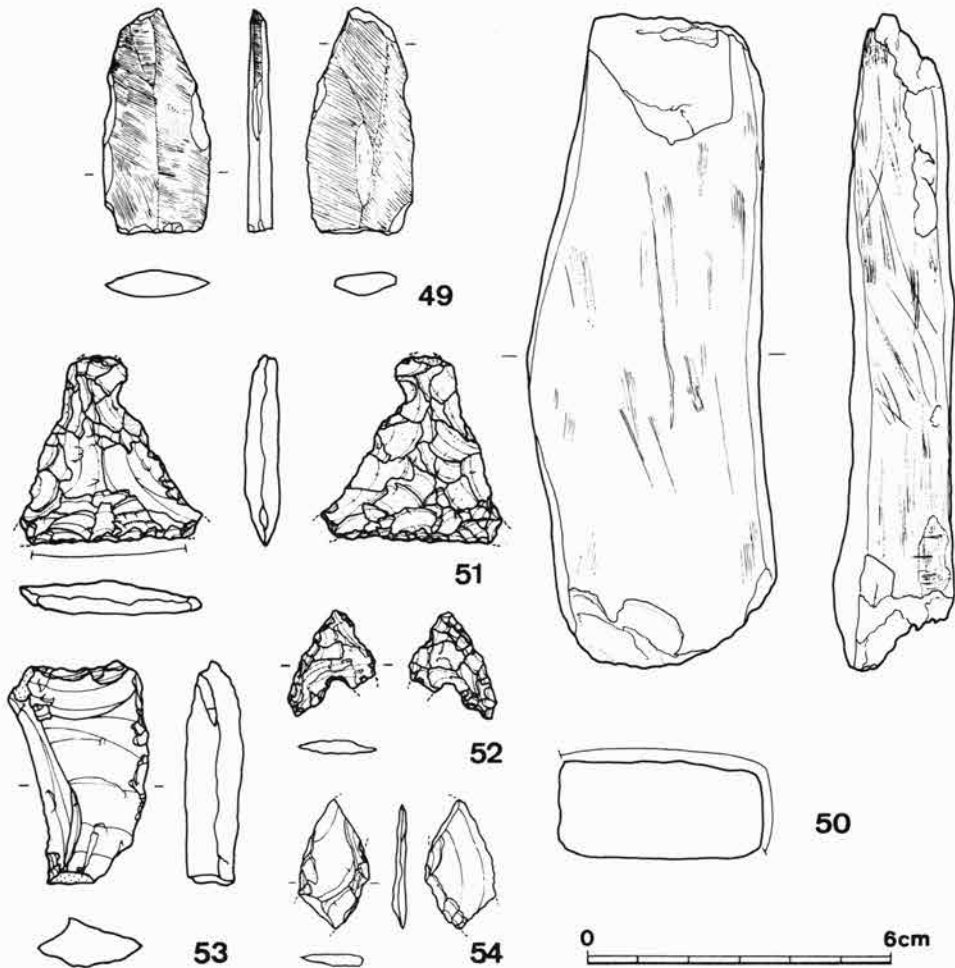
石器はすべて遺構に伴うものではなく、すべて包含層から出土したものである。総計8点あり、ここに図化したもの以外は剥片・碎片ばかりである。したがって、磨製石器(49)を除き、所属時期を確定するのは困難である。ここでは基本的な記述に意を注いでおく。

(49)は、磨製石鏃である。先端部と基部を欠損している。最大長4.4cm・幅2.1cm・厚さ0.4cm・重さ6gを測り、良質の粘板岩を素材とする。表裏面の中央に稜が走っているもので、弥生時代中期前葉くらいのもと言えよう。留意すべき点は、裏面の稜を二次的な研磨で潰していること、表面右側の側縁部を部分的に面取り加工していること、さらに基部の欠損具合などから、磨製石器の先端部を石鏃に転用した資料である。

(50)は、砥石である。片側の、表面と側縁部を全面的に磨いている。最大長 11 cm・幅 5 cm・厚さ 2 cm・重さ 55 g で、粘板岩を使用している。表面と側面との境は、わずかながら面取りのラインが入る。とりわけ側面には線条痕が明確に観察されるが、使用頻度はそれほど激しいものではない。

(51)は、石匙(スクレイパー)である。最大長 3.8 cm・最大幅 3.6 cm・厚さ 0.7 cm・重量 13 g のサヌカイト製である。上の先端部をわずかに丸く作り出しているが、概して作りは粗い。

また刃部としての機能を果たした下底部の作りも粗く、調整痕がわずかながら認められる程度である。



第 22 図 遺 物 実 測 図

(52)は、凹基無茎鉄である。長さ2.1cm・最大幅1.7cm・厚さ0.25cm・重量2.2gを測る。石材はサヌカイトを用いている。剝離面の風化がかなり進み、表面も剝落している。

(53・54)は、共にサヌカイト製の剝片である。素材を縦にしている(53)の方はやや乳白色がかかった褐色のサヌカイトを使用している。加工(調整)痕、使用痕、光沢等の痕跡は観察し得ない。

4. ま と め

今回の調査で、長岡京西二坊大路東側溝、古墳の周濠と推定される溝状遺構、竪穴式住居跡を検出するなどの成果があった。出土遺物には、縄文～中世まで各時代のものがある。

長岡京西二坊大路東側溝が、推定位置から検出され、調査地のほとんどは道路敷部分にあたる。このため、他に長岡京期の遺構は検出されていない。そして、古墳の周濠は、長岡京期に全面的に埋め立てられ、道路としていることが判明した。しかし、道路が古墳を横断していたかどうか明確にするには至らなかった。

周濠状の溝SD17102とSD1288を結ぶと、帆立貝式の古墳の前方部になる可能性が高い。この古墳は、後円部が東側の道路および水田部分にあたるため、今里庄ノ淵古墳と仮称しておきたい。この古墳は、出土遺物から6世紀中葉に築造され、葺石・埴輪は持たないものと考えられる。後円部を推定復元すると、全長は40m前後となる。

全長100mに近い今里車塚古墳の北隣りに、1世紀以上経過して、方向をまったく逆にした古墳を築造した理由、今里車塚古墳との関連など今後の課題は多い。周辺の調査と合わせ調査研究を進めて行きたい。

(石尾 政信)

注1 山上修治・谷元正治・塚原雅之・乗鞍定彦・中川和哉・浜口 宏・平岡 徹・萬谷幸美・中村みはる・半田真弓・神山久子・戸波みどり・西岡ひろみ・赤司 紫・堀 啓子・川田美由紀(敬称略, 順不同)

注2 高橋美久二・奥村清一郎・久保哲正他「長岡京跡右京第26次発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会)1980 他

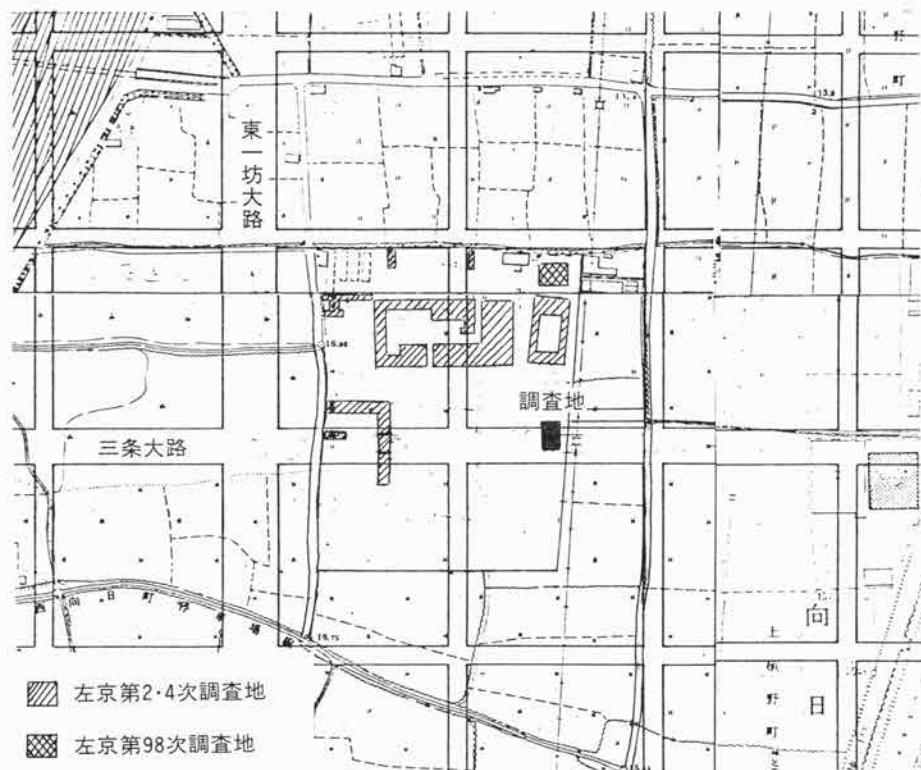
注3 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告XI」(『奈良国立文化財研究所 三十周年記念学報 第四十冊』)1982

4. 長岡京跡左京第119次発掘調査概要

(7ANFNT-4 地区)

1. はじめに

今回発掘調査を行った京都府立向陽高校の敷地は、向日市上植野町西大田にあり、長岡京跡の三条大路・三条第2小路・東二坊第1小路及び左京三条二坊四町・五町の推定地に当る。昭和49・50年には、開校に際して、長岡京跡左京第2・4次調査として京都府教育委員会による発掘調査が行われ、長岡京の三条大路南北両側溝や三条第2小路の南側溝、長岡京期の南北溝、長大な南北棟の掘立柱建物跡、長岡京期に埋められた奈良時代の流路とその流路に多数打ち込まれた杭、平安時代の土坑、中世の掘立柱建物跡等を検出し、多数の長岡京期の土器の他、木簡や墨書土器等が出土している。この調査における三条大路南北両側溝の検出



第23図 調査地位置図 (1/5,000)

は、長岡京の条坊側溝検出の初例で、後の京域における調査の契機となるとともに、その位置は、条坊復元の基準線となっている。この後昭和57年には、格技場建設に伴い当調査研究センターが左京第98次調査として発掘調査^(注2)を行い、長岡京期の掘立柱建物跡や柵列、井戸、中世の井戸や奈良時代の流路に打ち込まれた杭等を検出した。出土遺物は、須恵器・土師器の他、墨書土器や転用硯等がある。また周辺では、向陽高校の東方約300mの地で左京第71次^(注3)調査が向日市教育委員会の手で実施されており、三条大路の南側溝の他、長岡京期の掘立柱建物跡や柵列、土壇等を検出した。この調査では、弁が葉剣状を呈する単弁の軒丸瓦が出土しており、北白川廃寺等でも類例がみられる。

今回の調査は、京都府立向陽高校のトレーニングルーム建設に伴うもので、調査地は高校グラウンドの東北部に位置し、長岡京跡の左京三条二坊五町及び三条大路の推定地に当る。以前の調査結果から、三条大路北側溝が検出されることが予測された。調査は、京都府教育委員会の依頼を受け、当調査研究センターが行い、当調査研究センター主任調査員長谷川達と同調査員山口博が担当した。現地調査は、昭和59年10月11日から着手し、11月30日に終了した。その間調査補助員として肥後弘幸・浜口和広・鈴木良章・萬谷幸美の諸氏や、また、作業員として長岡京市在住の地元有志の方々にこの調査に参加いただいた。また、山中章氏や清水みき氏等向日市教育委員会や向日市文化資料館の方々や機関を始めとして、京都文教短期大学教授中山修一先生や長岡京跡発掘調査研究所、(財)長岡京市埋蔵文化財センター等の方々や機関からは、調査に関しての指導や助言、協力を賜わり、京都府立向陽高校には、この調査に当って種々便宜を図っていただいた。記して謝意を表したい。なお、割り付けは、国土座標値を利用し、3m方眼で割り付けた。本概要では、割り付けラインは、国土座標値を使用して表現した。

2. 調査経過

調査は、昭和59年10月11日に資材の搬入を行い、13m×22mのトレンチを設定し、翌12日から重機を入れ掘削を開始した。盛土・耕作土・床土を重機にて除去した後、17日から人力による掘削を始めた。まず、トレンチの東辺と南辺に、排水と土層観察をかねた小トレンチを入れ、その間に、向陽高校校舎屋上のポイントから国土座標値を移し、3m方眼の割り付けを行った後、遺構検出作業に入った。

床土の下は、黄灰褐色粘質土の遺物包含層が薄く存在し、長岡京期の土器が出土する。この包含層からの土器の出土は、SD11901から北で多く見られた。そしてこの包含層を除去した面で、長岡京の三条大路北側溝と思われる東西方向の溝(SD11901)や土器溜り(SX11903・

11904), 土壇(SK11904・11906・11907), ピット等の遺構を検出した。これらの遺構を検出した面は, 黄灰色粘土層の地山とその回みを埋めて堆積している灰色砂礫層と黄灰色砂質土層からなり, 東から西にかけてわずかに傾斜している。またトレンチ南半は, 後世の削平のため遺構面が削られ, 一段低くなっている。なお, 灰色砂礫層と黄灰色砂質土層は, いずれも土器片を含む。黄灰色砂質土の一部は, 灰色砂礫層の上のっている。灰色砂礫層は, この地が氾濫を受けた際の堆積と思われる, 黄灰色砂質土層は, その後, この地を整地した際の置土層であろう。

この面で検出した遺構の写真撮影及び図面作成を行った後, 黄灰色砂質土層と灰色砂礫層を除去し, 轍と思われる細い溝状の遺構を多数検出した。この轍を埋めていた灰色砂礫層からは, 長岡京期の特徴を持つ土器片が出土し, 黄灰色砂質土層が一部上にかぶさっていた。黄灰色砂質土層は, 薄く部分的にあるのみで, 長岡京造営時にこの地を整地した際の置土であろう。

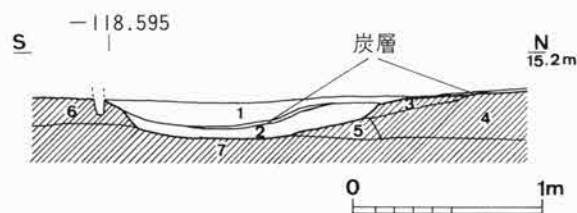
これらの遺構を掘り上げ, 写真撮影・図面作成を行い, 11月30日に現地調査を終了した。なお, 当初に断面観察及び下層遺構の有無を確かめるために入れた小トレンチの掘削結果から, 黄灰色粘土層には遺物は含まれず, またこの層の下は, 青灰色粘土及び砂が堆積し, 遺構・遺物は認められず, 下層に遺構はないものと判断した。

3. 検出遺構

今回の調査では, 三条大路の北側溝と考えられる東西方向の溝(SD11901)や土壇(SK11904・11905), 土器溜り(SX11902・11903), 轍群, ピット等を検出した。以下に主要遺構について簡単に列記する。

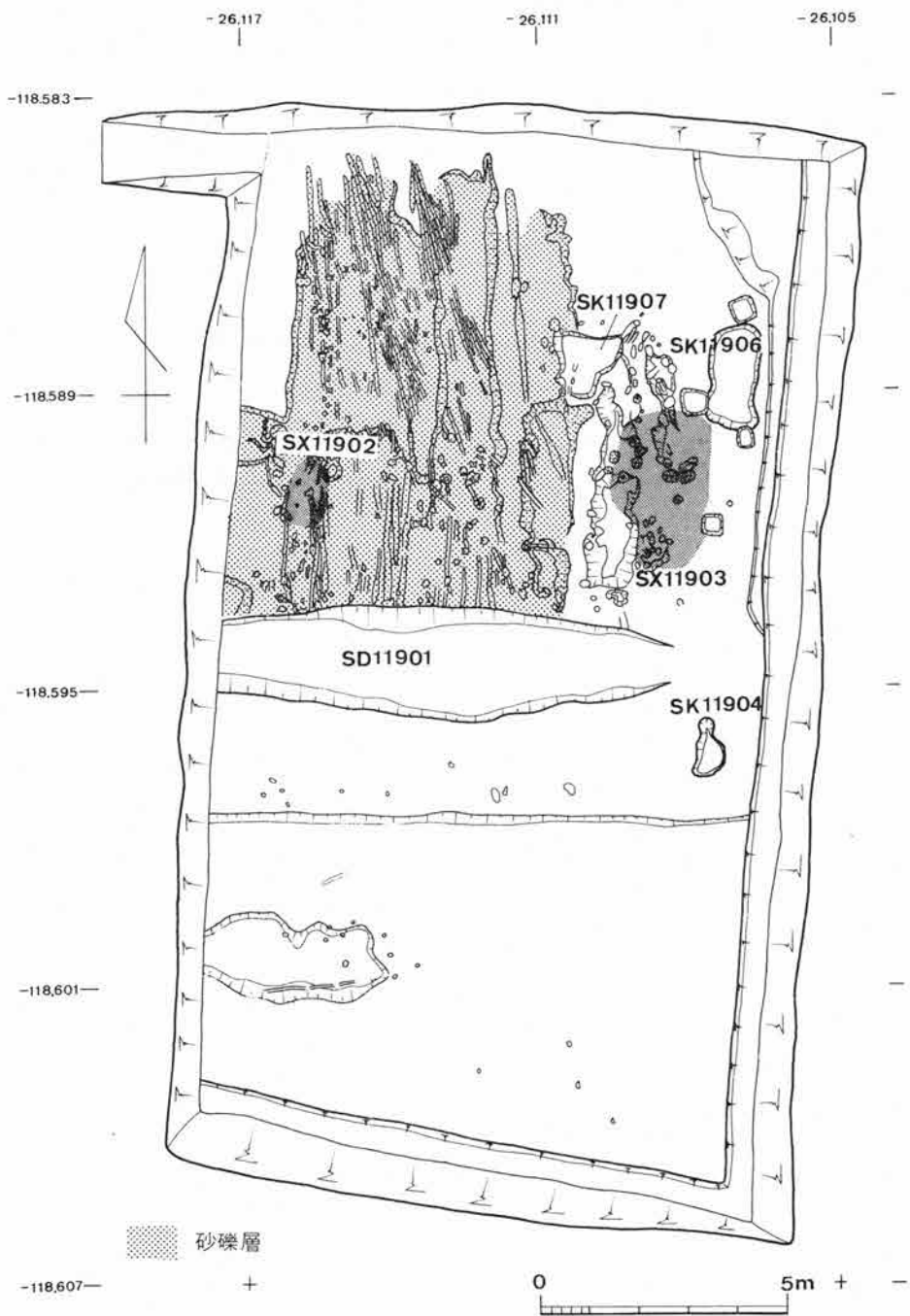
SD11901 トレンチ中央部で検出した溝で, 東西方向に延びる。トレンチ東端付近では, 削平を受け浅くなり消えている。

ややいびつな形をしており, 幅約1.5~2.3mを測り, 深さは約0.15mを有する。埋土は2層あり, 炭片を少量含んだ黄色混じり灰褐色粘質土の上層と, 黄色混じり淡褐色灰色粘質土の下層に分かれ, 上層底部には, 北肩よりに薄く炭層が堆積する。炭の堆積は, SD



第24図 SD11901 土層図(トレンチ西壁)

- | | |
|------------------|----------|
| 1 黄色混じり灰褐色粘質土層 | 5 暗灰色砂層 |
| 2 黄色混じり淡褐色灰色粘質土層 | 6 黄灰色粘土層 |
| 3 灰色砂質土層 | 7 青灰色粘土層 |
| 4 灰色砂礫層 | |



第25図 トレンチ平面図

11901から北の遺構面上にも広く見られ、SX11902・11903等の土器溜りにも炭層が薄く堆積している。この溝からは、多量の土器や瓦が出土したが、大多数は、上層から出土したものである。出土遺物には須恵器・土師器・丸瓦・平瓦の他、木簡・墨書土器・円面硯・転用硯・軒平瓦・種子類・木製品及び木片等がある。これらの遺物中には、SD11901から北の包含層やSX11903等の出土遺物と接合するものがかかり認められる。長岡京廃都時に、このSD11901及びその北方にかけて、土器・瓦等を投棄して行ったものであろう。

溝からの出土遺物は、おおむね長岡京期の特徴を有し、溝心の国土座標のX値は、 $-118,594.3$ を測り、位置関係や遺物からみて、^(注4)三条大路北側溝とみてほぼ差し支えない。なお、この溝は、後述する轍群を埋めている灰色砂礫層を削って作られており、轍群よりは後出するものである。

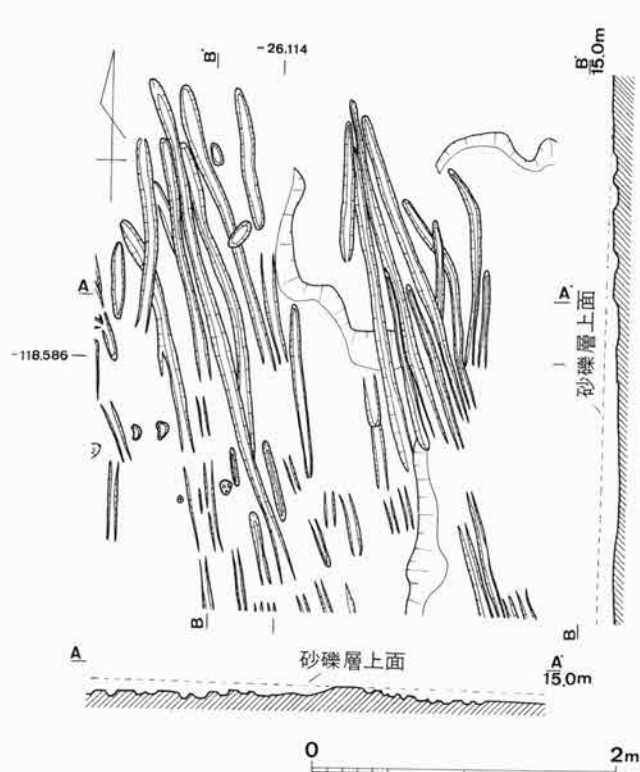
SX11902 SD11901の北約2mのところ検出した瓦溜りで、南北長約1.5m・東西長約0.8mを測る。丸瓦・平瓦とともに、礫や土器片が集積し、その下には炭層の堆積が薄く見られる。一見瓦は敷きつめられたようにも見えるが、さらに延びていく形跡もなく、また、SD11901の出土遺物と接合した土器もあり、やはりSX11903やSD11901出土土器群と同様、長岡京廃都時に、集中的に投棄されて形成されたものであろう。

SX11903 SD11901の北約1.5mの、トレンチ北東部で検出した土器溜りである。炭片とともに多量の土師器・須恵器が集積し、他に軒丸瓦・軒平瓦・墨書土器・転用硯・丸瓦・平瓦等が出土した。東西長約1.4~1.5m・南北長約3.2mを測り、薄い炭層が広がる。SD11901上層土器群等とともに、長岡京廃都時に、SD11901北方に土器等を廃棄した際、集中的に投棄されて形成されたものであろう。

SK11904 トレンチ東端部中央付近で検出した土塚で、SD11901より南にあり、三条大路の路面上に当る。南北長約1.2m・東西長約0.6m・深さ約0.1mを測る不整形な土塚である。遺物は、須恵器・土師器等が出土し、やや古い様相を示す土器が含まれる。またその位置が、三条大路の路面上に当ることなども併せ、長岡京造営前の造作によるものと考えている。

SK11906 トレンチ東北部で検出した土塚で、南北長約2.2m・東西長約1m・深さ約0.1mを測る。少量ながら、須恵器・土師器が出土した。おおむね長岡京期の特徴を示す。いくつかのピットによって削られており、そのうちの1つには、SX11903の一部が広がり、SX11903等よりは先行するものであろう。

SK11907 トレンチ東北部で検出した深さ5cmの浅い不整形な土塚である。東西長約1.4m・南北長約1.3mを測り、須恵器・土師器の他、軒丸瓦等が若干出土した。轍群を埋めている砂礫層を削っている。



第26図 轍群実測図

轍群 SD11901の北に広がる灰色砂礫層を除去して検出した、南北方向に延びる多数の細い溝状の遺構である。幅は、5~10mを測り、深さは、1~2cmのものから、深いもので5~6cm程度である。轍の方向は、SD119011近くでは、南北方向に延び、北では、やや北に対し西に振れているものが多い。轍の他、人や牛の足跡と思われる小ピットも多数検出した。また、半島状に突き出た地山の低い高まりを検出している。これは、両側を車輪が幾度も通り、結果として高まりが残ったものであろう。なお、個々の轍の対応関係については、

途切れたり、複雑に重複し、ほぼ平行するものが幾条もあるなどして、明確にはしがたい。ただ、長岡京跡の右京第27次^(注6)や右京第96次^(注7)等の調査例では、車軸幅は約1.45mと約1.55mを測っている。

この轍群は、これを埋め込んでいる灰色砂礫層を削ってSD11901が造られており、三条大路側溝の築造時期より先行するものであるが、これだけ多くの轍が残るほど車輪が往復するのは、長岡京造営時と考えるのが最も妥当である。また、砂礫層から出土した土器もさほど古い様相は示さない。砂礫層から出土した遺物は、須恵器・土師器の他、墨書土器等がある。量的には、さほど多くはない。

その他の遺構 上記の他、ピットをいくつか検出したが、建物が立つには至っていない。時期的には、長岡京期のものと考えている。ただ、SK11906の北にあるピット(P-3)は、他のものと掘形の方向を違え、時期の異なるものであろう。このピットからは、須恵器の壺の口縁部(第29図-43)が出土している。

また、トレンチ南半部においても、土坑を1基検出している。炭片の混じった暗灰色粘質

土で埋まり、土師器の小片が出土したのみで、時期は明確でない。南北長約1.8m・東西長約3.7m以上・深さ約0.1mを測る。

4. 出土遺物

今回の調査では、三条大路北側溝に当るSD11901や長岡京期の土器溜りSX11903を中心に、長岡京期の遺物が多量に出土した。出土遺物には、須恵器・土師器の他、木簡・鉞尾・墨書土器・製塩土器・円面硯・転用硯・軒丸瓦・軒平瓦・刻印瓦・丸瓦・平瓦・種子・木製品・鉾滓・炉壁等がある。また、奈良時代及び平安時代の遺物も、長岡京期のものに比すと少量ではあるが出土している。

SD11901出土の遺物は、前述したように、SX11902・11903や、SD11901から北の包含層出土の遺物と接合するものがかなり認められる。これらは、同時期に一括して投棄されたもので、SX11903等を含めて一括性を有するが、時間等の都合上、今回はSD11901出土の土器を中心に紹介し、このほか、木簡・鉞尾・墨書土器・軒瓦類について概略を報告する。他の遺物については、後の機会に譲りたい。

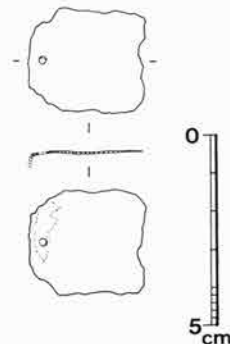
鉞尾(第27図)

遺構には伴わず、包含層中から出土したものである。摩滅が著しく、端部は欠失している。現存長2.9cm・現存幅2.7cm・厚さ0.5mmを測る。頭部に、直径2mmの小孔を穿つ。厚さも、摩耗のため当時のものを失っていると思われる。素材は、銅製である。

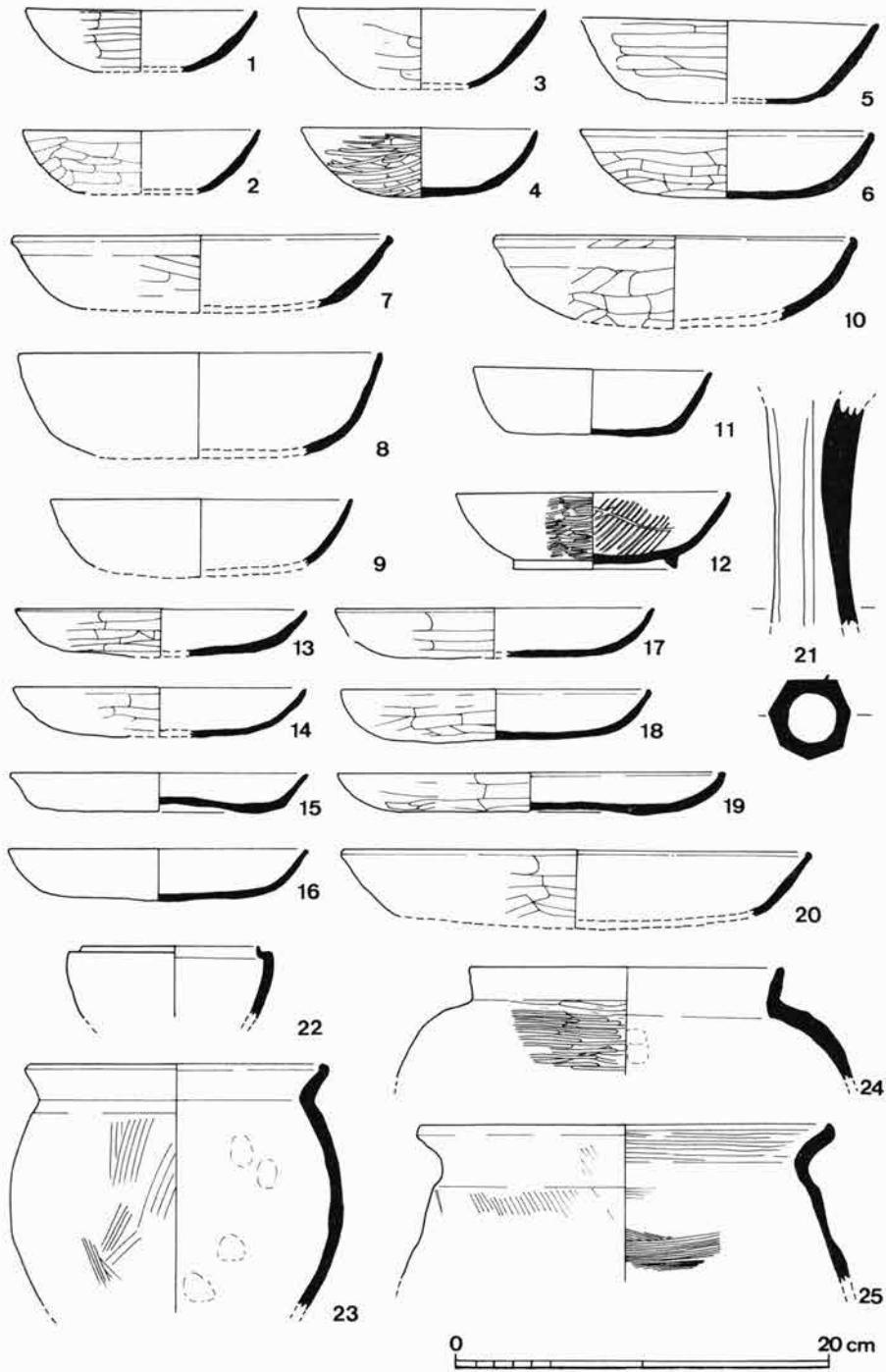
土器類(第28・29図)

土器の器種分類については、奈良国立文化財研究所が実施している平城宮跡の調査における分類に準拠した^(注8)。それでは以下に、SD11901出土遺物を中心に、概略を述べる。

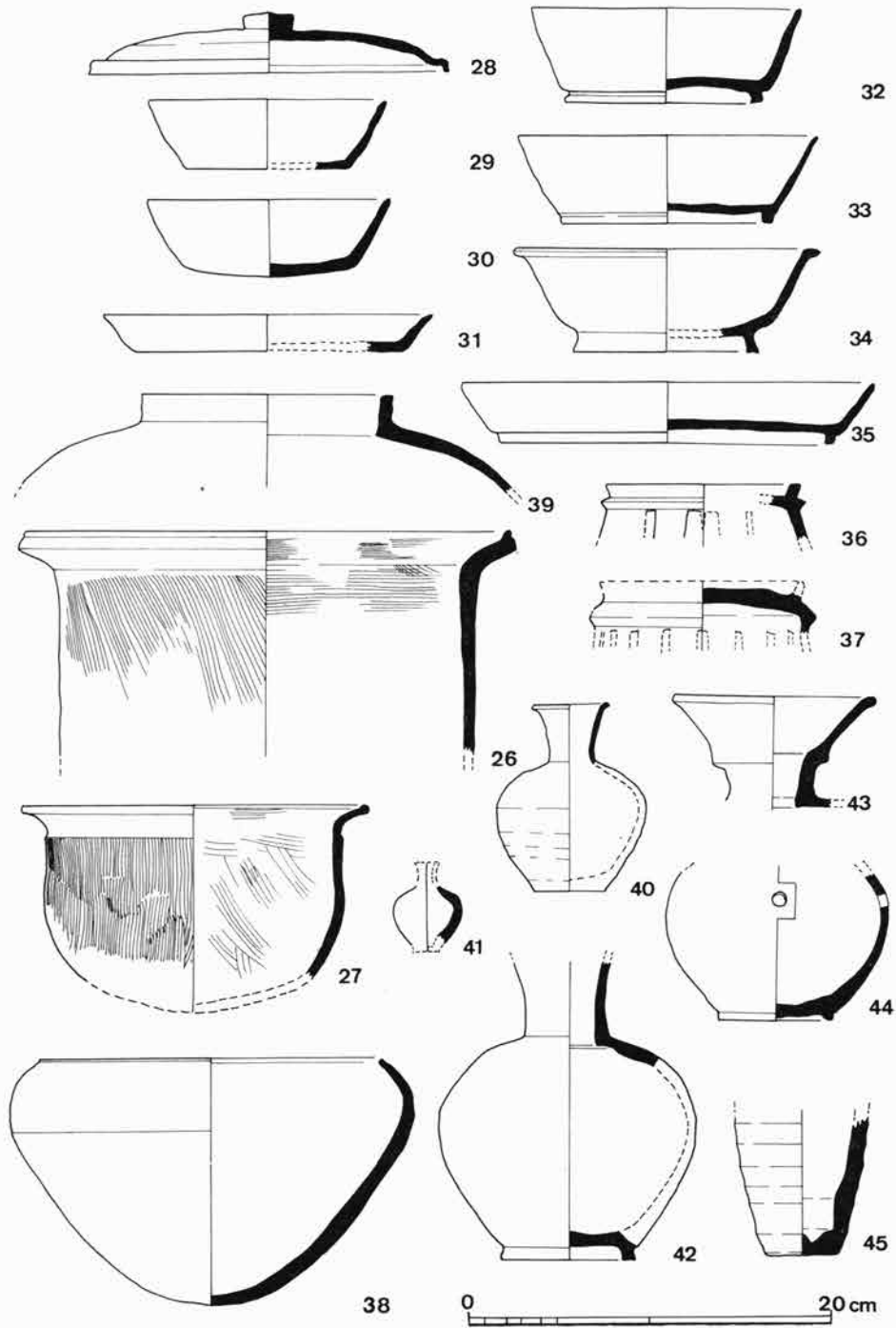
SD11901出土土器 この溝からは、多量の遺物が出土したが、前述したように、大多数は、上層からの出土である。出土した土器は、土師器の椀A(1～3)・椀C(4)・杯A(5～11)・杯B(12)・皿A(13～20)・蓋・高杯(21)・壺A(24)・壺E(22)・甕A(23・25)・甕C(26)、須恵器の蓋(28)・杯A(29・30)・杯B(32・33)・皿A(31)・皿B(35)・壺A(39)・壺L(40)・壺G(45)・甕A・円面硯(37)、製塩土器等がある。この他、木簡や墨書土器、軒平瓦、刻印瓦、丸・平瓦、転用硯、モモ等の種子類、木製品、土馬等が出土している。このうち、木簡・墨書土器・軒瓦類については後述する。



第27図 鉞尾実測図



第28図 出土土器実測図(1)
1~25:土師器, 1~25:SD11901出土



第29図 出土土器実測図(2)

26・27：土師器， 28～45：須恵器， 26・28～33・35・37・39・40：SD11901 出土，
 27・34：SK11904 出土， 44：SX11903 出土， 43：P-3 出土， 42：灰色砂礫層出土，
 36・38・41：包含層出土

土師器の椀は、口径12～13cm前後を測るもので、椀Aは、2のように口縁端部をケズリ残すものも見られるが、大半は、外面を底部から口縁端部までヘラ削りする。杯Aは、口径が13cm前後のもの(11)、15～16cm前後のもの(5・6・9)、20cm前後のもの(7・8・10)と3グループある。また器形も、8・9・11のように、口縁部の外傾度の小さいものと、他の口縁部外傾度の大きいものがある。調整手法は、外面全面にヘラ削りを行うが、6・7・10のように、口縁部の横なでが強いと、端部近くをケズリ残すものも比較的に見られる。他の器形と比べると、端部近くをケズリ残すものの量は比較的多い。杯Bは、図示した小型のものだけではなく、もう少し大型で器高の深いタイプの破片も出土している。破片で出土しているものは、内面の暗文は見られないが、この12は、内面の見込みに斜格子の暗文、口縁部内面に一段の斜放射の暗文をそれぞれ施すなど古い様相を持つ。ただ杯Bの出土量は、絶対的に少ない。皿Aは、口径から、15～16cm前後のもの(13～18)、20cm前後のもの(19)、25cm前後のもの(20)の3グループに分かれる。手法的には、外面を、底部から口縁端部までヘラ削りするのが大多数を占める。図示したものはすべて、このタイプである。高杯は、量的にも少なく、破片ばかりであるが、筒部の成形は、直接粘土紐を巻き上げて形成するもの(21)のみではなく、芯棒に粘土紐を巻いて形成するものも出土している。甕は、口縁部内面に横方向のハケ目を施すものが比較的に見られ、また甕自体の出土量も比較的多い。なお、わずかではあるが、食器類の中に、外面ないし内面にハケ目痕を有するものがある。

須恵器の杯Bは、すべて高台を底部と口縁部の境のないしやや内側に付す。蓋は、20cm前後を測るもの(28)の他、14cm前後や16cm前後を測るものなど数グループある。硯には、円面硯(37)の他に、杯の見込みや底部、蓋の内面、甕腹の破片の内面等を利用した転用硯がある。転用硯は、今回の調査では全体で20点以上を数える。なお、甕の出土量は、絶対的に少ない。

製塩土器は、胎土が砂質で粗いものと粘質で砂粒を多く含むものがある。内面は、なでるもの、布目痕を有するもの等があり、布目痕を有するものは、布目の粗いものと細かいものに区別される。

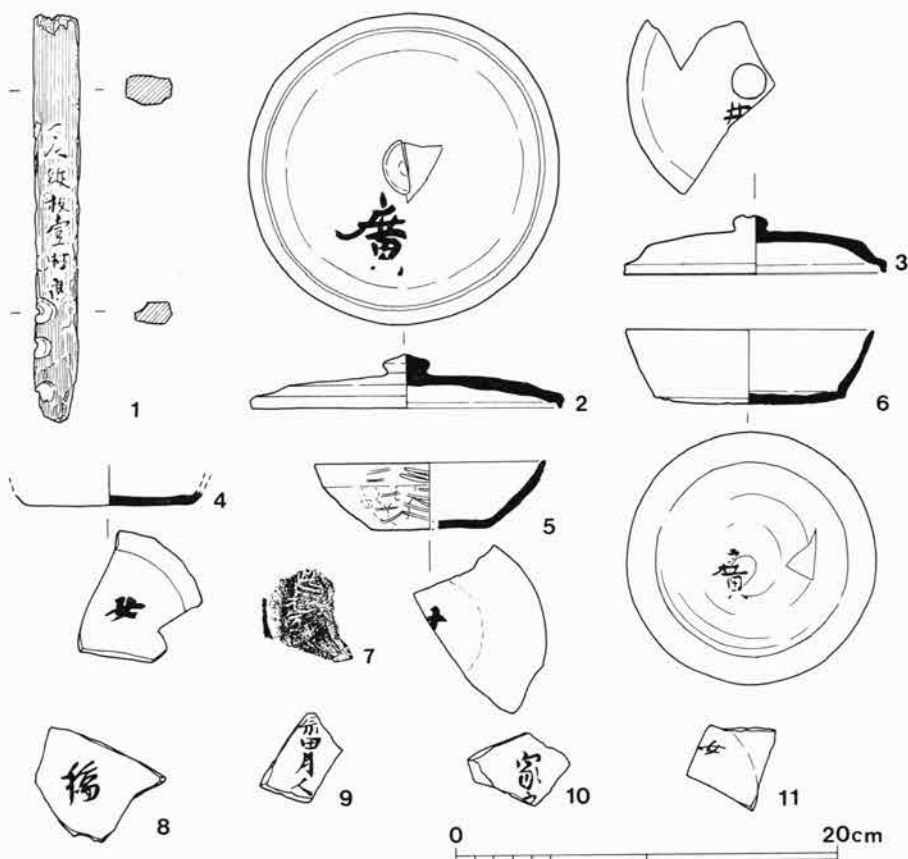
また、小片ではあるが黒色土器も出土している。なお、土師器の杯・皿等の中には、底部外面に、「井」等のヘラ記号を持つ土器が数点見受けられる。

その他の遺構出土土器 SX11902・11903等の遺構や包含層等からも、土師器の椀A・杯A・杯B・皿A・高杯・甕A(27)・甕C・壺E・蓋、須恵器の蓋・杯A・杯B(34)・皿A・皿B・壺L(42・44)・壺G・壺(43)・甕A・鉢A(38)・円面硯(36)・転用硯・ミニチュア壺(41)、製塩土器、軒丸瓦、丸・平瓦、鉾滓、灰壁等の遺物が出土している。ここでは、そのうちの主だった土器を数点紹介する。

44は、SX11903から出土したもので、胴部最大径のやや上に径0.8cm前後の小孔を穿つ。高台は、かなり低平で、胴部最大径は12.4cmを測る。壺Lに小孔を穿ったものは、同じ向陽高校敷地内で行った長岡京跡左京第98次調査で出土しており、98次調査出土のものは、柱穴の掘形から出土し、底部外面に墨書が施してあった。残念ながら、この土器には、墨書は見受けられない。

27・34は、SX11904から出土したもので、27は半球形の胴部に外反する口縁部を持ち、口縁部内面には横方向のハケ目痕を残す。34は、底部と口縁部の境いの屈曲はゆるやかで、口縁端部を水平に外反させる。高台は高く、外下方にやや開き気味に付す。

42は、轆を埋めている灰色砂礫層から出土したもので、胴部最大径は約7.1cmを測り、体部高を上回る。胴部最大径は、胴部中央よりやや上にある。



第30図 木簡・墨書土器・ヘラ描き土器実測図及び拓影

1：木簡， 2～4・6・8～11：墨書土器(須恵器)， 5：墨書土器(土師器)，
7：ヘラ描き土器(土師器)， 1～4：SD11901出土， 8・9：灰色砂礫層出土，
5～7・10・11：包含層出土

43は、SK11905の北にあるピット(P-3)から出土したもので、体部以下は欠失しているが、口頸部が二重口縁形を呈し、おそらく唾壺の口頸部である。

36・38・41は、包含層から出土したもので、このうち38は、いわゆる鉄鉢形を呈する鉢である。

木簡(第30図)

木簡は、SD11901から出土したもので、火鑽板として使用されている。両端は折れて欠損し、現存長21.4cm・現存幅2.4cmを有し、厚さは、上端部が1.5cm、下端部はやや薄く1cmを測る。中央に「^{〔延カ〕}□□□^{〔遺カ〕}板壹村□」と7文字記され、その下に墨痕らしきものが2文字分みられる。下半部左側端には、火鑽臼として使用された際の小孔が3か所穿たれている。その上にか所、小孔の痕跡を留める。厚さや小孔の一部が墨痕を削っていることから見て、転用して木簡の材に使われ、最後に火鑽板として使用されたのであろう。

墨書土器(第30図)

今回の調査では、墨書土器は計14点出土した。須恵器の蓋頂部外面や、杯底部の内外面、土師器碗の底部外面等に、「廣」(2・6)・「井」(3)・「女」(4・11)・「福」(8)・「□田月人」(9)・「家^{〔戸カ〕}□」(10)・「□^{〔+カ〕}」(5)等と記され、この他「□^{〔-カ〕}」と記されたものや、小片で字の不明のものが数点ある。

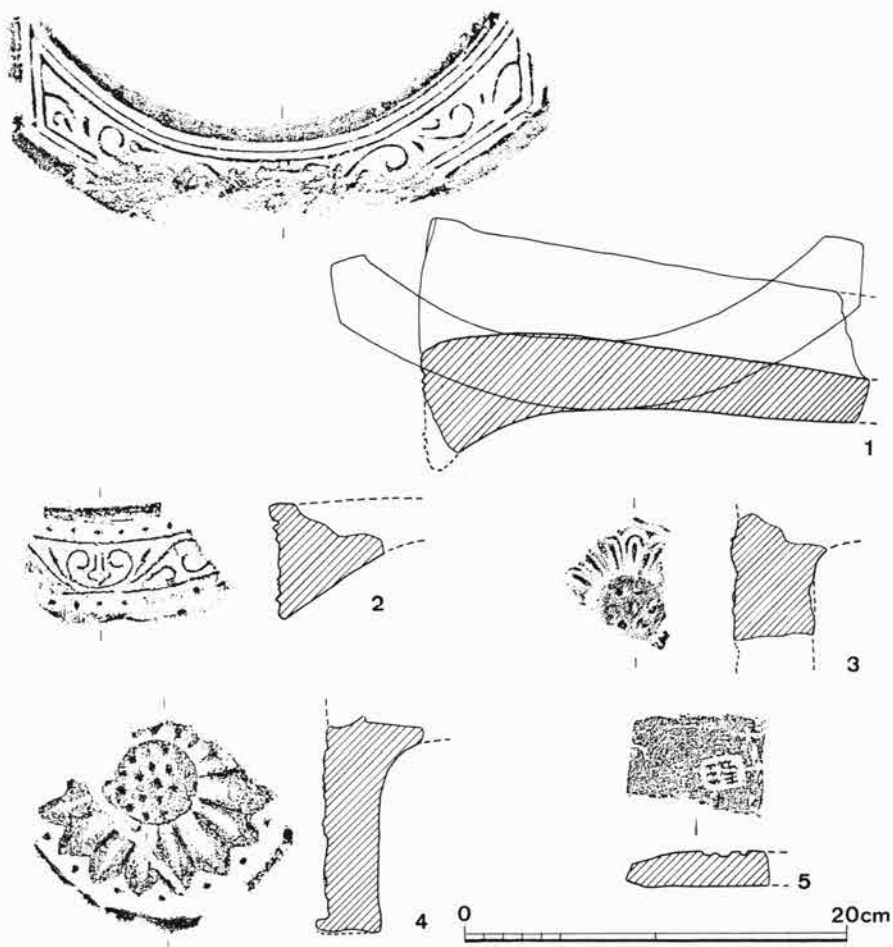
「廣」と記されたものは、2・6の他にも1点あり、計3点出土した。2は、須恵器の蓋頂部外面に記されたもので、平坦な頂部と屈曲する縁部からなり、口径16.1cm・高さ2.9cmを測る。6は、須恵器杯Aの底部外面に記され、口径13cm・高さ3.9cmを測る。残りの1点は、2同様須恵器蓋の頂部外面に記され、字体も同一である。6が包含層から出土し、他の2点はSD11901から出土した。ただし2は、破片の一部がSX11903から出土している。

「女」と記されたものは、4・11の2点あるが、字体は異なっている。いずれも須恵器で、4は杯A底部外面に、11は内面に記されている。4がSD11901から、11が包含層から出土した。

3は、須恵器蓋の頂部外面に「井」と記され、SD11901から出土した。平坦な頂部と屈曲する縁部からなり、口径13.7cm・高さ3.1cmを測る。

5は、土師器碗Cの底部外面に「□^{〔+カ〕}」と記され、包含層から出土した。口径12cm・高さ3.5cmを測り、口縁部外面下半は指頭痕を残し、上半は横なでを行う。その後、荒く横方向のヘラ磨きを加えている。

8～10は、須恵器の杯もしくは皿の底部で、8が内面、9・10が外面に記されている。8・9が灰色砂礫層から、10が包含層から出土した。



第31図 軒瓦・刻印瓦実測図及び拓影

1・2：軒平瓦，3・4：軒丸瓦，5：刻印瓦，2：包含層出土，
1・3：SD11901出土，4：SX11903出土，5：砂礫層出土

ヘラ描き土器(第30図)

SD11901からは、土師器高杯の裾部内面に字らしきものをヘラ描きしてあるもの(7)が出土している。ヘラ描きは、焼成後に行っている。

瓦類(第31図)

今回の調査では、軒丸瓦3点、軒平瓦12点、刻印瓦1点、そして多量の丸瓦、平瓦が出土した。以下に軒瓦と刻印瓦について概述する。

1は、SD11901から出土したもので、内区を二重の圏線で囲み、唐草は、3葉を一単位とし、3転させる。平城宮の6663C型式である。この瓦は、他の遺構や包含層からも出土して

おり、計7点を数える。

2は、包含層から出土したもので、上下の外区に連珠を配し、唐草は3葉で一単位をなす。平城宮の6664型式で、他にも1点出土している。

3は、SD11901から出土したもので、複弁8葉の蓮華文で、中房には1+6の蓮子を配する。

4は、SX11904から出土し、花卉が薬剣状を呈する素弁16葉の軒丸瓦である。弁端間に連珠を配し、中房には1+5+12の蓮子を有する。奈良県の横井廃寺に類例^(注10)が見られる。

5は、平瓦の凹面に「理」の陽刻を持った瓦で、平城宮における刻印瓦分類^(注11)の「理」の1に相当する。

なお、平瓦は縄目叩きを有するものばかりであるが、縄目の方向が横方向であるものが数点見られた。

5. 小 結

今回の調査では、三条大路北側溝を確認するとともに、土器溜りや轍群、ピット等を検出した。ただ残念ながら、建物跡は検出するには至らなかった。しかし、多数の瓦の出土は、近傍に瓦葺きの建物が存在したことを示唆している。また、鋳滓や炉壁体片の出土は、鍛冶工房の存在を窺わせる。

今回検出した轍群は、前述したように、これを埋めている砂礫層から墨書土器や長岡京期の特徴を有する土器が出土し、またこれだけの轍が残るほど車輛の往復が多数あり、長岡京造営時のものと考えるのが最も妥当である。今回調査地の北方で検出されている奈良時代の^(注12)流路(SD10)を埋めるなどして、この地一帯を宅地化した際のものであろう。その際に洪水を受け、砂礫で埋まったものと考えられ、長岡京における水害の1例と言えようか。

轍を埋め込んだ洪水の時期は、遺物からは、紀年銘等を持つものもなく明らかにすることはできない。ところで、続日本紀等の文献には、洪水の記事が散見し、現在『続日本紀』・『日本紀略』から、延暦3(784)年～13(794)年にかけての洪水記事を拾うと、延暦3年9月癸酉^(注13)の条、延暦7年10月丙子^(注14)の条、延暦11年6月乙巳^(注15)の条、延暦11年8月辛卯^(注16)の条に、それぞれ見える。このうち、延暦3年の記事は、長岡京の造営は始まってはいるが前後の記事から平城京のことと思われ、^(注17)また延暦11年の記事は、三条大路北側溝が砂礫層を削って築造されており、翌12年1月には長岡宮を壊して、平安京の工事に着手している^(注18)という時間的経過から、この砂礫層の堆積時期に比定するには難がある。残るは、延暦7年の記事であるが、文献に残る以外に洪水のあった可能性は否定できず、現時点では類推の域を出るものではない。ただ、可能性の1つとして指摘しておきたい。

今回調査を行った府立向陽高校の敷地は、過去 3 回調査が行われ、その結果から、敷地の北半部に当る長岡京左京三条二坊四・五町の宅地の性格については、公的性格の強いものと指摘されている。^(注20) 今回の調査地は、左京三条二坊五町に当り、遺物は、墨書土器・硯類(転用硯含む)・瓦等が多く出土するとともに、木簡・鉈尾もあり、今までの調査と同様の指摘ができよう。特に、官人と密接な関係を持つ鉈尾や、瓦葺き建物の存在を窺わせる大量の瓦類は、過去の調査での指摘を補強する資料と言えよう。瓦類は、軒丸瓦 1 点を除き、他の軒瓦はすべて平城宮系のものである。^(注21) ただ、弁が葉剣状を呈する素弁の軒丸瓦のみはやや特異で、奈良県の横井廃寺に類例があるように、明らかに寺院系の瓦である。この瓦は現在乙訓地域での出土例はなく、ただ北白川廃寺等に、モチーフに変化はあるが、やはり弁が葉剣状を呈する素弁 21 葉の軒丸瓦がある。同例は長岡京内でも出土しており、今回調査の近在の左京第 71 次調査地^(注24)でも出土している。モチーフ的には、今回出土瓦が北白川廃寺出土瓦につながってゆくものと思われ、それが長岡京を接点としてつながることは、興味深い。右京第 71 次調査地の宅地は、兵士に関連した公共的性格が考えられており、これらの瓦がどのような関連を持ってつながるかを考えることは、この五町の宅地の性格を考えるにも一助となる。

さて、今回の調査地は、五町の宅地の中でも南辺に当り、同じく五町の北辺に当る左京第 98 次調査地とは、転用硯や墨書土器が比較的多い他に、壺 L の胴部に小孔を穿ったものが両者で出土する等、密接な関連があり、五町の宅地が 1 町規模で利用されていた可能性を窺わせる。このことはすでに、左京第 98 次調査の報告の中で、左京第 7 次調査で検出された SB03 が東二坊第 1 小路推定地の直上ないしすぐ東側に当ることから、1 町規模ないし四町を併せた 2 町規模の宅地利用の可能性が指摘されている。^(注25) 今回の調査結果は、この可能性をさらに一歩進めることとなる。ただ、四町を併せた 2 町規模での宅地利用の可能性については、四町と五町の遺物等をもう少し比較検討し、今後の調査の中で確認していかなければならない課題である。

最後に、今回の調査では、以上述べてきた長岡京期の遺構・遺物の他に、若干平安時代の遺物・遺構を検出している。遺構では、ピットのうちいくつかは、平安時代まで下がるものであり、P-3 は、掘形の方位や出土遺物から見て、平安時代のものと判断している。他にも平安時代の遺物はいくらか認められ、左京第 7 次調査で検出した土塚等、平安時代の集落の広がりを確認することができた。^(注26)

以上、長々と述べたが、今後解明していかなければならない点は多く残されている。それらを今後の課題とし、後の調査成果に期待したい。

(山口 博)

付表1 出土土器観察表

遺構	器種	器形	法量		器形の特徴	手法の特徴	備考		
			番号	口径 (cm)				器高 (cm)	
S D 1 1 9 0 1	土師器	椀 A	1	12.3	(3.3)	<ul style="list-style-type: none"> ○小さな平底とわずかに内湾しながら外上方に開く口縁部からなる ○口縁端部は丸くおさめる 	<ul style="list-style-type: none"> ○内面は横なでを施す ○外面は、全面ヘラ削りを施すが、口縁端部近くの横なでをケズリ残すもの(2)もある 	<ul style="list-style-type: none"> ○胎土 ほぼ良好 0.5~1mm大の砂粒を若干含む ○焼成 良好 ○色調 淡明褐色 	
			2	12.5	(3.5)			<ul style="list-style-type: none"> ○胎土 0.5mm大の砂粒を多く含む ○焼成 良好 ○色調 淡明褐色 	
			3	13.2	(4.3)			<ul style="list-style-type: none"> ○胎土 良好 微砂粒を若干含む ○焼成 やや軟 ○色調 褐色 	
			椀 C	4	12.6	3.7	<ul style="list-style-type: none"> ○やや丸味を帯びた底部と内湾気味に外上方に開く口縁部からなる 	<ul style="list-style-type: none"> ○内面は、なでと横なで ○外面は、ヘラ削りを施した後、荒いヘラ磨きを加える 	<ul style="list-style-type: none"> ○胎土 良好 ○焼成 良好 ○色調 淡褐色
			杯 A	5	15.8	4.4	<ul style="list-style-type: none"> ○平坦な底部と、外上方に開く口縁部からなる ○口縁端部は、丸くおさめるもの(5・8・9・11)と内側に肥厚させるもの(6・7・10)がある ○7は、口縁部に外傾する端面を有する ○口縁部の外傾度の大きいもの(5・6・7・10)とやや小さいもの(8・9・11)がある 	<ul style="list-style-type: none"> ○内面は、口縁部に横なで、底部になでを施す ○外面全面をヘラ削りするが、口縁端部近くの横なでをケズリ残すもの(6・7・10)もある ○外面口縁部下半に、ハケ目状の擦痕を残すもの(5)がある 	<ul style="list-style-type: none"> ○胎土 良好 砂粒を若干含む ○焼成 良好 ○色調 淡明褐色
		6		15.5	4.7	<ul style="list-style-type: none"> ○胎土 ほぼ良好 ○焼成 良好 ○色調 淡明褐色 			
		7		20.1	(5.1)	<ul style="list-style-type: none"> ○胎土 やや粗い ○焼成 やや軟 ○色調 淡明褐色 			
		8		19.2		<ul style="list-style-type: none"> ○胎土 良好 微砂粒を若干含む ○焼成 やや軟 ○色調 淡褐色 			
		9		15.9		<ul style="list-style-type: none"> ○胎土 良好 0.5mm大の石英粒を若干含む ○焼成 やや軟 ○色調 淡明褐色 			
		10		19.3		<ul style="list-style-type: none"> ○胎土 やや粗い ○焼成 やや軟 ○色調 淡明褐色 			
		11		12.7	3.6	<ul style="list-style-type: none"> ○胎土 やや粗く1~2mm大の砂粒を若干含む ○焼成 良好 ○色調 明褐色 			
		杯 B	12	14.6	4.1	<ul style="list-style-type: none"> ○高台を有し、平坦な底部と、外上方に開く口縁部からなる ○口縁端部は、わずかに内側へ肥厚させる 	<ul style="list-style-type: none"> ○口縁部外面に密なヘラ磨き ○内面は、底部に斜格子の暗文、口縁部に一段の斜放射の暗文を施す ○口縁部内面には、さらにやや太い斜め方向の暗文を加える 	<ul style="list-style-type: none"> ○胎土 良好 ○焼成 良好 ○色調 明褐色 	

遺構	器種	器形	番号	法 量		器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考				
				口径 (cm)	器高 (cm)							
SD 11901	土 師 器	皿 A	13	15.5	2.5	<ul style="list-style-type: none"> 広く平坦な底部と内湾気味に外上方に開く口縁部からなる(15・20を除く) 15は、平坦な底部から外反気味に開く口縁部からなる 20は、他のものに比し、器高もやや深く、口縁部が直線的に外方に開く 口縁端部は、丸くおさめるもの(13~17)と内側にやや肥厚させるもの(18・19)、外傾する端面を有し、内側に肥厚させるもの(20)がある 	<ul style="list-style-type: none"> 底部内面はなで、口縁内面は横なでを施す 外面は、全面ヘラ削りを施す 底部外面に「井」状のヘラ記号を持つもの(19)がある 	胎土 焼成 色調	雲母を多く含む 良好 淡褐色			
			14	15.6	2.6			胎土 焼成 色調	ほぼ良好 大の石英・雲母を含む 良好 淡褐色			
			15	15.8	2.1			胎土 焼成 色調	ほぼ良好 良好 淡橙褐色			
			16	15.9	2.7			胎土 焼成 色調	やや粗い 径1mm 大の砂粒を含む やや軟 淡白褐色			
			17	15.8	2.6			胎土 焼成 色調	ほぼ良好 0.5mm 大の砂粒を含む 良好 淡明褐色			
			18	16.4	2.7			胎土 焼成 色調	ほぼ良好 やや軟 明褐色			
			19	20.7	2.1			胎土 焼成 色調	ほぼ良好 若干砂 粒を含む 良好 淡明褐色			
			20	25.1				胎土 焼成 色調	0.5mm 大の砂粒を 多く含む 良好 明褐色			
			高 杯	21					縦方向にヘラ削りを行い断面七角形に面取りをした脚をもつ	脚部の成形は、粘土紐を直接巻き上げて、筒部を形成	胎土 焼成 色調	赤色斑粒他、微砂粒を含む やや軟 淡明褐色
			壺 A	24	16.8				<ul style="list-style-type: none"> 肩の張ったイチジク形の胴部に直立する短い口縁部を付す 口縁部は、わずかに外に開き、端部は、丸くおさめる 把手の有無は不明 	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部内外面は横なでを施す 胴部外面は、ヘラ削りの後、頸部下半から下に密なヘラ磨きを加える 	胎土 焼成 色調	良好 石英・雲母の微粒を含む 良好 暗褐色
壺 E	22	9.4		短く内側に屈曲する口縁部を持つ広口の壺	<ul style="list-style-type: none"> 内面は横なでを施す 外面調整は、器表が剥落して不明ヘラ磨きを施していたと思われる 	胎土 焼成 色調	ほぼ良好 やや軟 淡明褐色					

遺構	器種	器形	番号	法 量		器形の特徴	手法の特徴	備 考	
				口径 (cm)	器高 (cm)				
S D 1 1 9 0 1	土 器	甗 A	23	15.5		<ul style="list-style-type: none"> 球形の体部に、「く」の字状に外反する口縁部を持つ 口縁端部は、内側に折りまげ肥厚させる 	<ul style="list-style-type: none"> 体部外面は、斜め縦方向にハケ目を施す 口縁部は、横なでを行い、25は、内面に横方向にハケ目を施す 25は、体部内面に横方向の細かいハケ目を施す 23は、体部内面に指頭痕を残し、軽くなる 25の口縁部外面下半には、縦方向のハケ目の痕跡が残る 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土 良好 焼成 良好 色調 淡褐色 	
			25	21.7			<ul style="list-style-type: none"> 胎土 やや粗い0.5~2mm大の砂粒を含む 焼成 良好 色調 淡褐色 		
		甗 C	26	26.6		<ul style="list-style-type: none"> 直に下方に延びる長胴の体部と外上方に開く口縁部からなる 口縁端部は、内側につまみあげて肥厚させる 	<ul style="list-style-type: none"> 体部外面は、斜め縦方向のハケ目、体部内面は、横方向のハケ目を施す 口縁部は、横なでし、内面には、横方向のハケ目痕が残る 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土 やや粗い 焼成 良好 色調 濃褐色 	
須 恵 器	蓋		28	19.9	3.5	<ul style="list-style-type: none"> 平坦な頂部と、屈曲する線部からなり、やや扁平な宝珠つまみを付す 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面回転なでを施す 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土 ほぼ良好 焼成 黒色斑 色調 粒を含む 	
								<ul style="list-style-type: none"> 胎土 堅 焼成 堅 色調 灰色 	
	杯 A		29	13.0	3.8	<ul style="list-style-type: none"> 平坦な底部と直に外上方にのびる口縁部からなる 口縁端部は、丸くおさめる 	<ul style="list-style-type: none"> 内面及び口縁部外面は、回転なでを施す 底部外面は、未調整 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土 精良 焼成 堅 色調 灰色 	
			30	13.3	4.4			<ul style="list-style-type: none"> 胎土 やや粗い 1mm大の砂粒を若干含む 焼成 やや軟 色調 灰白色 	
	杯 B		32	14.8	5.2	<ul style="list-style-type: none"> 平坦な底部に高台を付し、直に外上方にのびる口縁部とからなる 高台は、底部と口縁部の境ないしやや内側に付す 端部は丸くおさめる 	<ul style="list-style-type: none"> 内面及び口縁部外面は、回転なでを施す 高台は、貼り付け 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土 精良 焼成 堅 色調 青灰色 	
33			16.5	4.8			<ul style="list-style-type: none"> 胎土 精良 焼成 堅 色調 淡青灰色 		
皿 A		31	18.1	(2.1)	<ul style="list-style-type: none"> 平底の底部とやや外反気味の短い口縁部からなる 端部は丸くおさめる 	<ul style="list-style-type: none"> 内面及び口縁部外面は、回転なでを施す 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土 精良 焼成 やや軟 色調 灰色 		
皿 B		35	22.7	3.3	<ul style="list-style-type: none"> 高台を有し、直に外上方にのびる短い口縁部からなる 高台は、底部と口縁部の境のやや内側に付す 	<ul style="list-style-type: none"> 内面及び口縁部外面は、回転なでを施す 高台は貼り付け 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土 精良 焼成 堅 色調 灰色 		

遺構	器種	器形	番号	法 量		器形の特徴	手法の特徴	備 考	
				口径 (cm)	器高 (cm)				
S D 1 1 9 0 1	須 恵 器	壺 A	39	13.9		<ul style="list-style-type: none"> 肩の張った体部に、短い直立する口縁部を持つ 口縁端部は、水平な面を有する 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面、回転などを行う 肩部に自然釉がかかる 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土 1mm 前後の砂粒を含むも良好 焼成 堅 色調 灰色 	
		壺 L	29	4.3	10.4	<ul style="list-style-type: none"> 倒卵形にふくらむ体部に、外反する口頸部をつける 29は、端部は、丸くおさめ、高台は付さない 	<ul style="list-style-type: none"> ロクロ水挽き成形の後、回転などを施す 底部は、ヘラ切り未調整 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土 精良 焼成 堅 色調 明灰色 	
		壺 G	36	4.1 (底径)		<ul style="list-style-type: none"> 細長くのびる体部に外反する細長い口頸部をつける(上半部欠失) 	<ul style="list-style-type: none"> ロクロ水挽き成形 底部に静止糸切り痕を残す 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土 良好 焼成 良好 色調 明灰色 	
		円 面 硯				<ul style="list-style-type: none"> 長方形の透しを持つ 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面、回転など 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土 精良 焼成 堅 色調 青灰色 	
S X 1 1 9 0 3	須 恵 器	壺 L	44	6.3 (底径)		<ul style="list-style-type: none"> 倒卵形にふくらむ体部を持つ 低平な高台を持ち、体部上半に、小孔を穿つ 	<ul style="list-style-type: none"> 器表が剥落し、調整は不明 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土 やや粗い 焼成 軟 色調 灰白色 	
S K 1 9 0 4	須 恵 器	杯 B	34	16.9	5.7	<ul style="list-style-type: none"> 外下方にやや開く高台を有し、口縁端部を水平に外反させ丸くおわる 	<ul style="list-style-type: none"> 内面及び口縁部外面は、回転などを施す 高台は貼り付け 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土 良好 焼成 堅 色調 灰色 	
		土 師 器	甕 A	27	24.4		<ul style="list-style-type: none"> 半球形をした体部と「く」の字状に外反する口縁部を持つ 	<ul style="list-style-type: none"> 体部外面は縦方向のハケ目 口縁部は、横などを施し、内面に横方向のハケ目痕を残す 体部内面には、不定方向のハケ目を施す 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土 良好 焼成 良好 色調 淡褐色
P 3	須 恵 器	唾 壺	43	10.9		<ul style="list-style-type: none"> 口頸部のみの破片 僅かに外反する頸部から、一段稜をなした後、大きく開く口縁部に至る 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面、回転などを施す 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土 精良 焼成 堅 色調 青灰色 	
包 含 層	砂 礫 層	壺 L	42	7.4 (底径)		<ul style="list-style-type: none"> 倒卵形にふくらむ体部に外反する口頸部を付す 42は、高台を有する 	<ul style="list-style-type: none"> 回転などを施す 高台は、貼り付け 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土 0.5~2mm大の石英粒を若干含む 焼成 堅 色調 青灰色 	
		須 恵 器	鉢 A	38	18.9	13.6	<ul style="list-style-type: none"> 丸味を帯びた尖底と、内湾する口縁部からなる 口縁端部をわずかに外側に肥厚させる 	<ul style="list-style-type: none"> 内面及び口縁部は、回転などで 体部外面下半は、ヘラ削り 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土 良好 焼成 堅 色調 青灰色
		円 面 硯	36	10.8		<ul style="list-style-type: none"> 長方形の透しを持つ 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面、回転など 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土 精良 焼成 堅 色調 灰色 	
		ミ ニ チュ ア 壺	41			<ul style="list-style-type: none"> 壺Lのミニチュア 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面、回転など 肩部に自然釉がかかる 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土 精良 焼成 堅 色調 暗灰色 	

- 注1 高橋美久二「長岡京跡左京三条三坊第1次発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1975)』京都府教育委員会) 1975
高橋美久二「長岡京跡左京三条三坊第2次発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1976)』京都府教育委員会) 1976
- 注2 山下 正「長岡京跡左京第98次発掘調査(7ANFNT-3地区)」(『京都府埋蔵文化財情報』第8号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983
山下 正「長岡京跡左京第98次発掘調査概要(7ANFNT-3地区)」(『京都府遺跡調査概報』第8冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983
- 注3 山中 章「長岡京跡左京第71次(7ANFOT-4地区)～左京四条二坊九町～発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第8集 向日市教育委員会) 1982
- 注4 SD11901の国土座標値は下記のとおりである。
X = -118,594.3 Y = -26,117.0 標高14.74m
- 注5 他の調査における三条大路両側溝の国土座標値は下記のとおりである。
SD52 W X = -118,595.3 Y = -26,220.4 (北側溝) 左京第2次調査
E X = -118,595.2 Y = -26,216.9 (〃) 〃
SD54 W X = -118,607.7 Y = -26,220.7 (南側溝) 〃
E X = -118,607.8 Y = -26,217.0 (〃) 〃
SD0254 X = -118,606.8 Y = -26,041.0 (〃) 左京第71次調査
上記数値の出典は、下記文献による。
藤田さかえ「長岡京条坊プランと条里」(『長岡京』第28号 長岡京跡発掘調査研究所) 1983
- 注6 高橋美久二他「長岡京跡右京第27次発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-2)』京都府教育委員会) 1980
- 注7 木村泰彦他「長岡京跡右京第96次調査概要(7ANKUT-4地区)」(『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第1集(財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1984
- 注8 奈良国立文化財研究所「平城宮跡発掘調査報告 VII」(『奈良国立文化財研究所学報』第26冊) 1978
- 注9 注2と同じ
- 注10 稲垣晋也編『飛鳥・白鳳の古瓦』(平凡社)
- 注11 奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所基準資料V一瓦編5一」1977
- 注12 注1・注2と同じ
- 注13 『続日本紀』卷38「京中大雨。壞_二百姓廬舍_一。詔遣_二使東西京_一賑_二給_一之。」
- 注14 『続日本紀』卷39「雷雨暴風。壞_二百姓廬舍_一。」
- 注15 『日本紀略』前篇13「雷雨。潦水滂沱。式部省南門爲_レ之倒仆。」
- 注16 『日本紀略』前篇13「大雨洪水。」
なお、この記事に関しては、この洪水に伴う記事が同月癸巳・甲午条に見える。下記の通りである。
癸巳条。「幸_二赤目埼_一。覽_二洪水_一。」
甲午条。「遣_三使賑_二贍百姓_一。以_レ遇_二水害_一也。」
- 注17 『続日本紀』にある下記々事から見る限り、桓武はいまだ平城におり、また11月11日(戊申)に長岡京に移るまでは、新京乃至は長岡京と呼称している。
『続日本紀』卷38「(3年5月)丙戌。勅遣_二中納言正三位藤原朝臣小黒麻呂(中略)陰陽助外從五位下船連田口等於山背國_一。相_二乙訓郡長岡村之地_一。爲_レ遷_レ都也。」

〔(3年6月)己酉。以中納言從三位藤原朝臣種繼(中略)外從五位下丹比宿禰眞淨等。爲造長岡宮使。六位官人八人。於是。經始都城。營作宮殿。〕

〔(3年6月)壬子。(上略)。奉幣。以告遷都之由焉。又今年調庸。并造宮工夫用度物。仰下諸國。令進於長岡宮。〕

〔(3年6月)壬戌。有勅。爲造新京之宅。(下略)。〕

〔(3年6月)丁卯。百姓私宅。入新京宮內五十七町。(下略)〕

〔(3年10月)壬申。任御裝束司并前後次第司。爲幸長岡宮也。〕

〔(3年10月)癸巳。(上略)。又任左右鎮京使。各五位二人。六位二人。以將幸長岡宮也。〕

〔(3年11月)戊申。天皇移幸長岡宮。〕

〔(3年11月)甲寅。(上略)。中宮復留在平城。(下略)〕

『統日本紀』卷37 「元年閏正月壬寅。(上略)。並亦出京外。〕

〔(2年7月)戊戌。(上略)。令得入京。〕

〔(2年7月)庚子。(上略)。召還京師。薨時年六十三。(下略)。〕

注18 『日本紀略』前篇13 「(12年)正月甲午。遣大納言藤原小黒麿。左大弁紀古佐實等。相山背國葛野郡宇太村之地。爲遷都也。〕

〔(12年)正月庚子。遷御東院。緣欲壞宮也。〕

注19 延暦4年9月壬寅の条には、河内国が洪水になり、堤が決壊するとの記事があり、あるいは、淀川筋が氾濫したのであれば、上流に当る山背国でも洪水があった可能性はある。ただ、この場合は、淀川のもう1つの下流部に当る摂津職に洪水記事がないため、大和川筋の可能性が高いと思われる。

『統日本紀』卷38 「(4年9月)壬寅。河内國言。洪水汎溢。百姓漂蕩或乘船。或寓堤上。糧食絶乏。艱苦良深。於是。遣使監巡。兼加賑給焉。〕

注20 注1・2と同じ

注21 瓦当部の欠失したものと、連珠・周縁等の小片が3点あるが、平城宮系のものと思われる。

注22 注11と同じ

注23 梅原末治「北白川廢寺址」(『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第19冊)1939
梶川敏男ほか「北白川廢寺塔跡発掘調査報告」(京都市文化観光局文化財保護課・北白川廢寺発掘調査団)1975

注24 注3と同じ

注25 注2と同じ

注26 注1と同じ

5. 長岡京跡右京第153次発掘調査概要

(7ANIAE-3 地区)

1. はじめに

この調査は、京都府長岡京市今里小字赤ノ上（旧字名）において行われた府道長法寺向日線の拡幅工事に伴う、事前の発掘調査である。現地調査は、京都府乙訓土木事務所の依頼を受けた当調査研究センターが主体となり、^(注1)昭和58年12月9日から開始し、昭和59年2月2日に終了した。

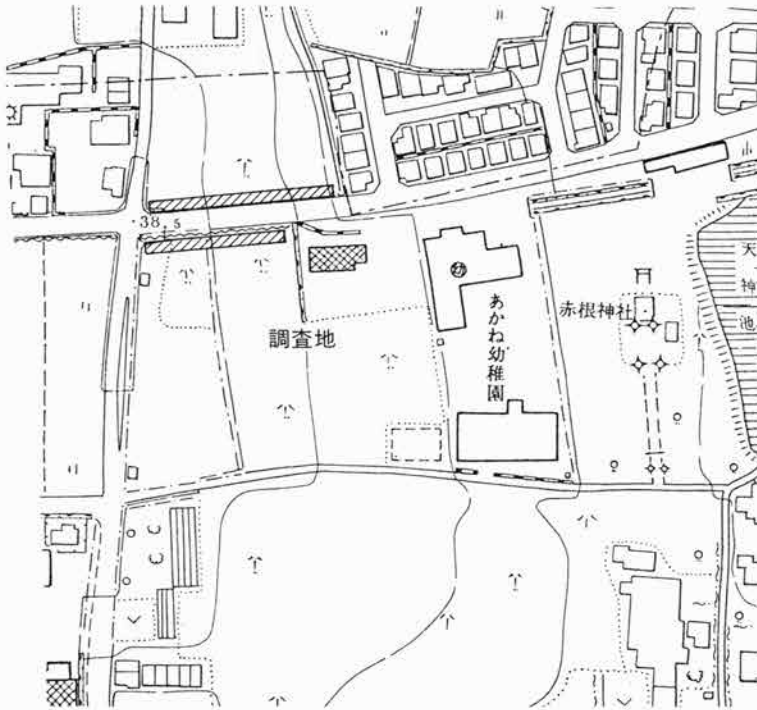
調査地は、京都盆地南西部で、阪急電鉄京都線「西向日」駅の西方、約1.3kmに位置し、西山丘陵の裾に形成された段丘に立地する。標高は、約29～38mである。調査地東側の段丘下水田面で、32～34mとなっている。調査地周辺の大部分は、現在、耕作地または、宅地となっているが、段丘端部である調査地付近は、南北に竹林が残っていた。拡幅が計画された道路は、ほぼ東西に伸び、段丘面に登る部分は、切り通し状になり、樟・樺などの大木が両脇

に植えられていた。この道路が大字界となり、北側が井ノ内地区、南側が今里地区に分かれるとともに、西方の延長上の丘陵裾には浄土宗の古刹である光明寺の正門が位置し、古くから利用された道路であったことを窺うことができる。

この場所は長岡京跡の条坊復元によると、右京二条三坊五町および、十二町の一部となり、調査地内を西三坊坊間小路が南北に通る位置に想定さ



第32図 調査地位置図 (1/50,000)



第33図 調査地付近地形図(1/2,500)

れていた。このように、当調査地では、長岡京域にあるとともに、大字名をとって名付けられている北側の井ノ内遺跡、南側の今里遺跡の接点にあっている。両遺跡とも広範囲にわたるもので、時期も断片的ではあるが、旧石器時代以降、現在に

に至るまでの遺構・遺物が検出されている。今里遺跡は、段丘上から、沖積面にまでおよぶもので、右京第7・12・26次調査等によって、長岡京大路側溝をはじめ、弥生・古墳時代の集落、さらには、墳丘長約74mと推定される墳丘部を削平された前方後円墳を検出している。また段丘には、白鳳期の創建と考えられる乙訓寺があり、それに係る瓦窯跡も調査されている。井ノ内には、現在も古墳が点々と残り、発掘調査によっても、古墳時代の住居跡や墓塚がいくつか検出されている。また、第25次調査においては、長岡京期の大型の掘立柱建物や、平安時代の建物も検出され、分布調査によって瓦器類が濃密に散布する地域も知られている。本調査は竹林等となっており、表面観察はできなかったが、東側に接する位置から、弥生時代後期の土器が出土している。

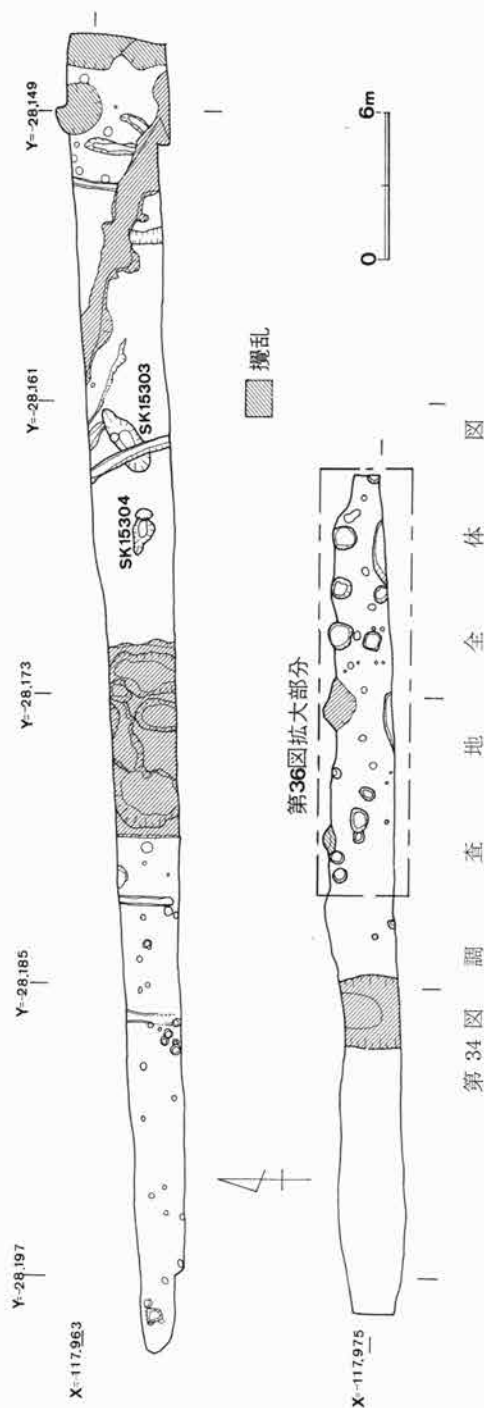
2. 調査概要

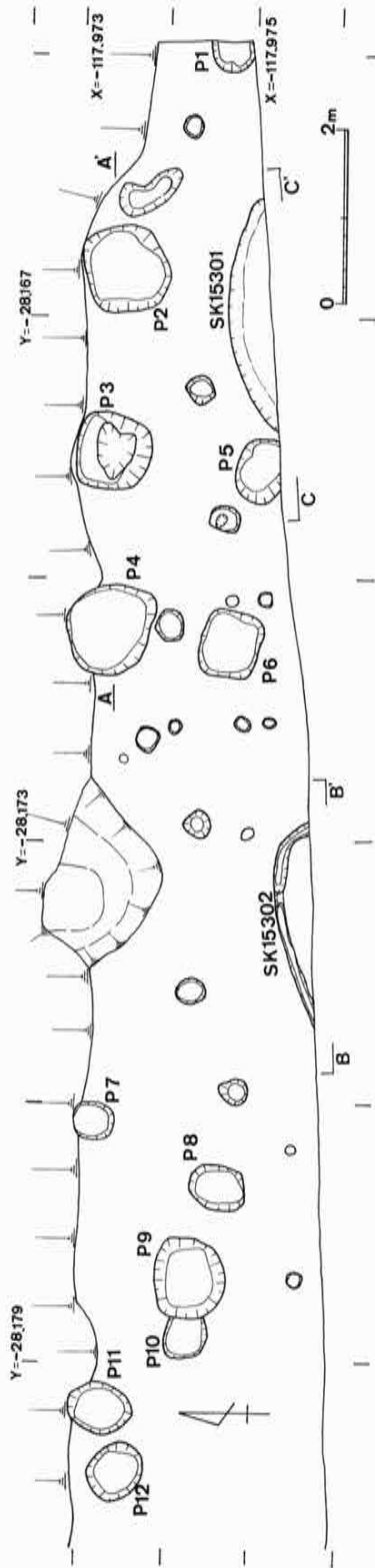
調査地は、道路拡幅という工事の性格上、道路を挟んで、東西方向に2本の細長いトレンチを入れる形となった。着手順に従って、便宜上、南側のトレンチをA、北側トレンチの西半をB、東半をCトレンチと呼称した。

Aトレンチは、東西約35m・南北幅2～3mを測る。北側の道路との間に水路が通り、こ

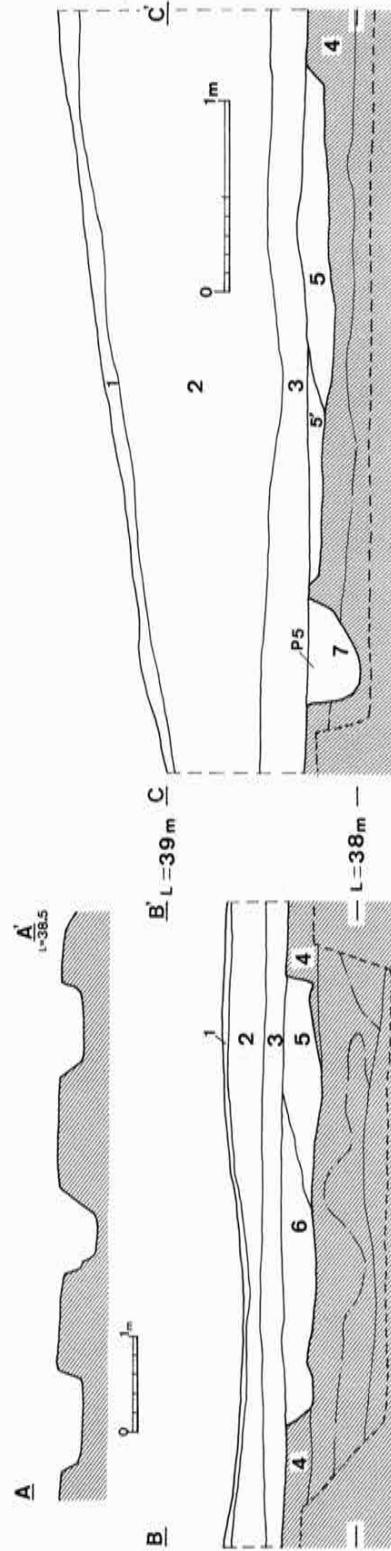
こを流れる水は、通称天神池に流入している。東側では、各種の遺構を検出できたが、西側約14mの間は一段低くなり、近・現代の攪乱、盛土が深くまで及び、遺構・遺物は検出できなかった。下層は粗砂層となり、Aトレンチ東側、あるいはB・Cトレンチ下層に見られる地層とは様相が異なっていた。Aトレンチで遺構を検出できた東半部は、東側ほど、竹林整備による盛土が厚くなっていたが、遺構面は、標高約38.3~38.4mで、大きな傾斜はない。遺構は小砂礫を含む赤褐色粘質土に掘り込まれ、中には、黒褐色系、あるいは暗褐色系の土が入っていた。ここで検出できた遺構には、大小のピット(注8)と土壇がある。ピットは直径0.1~1m・深さ0.1~0.4m、形状も円形、隅丸方形などがあり、一定はしない。それらの中でP3・P5・P6は、8世紀段階の土器が出土し、形状・埋土に共通性が見られる。また、P8・P10・P12も直線的に並び、これらは、掘立柱建物の一部を構成している可能性がある。P2とP4は径約1mを測り、黒褐色系の埋土を持ち、深さ・底面の形状等の点で類似している。各ピットとも出土遺物が極めて少なく、出土しても小片のものが多いため、明確な時期を確定し得ないものが多いが、P11から口縁から底部まで復元できた土師器の小型甕(第37図10)が出土した。

SK15301は深さ10~12cm、SK15302は深さ5~8cmを測る。ともに浅い土壇である。





第35図 Aトレンチ東部遺構平面図



第36図 Aトレンチ遺構断面図および南壁土層断面図(部分)

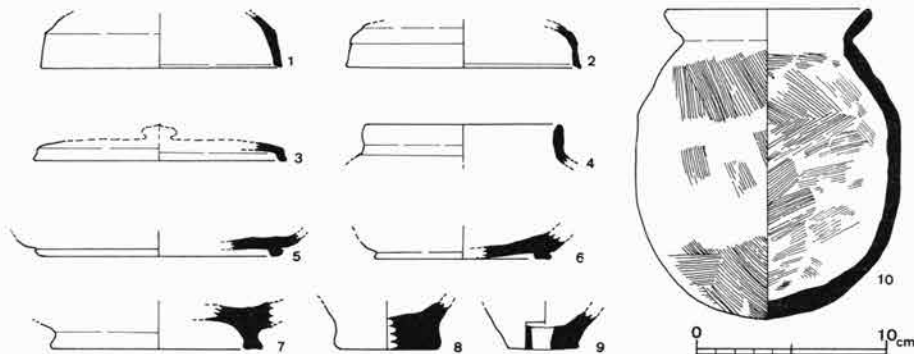
- 1. 表土
- 2. 暗褐色土(盛土)
- 3. 淡褐色土
- 4. 赤褐色土
- 5. 暗赤褐色土
- 5'. 暗赤褐色土(5より砂礫多)
- 6. 黒褐色土
- 7. 暗茶褐色土

調査地外に広がるため、全体の形は不明であり、土塚として把握したが、竪穴住居跡の一部である可能性も残る。埋土上部から、土師器、須恵器の細片を検出している。時期は断定できない。

Bトレンチは、道路北側の西部分で約21.5mの長さである。Aトレンチ東半と同様な赤褐色土に掘り込まれた小ピットを検出した。ピットは全体に小さく、深いもので、Aトレンチで検出したものよりも小規模のものである。一部には列状を呈するものもあるが、建物等を構成するものではなく、伴出遺物も極めて少ない。また、南北方向に掘られた2条の溝があるが、幅約30cm・深さ約10cmで遺物も伴っていない。

Cトレンチは、Bトレンチに連続する東側の部分で、約33mの長さである。ここで検出した主な遺構には、SK 15303 と SK 15304 がある。SK 15303 は、長さ3m・最大幅1.1m・深さ約20cmを測るやや不整形な土塚である。このトレンチの地山である黄褐色粘質土に掘り込まれ、6世紀の須恵器杯蓋等が出土した。SK 15304は小規模だが、埋土の様子から同時期のものと考えられる。Cトレンチには、このほかにも、溝や土塚状の落ち込みが見られるが、多くは近世以降に掘削されたもので、塵芥投棄のための穴や、円形の貯水槽などもある。このように、ここでは、遺構も希薄であり、A・Bトレンチ以上に、全体が削平を受けていることが考えられる。

出土遺物は、弥生時代以降、鎌倉時代まで、断片的ではあるが、各時期のものが出土している。弥生土器では第37図8・9に示した、甕や甔の底部などがあり、古墳時代以降は、土師器、須恵器が出土している。その他では、瓦器・平瓦があるが、全体としては小破片が多い。P11から出土した土師器の甕は、口径10.6cm・器高16.4cmで、外面淡赤褐色、内面淡褐色を呈し、内外面ともに刷毛で調整されている。器形の大きさに比べて、全体的に器壁が厚く、胴部には、輪積成形時の段が残る部分もある。風化による表面の剝離が進んでいる。第



第37図 遺物実測図

出土位置：1・7・9—包含層，2・3—P3，4・8—SK15301，5—P5，10—P11

37図1～7は須恵器である。1・2は6世紀の杯蓋であり、長岡京期前後の時期と考えられるものには、杯B、壺底部、蓋、土師器杯などが出土している。包含層中の出土が多く、遺構に伴うものは少ない。

3. おわりに

調査地の制約もあり、各遺構の全体像、あるいはその性格を明確にしきれない結果ではあったが、弥生時代以降、この付近にも集落の一端が広がっていることが確認できた。時期的には、かつての調査で検出されている段丘下の集落と共通するものがあるが、それとの関係に言及するためには資料不足である。長岡京の条坊に関する遺構は確認できなかったが、この付近にも長岡京関係の建物、道路等が存在したことは確実であり、このような段丘縁辺、段丘崖が当時、どのように土地利用されたか、課題として残るものである。

最後に、寒中、調査に参加いただいた方々をはじめ、調査の円滑な進行のため、御尽力下さった関係諸機関の方々に、御礼を申し上げる次第である。 (長谷川 達)

注1 現地調査は、当調査研究センター主任調査員長谷川達、同調査員黒坪一樹が担当した。

注2 高橋美久二「長岡京跡昭和52年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会) 1978

高橋美久二「長岡京跡昭和53年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会) 1979

高橋美久二「長岡京跡昭和54年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会) 1980

注3 吉本堯俊「乙訓寺発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会) 1967

注4 稲荷塚古墳・井ノ内車塚古墳などの前方後円墳のほか、大小の古墳が点在している。

注5 長岡京跡右京第72・107次調査などで検出されている。

注6 山中 章「都城の形成」(『向日市史』上巻 第6章第1節) 1983

注7 (財)長岡京市埋蔵文化財センター調査員岩崎 誠氏の御教示による。

注8 柱穴状のピットを「P」、土壇を「SK」で表す。

6. 長岡京跡右京第156次発掘調査概要

(7ANSNM 地区)

1. はじめに

今回の調査は、府道下植野・大山崎線の道路拡幅工事に伴うものである。所在地は、京都府乙訓郡大山崎町円明寺夏目21番地ほかで、阪急大山崎駅から西国街道を約800m北上し、傍示木の交差点を200m東進した夏目浄水場前である。調査地は、天王山の裾よりやや離れた標高10～11mの平坦地で、小泉川の後背湿地にあたる。長岡京条坊復元図によれば、



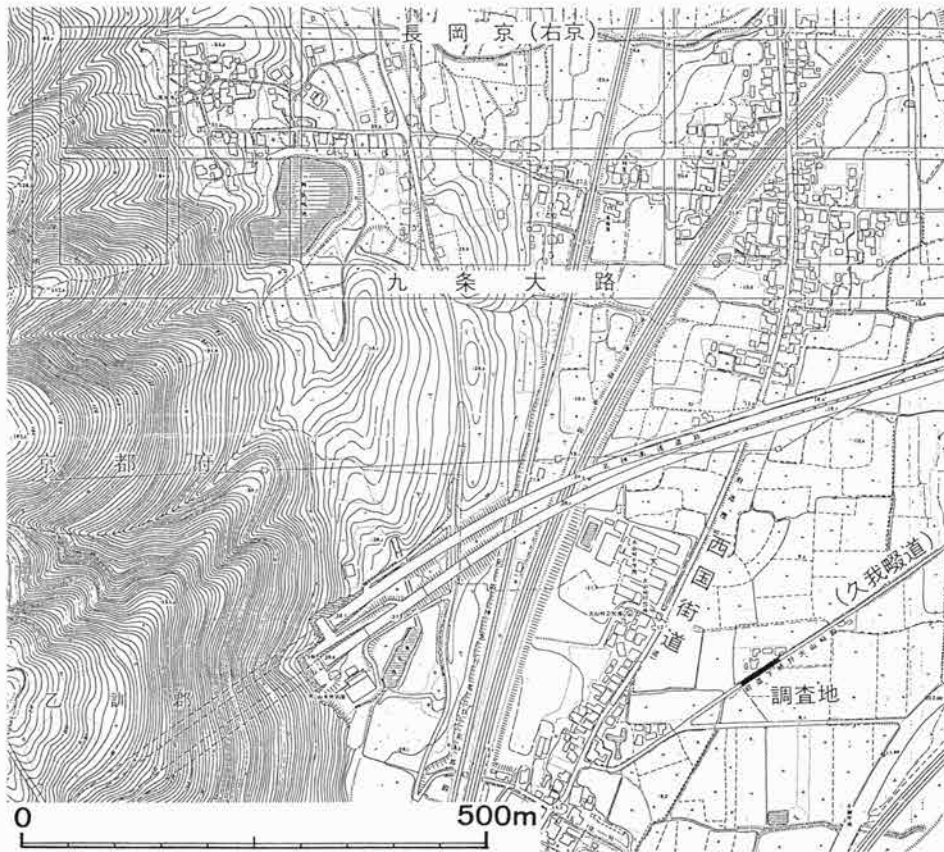
第38図 調査地位置図(1/25,000)

京城南限から約200m程南へ外れているが、周辺の遺跡には、傍示木古墳や以前の調査において奈良時代の掘立柱建物跡・溝が検出された百々遺跡等がある。また、調査地の下植野・大山崎線は、平安京に通じる久我堰を踏襲しているとされる。以上のことから、京域外にもかかわらず、各時代の遺跡の存在が推定されるので、調査を実施した。調査期間は、昭和59年2月13日から3月2日までである。

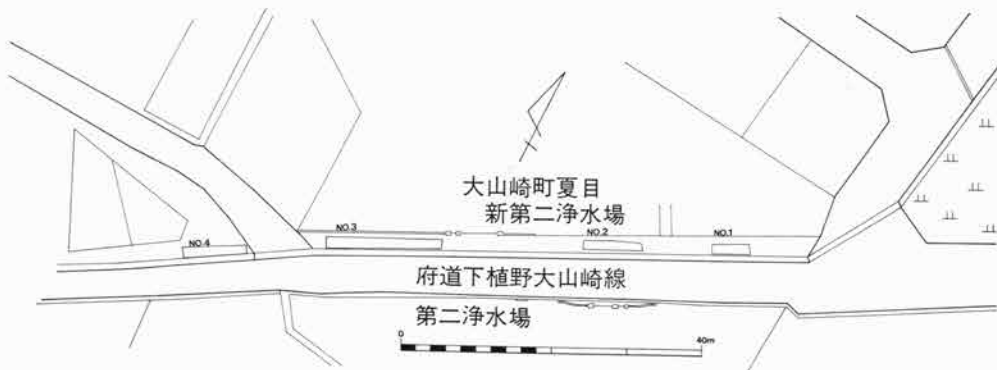
2. 調査概要

調査範囲は、計画長85m・幅3mの道路拡幅部に限り、幅1.2m・長さ10～20mのトレンチを道路沿いに4本設定した。トレンチ名は、東からNo.1・No.2・No.3・No.4である。開削は、No.3・No.2・No.1・No.4の順番である。掘削は、地表下1.3mまで重機を使用し、それ以後は手掘りであるが、壁面が崩落したり、湧水が激しく、困難の多い作業であった。4本のトレンチ全体を通じて遺物は少なく、土層の堆積状況も似ている。明瞭な遺構は検出できなかったが、流路あるいは氾濫原らしい土層が観察できた。

土層の堆積状況は、表面のコンクリート板以下、①旧耕土・床土、②淡黄灰色粘質土層、③灰色砂礫と青灰色粘質土の互層の順である。コンクリート板は夏目浄水場の擁壁で、高さ60cm・厚さ30cmを測る。これはNo.3のみで、No.1・No.2・No.4では暗灰褐色の盛土である。①層は、暗灰色を呈する厚さ20～30cmの腐植土で、近隣の水田面と連なるものである。



第39図 調査地位置図 (1/5,000)



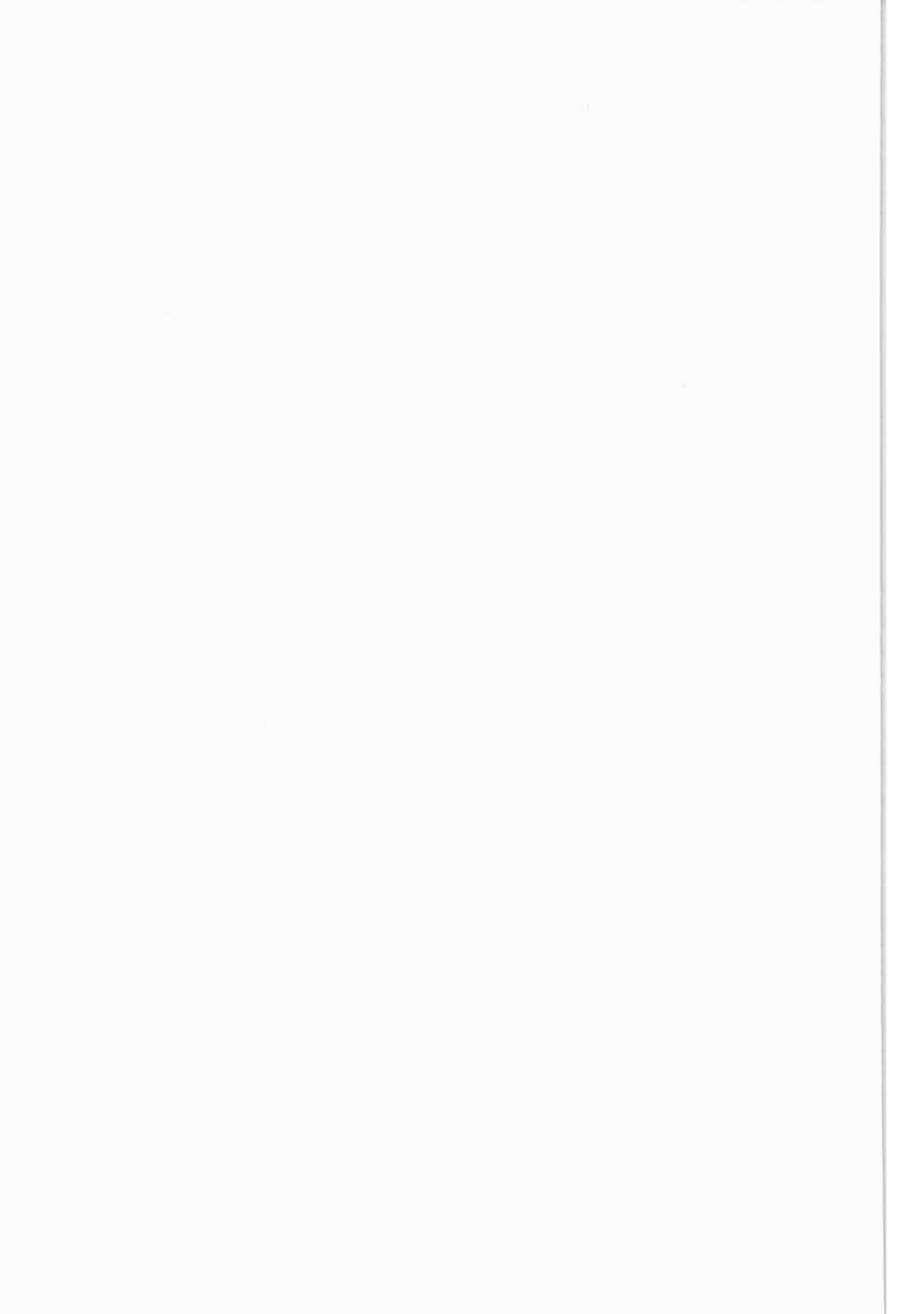
第40図 トレンチ配置図

東の方へレベルが低くなる。②層は、厚さ30～40cmで、ほぼ水平に堆積し、単一の粘質土である。これは①層以前の水田面か、あるいは「整地」層かと考えられる。少量の土器片を含む。③層は、地表下1.2～2.3m以上を測る。砂礫は小礫から拳大まで混り合っている。青灰色粘質土は厚さ10～15cmのレンズ状を呈している。遺物は、土師器・須恵器小片のほか、天目茶碗の細片が出土している。

3. ま と め

今回の調査では、流路あるいは氾濫原(小泉川による)と考えられる要素をもつ土層(③層)を確認したが、その広がり・方向・時期等は明確にすることができなかった。今後の調査をまって複雑な旧地形を復元し、あわせて長岡京域の南縁部の実態をあきらかにしていく必要があると思われる。

(竹井治雄)

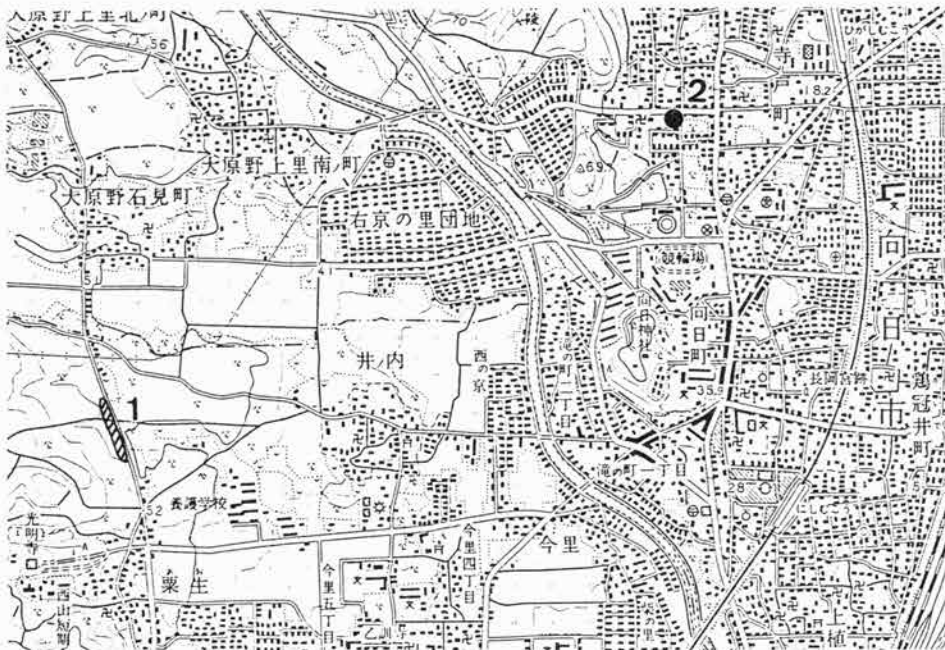


7. 長岡京跡立会調査概要

1. 府道大山崎大枝線

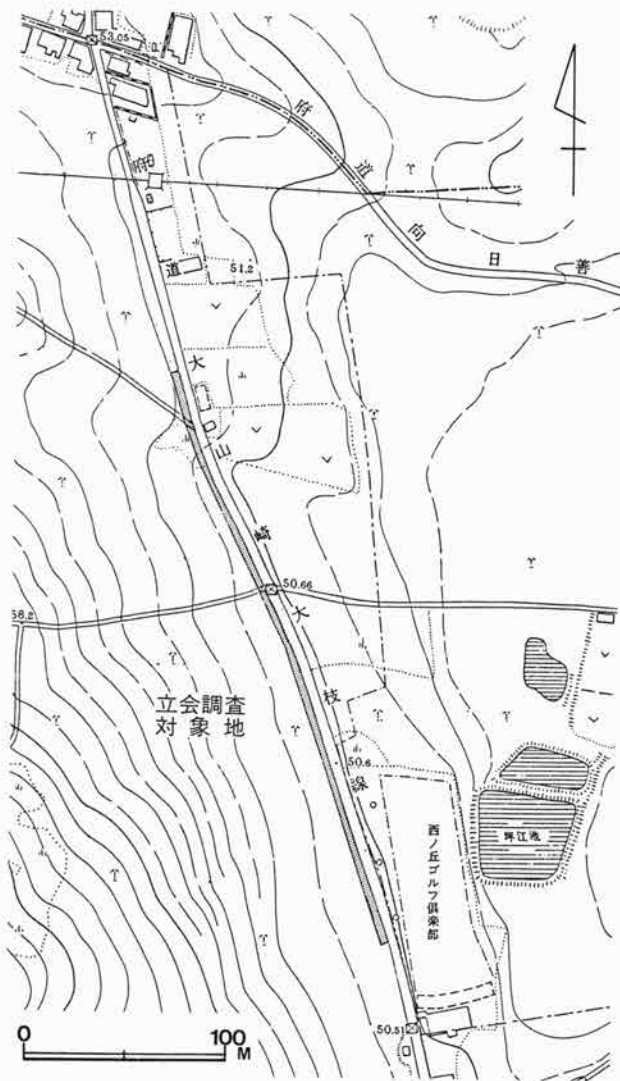
この調査は、西山丘陵の東縁に沿って南北に通る府道大山崎大枝線の道路整備工事に伴う立会調査である。工事は、京都府長岡京市井ノ内で、道路の西側に歩道を設置するために丘陵端部を削り取り、擁壁および側溝を設置するというものであった。工事は、南部と北部で2工区に分かれており、立会調査は最初に掘削の開始された南側からはじめ、後に北側の工区へ移り、昭和59年6月17日から、同年7月23日まで、断続的に実施した。

調査対象地は、長岡京跡の条坊復元では、右京三条四坊の西隣で、西四坊大路に接する地域にあたるとともに、付近には長岡京期以外の遺跡も多い。調査対象地のある井ノ内は、西山丘陵裾に広がる標高40~50mの段丘であるために、乙訓地方西部の沖積地より、比較的安定した地域である。旧石器時代以降、現代に至るまで人々の生活の場となっていたことが、発掘調査・分布調査等によって明らかにされるとともに、調査地近傍には、井ノ内車塚古墳をはじめ、多くの古墳も築造され、一部は現在にも姿をとどめている。調査地の現状は、小規模に起伏する竹林である。



第41図 調査地位置図 (1/50,000)

1. 府道大山崎大枝線調査地 2. 府道上久世石見里線調査地



第 42 図 府道大山崎大枝線調査範囲

立会調査の結果、削り取られる丘陵端は、道路面から測ると0.4~2mであったが、そこで観察できる土層はすべて、竹林整備によると考えられる人為的な盛土であった。場所によっては、現在に至るまで、毎年くり返される竹林への土入れの様子が明瞭に看取できる部分も認められた。現道路面下まで、掘り下げられた部分では、地山と考えられる淡黄褐色粘質土が確認できたが、工事による掘削範囲内では、遺構・遺物は認められず近世以降に投棄された瓦の集積が、部分的に認められた程度であった。しかし、調査対象地の道路東側に接する畑地では、長岡京期のものを含む土師器、須恵器が散布していた。畑地内で掘削された農業用の溝で、その断面を観察すると、耕作土下に暗茶褐色土、黒褐色土

が堆積し、特に大きく、後世の改変は受けていない状態であった。

このような点から、この付近においても、筍栽培のために整備、利用されている竹林では、大きく土地の改変が行われ、丘陵部の平坦化が進むとともに、厚い客土でおおわれていることが観察できた。しかし、この府道から東では、本来、地形に多少の起伏はあるものの、畑地の状態からもわかるように、比較的安定した、遺構面、あるいは、遺物包含層が、遺存しているものと考えられる。
(長谷川 達)

2. 府道上久世石見里線

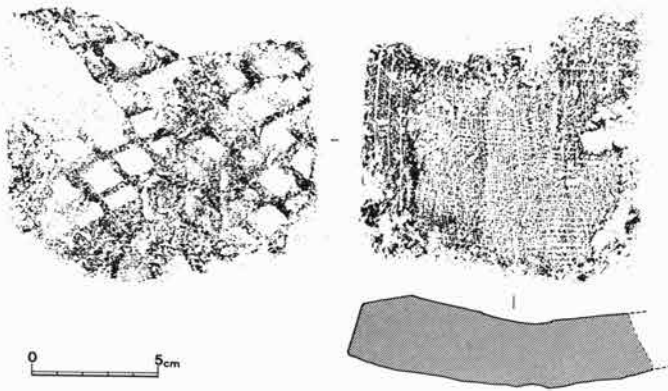
この調査は、府道上久世石見里線の拡張工事に伴う立会調査である。工事は、向日市寺戸町小字古城に所在する例慶児童公園の北辺部を削り取り、道路を拡張することによって、路線バスをはじめ、各通行車両の旋回、進行を円滑化することが目的とされていた。調査地は、長岡京の条坊復元によれば、宮域の北西部にあたるが、地形的には向日丘陵の東斜面であり、長岡京当時の利用状況が、必ずしも明確になっていない場所である。しかし、この向日丘陵線上には、元稻荷・五塚原・妙見山・寺戸大塚古墳等の前期大型古墳が、築造されているのをはじめ、弥生時代、鎌倉時代の遺跡も確認されている。工事による掘削箇所で土層を観察すると、上部には、公園造成時のものと考えられる盛土があり、それ以下は、地山の砂礫層



第 43 図 立会調査位置図 (1/2,500)

となり、遺物包含層等は認められなかった。しかし、盛土中からではあるが、第44図に示した平瓦片を採取することができた。凸面に一辺約1cmの斜格子叩きを施し、凹面には布目が残る。厚さ2.5～3cmで、淡灰色を呈し、やや軟質である。この瓦は長岡京期のもではなく、調査地西方の丘陵上にあつて7世紀創建と推定される宝菩提院廃寺に関連するものと考えられる。宝菩提院廃寺について、その様相は必ずしも明確になって

はいないが、軒丸瓦・軒平瓦が出土し、塔心礎も遺存しており、大規模な寺院跡の存在が推定されている。(長谷川 達)



第 44 図 平 瓦 拓 影

8. 長岡京跡左京第118次発掘調査概要

(7ANDKG-3, EJS-3地区)

1. はじめに

この調査は、京都府向日市森本町小柳22～30および鶏冠井町十相11～14・16において計画された向日市立体育館の建設に伴う事前の発掘調査であり、向日市の依を受けて財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが主体となって実施した。

この地域は、京都市に隣接するとともに、大阪への通勤圏でもあり、近年、急速に都市化され、市域の大半は宅地化されているが、国鉄東海道本線と東海道新幹線に挟まれた調査地周辺は、現在まで比較的広く農地が残っている。

長岡京の条坊復元では、左京一条二坊十町の南部と十一町をほぼ包括する場所であるが、調査は、体育館の建物部分の建設が予定された十町域を中心に行った。現在も残る地形と条坊を周辺の調査結果等から比較すると、西側を南北に走る市道が東二坊坊間小路（平安京の



第45図 調査地位置図 (1/5,000)

堀川小路)、東側の農道が東二坊第二小路(油小路)に重なり、十町と十一町を分ける南一条条間大路^(注1)の痕跡が、現在も森本町と鶏冠井町の大字界の水路となって残っている。周辺の調査では、規模の大小はあるが、西側で左京第10・14次調査があり、北側で、12・21次、東側で33・82・100次等の調査が行われている。14次調査(左京一条二坊六町)では、5棟の掘立柱建物や、南一条条間大路、東二坊坊間小路の側溝が検出され^(注2)、89次調査では、東三坊大路の東側溝を約100mにわたって確認している^(注3)。このように宮域に極めて近く、都の中でも整備の進んでいた地域であることに加え、洪積世丘陵上に立地する宮域と違い、水分の多い沖積地であるために、有機物を含む、多種多様な遺物が周辺で出土している。また、この付近は、左京第10次調査等で縄文土器^(注5)が出土したことから、縄文時代の集落跡(石田遺跡)としても確認されており、更に、調査対象地の東側に近接して、狐塚古墳として登録されている円丘が存在していた。

調査は、当調査研究センター調査課主任調査員長谷川 達、同調査員石尾政信・山口 博が担当し、遺物整理では、同田代 弘が加わった。本書の執筆は分担して行い、各文末に氏名を記している。遺構写真は主に、石尾政信・山口 博が撮影し、遺物写真は高橋猪之介氏に依頼した。

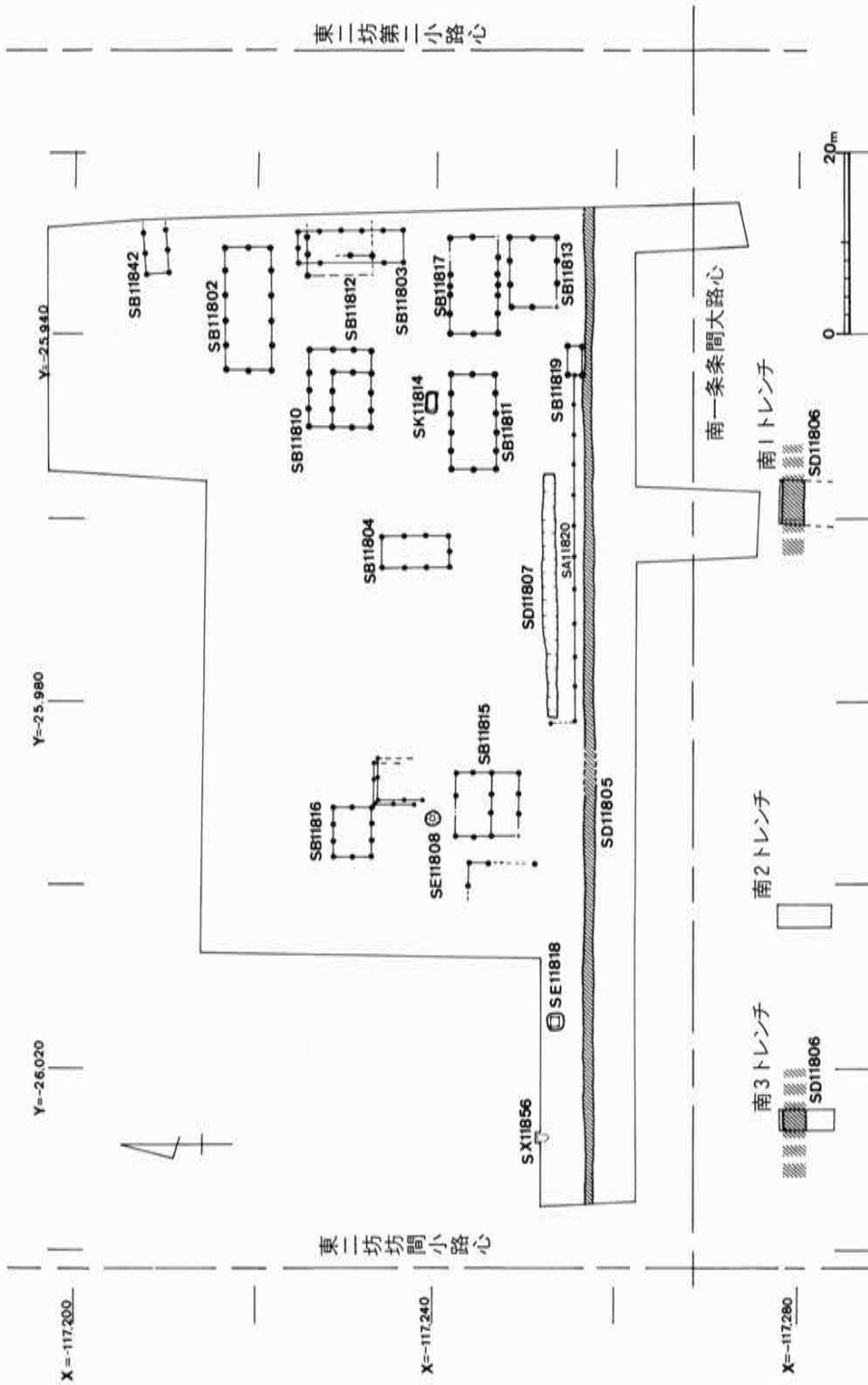
なお、調査期間中御協力を賜った関係機関および地元の方々、また、多々御指導・御教示を受けた方々に厚く感謝するとともに、現地作業、整理作業に従事していただいた方々^(注6)に御礼を申し上げる次第である。

(長谷川 達)

2. 調査概要

この調査地は、長岡京廢都後、農地とされたと考えられる場所で、地形はほぼ平坦となっており、標高約14mを測る。体育館建設が具体化されるまでは水田として利用され、各田の形状は、南北10m前後・東西100m余という東西に細長いものであった。

現地調査は、昭和59年10月10日に開始し、昭和60年2月14日に終了した。調査対象地は、体育館の建物・駐車場・公園等の周辺関連施設を含めると、約19,000m²であったが、発掘区は、体育館建物部分を中心に、当初約3,800m²を掘削した。発掘区の大半は、左京一条二坊の十町域に入り、ここで掘立柱建物跡や南一条条間大路等を検出したため、建物群の広がり、南一条条間大路北側溝の延長部分の確認のために十町域の調査区を拡張した。当初の調査区を東へ拡張するとともに、南西部を西に拡張した結果、南一条条間大路北側溝の東西の延長や多数の掘立柱建物跡を確認した。そこで、建物群の北への広がりを確認するため、調



第 46 図 検出遺構概略図 (1)

査区の一部を北へ拡張した。また、十一町域では、狐塚古墳の外部施設の確認、大路南側溝を把握する目的で、南1～3トレンチを入れた。

発掘区の土層の基本的な層序は、耕作土の下に床土(黄褐色粘質土)があり、調査地の多くは、その層を除去すると遺構が検出できる状態であったが、南東部では、黒褐色粘質土の遺物包含層が堆積していた。この遺物包含層は、発掘区西部を北西から南東へ向けて走る流路の上面を広くおおう形で堆積したもので、他の部分には認められなかった。また、同様の色調をもつ層が、発掘区北東の拡張部でも認められたが、遺物をほとんど包含せず、前記のものとは異質であった。地表から遺構面までの深さは、場所によって多少の深浅はあるが、全体的には0.3～0.5mと比較的浅く、各時代の遺構もほぼ同一面で検出した。遺構面は、ほぼ平坦であるが、それらが掘り込まれる基盤層は、沖積地という性格上、発掘区内でも場所によって大きく異なっている。西部の一部では淡黄褐色砂質土があり、東へ向けて徐々に黒灰色粘質土、灰色砂層、黄灰色砂層等に変化し、東南部では砂礫層となっている。時期の限られた遺物包含層は少なく、床土下部から、遺構検出面にかけて、各時代の遺物が混在して出土する状況が見られた。なお、柱掘形や溝の深さなど、遺構検出状況から、調査地全体がある程度、後世の削平を受けていると考えられる。

検出した遺構・遺物には、縄文時代・弥生時代・古墳時代・長岡京期およびそれ以降のものがあるが、質量ともに中心となるのは長岡京期である。検出した遺構には、南一条条間大路南北両側溝や長岡京期の掘立柱建物跡14棟・井戸2基・土壇、弥生時代の溝、中世の素掘り溝等があり、遺物は、SD11805(南一条条間大路北側溝)から多量の長岡京期の土器が出土したほか、墨書土器・軒瓦・木製品・金属製品・施釉陶器・弥生土器・縄文土器・石器・銭貨等がある。

以下、章を改め遺構・遺物について解説する。

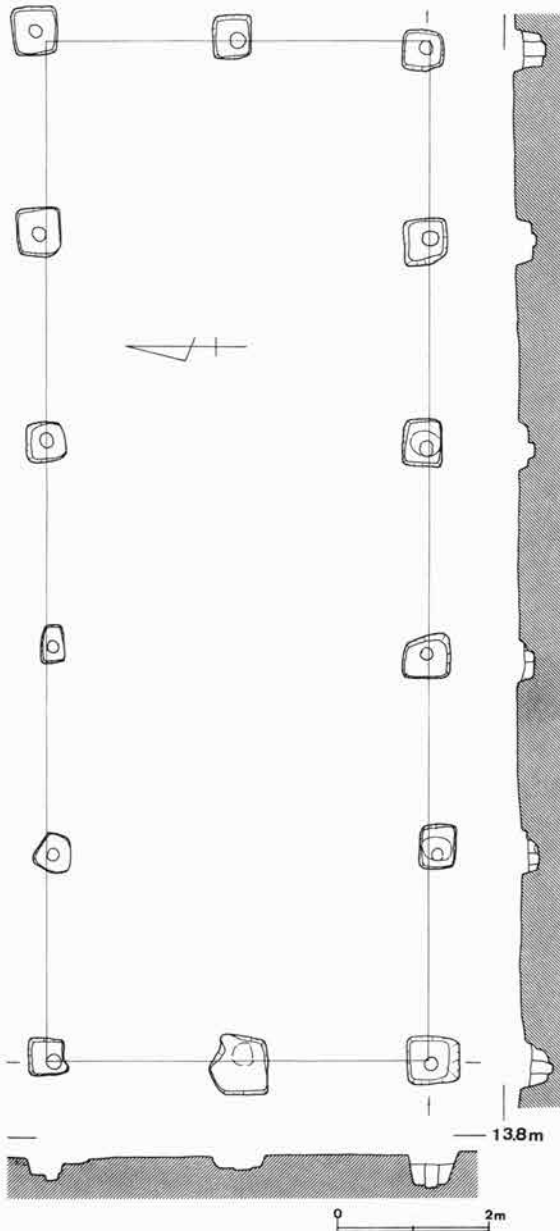
3. 検出遺構

この調査では、長岡京期の掘立柱建物跡や道路側溝を中心に多くの遺構を検出した。ここでは、長岡京期の遺構とその他の遺構に分け、各遺構毎に記述する。なお整理の都合上、各遺構に通し番号を付すとともに、その前に長岡京跡左京域の調査次数の118と、遺構の種類を表す記号(SA-柵列, SB-建物, SD-溝, SE-井戸, SF-道路, SK-土壇, SX-特殊遺構)をつけて一連の遺構番号としている。

(1) 長岡京期の遺構(第46～55図)

この時期の遺構には、掘立柱建物跡、溝、井戸、土壇、柵列、道路等がある。建物は、十

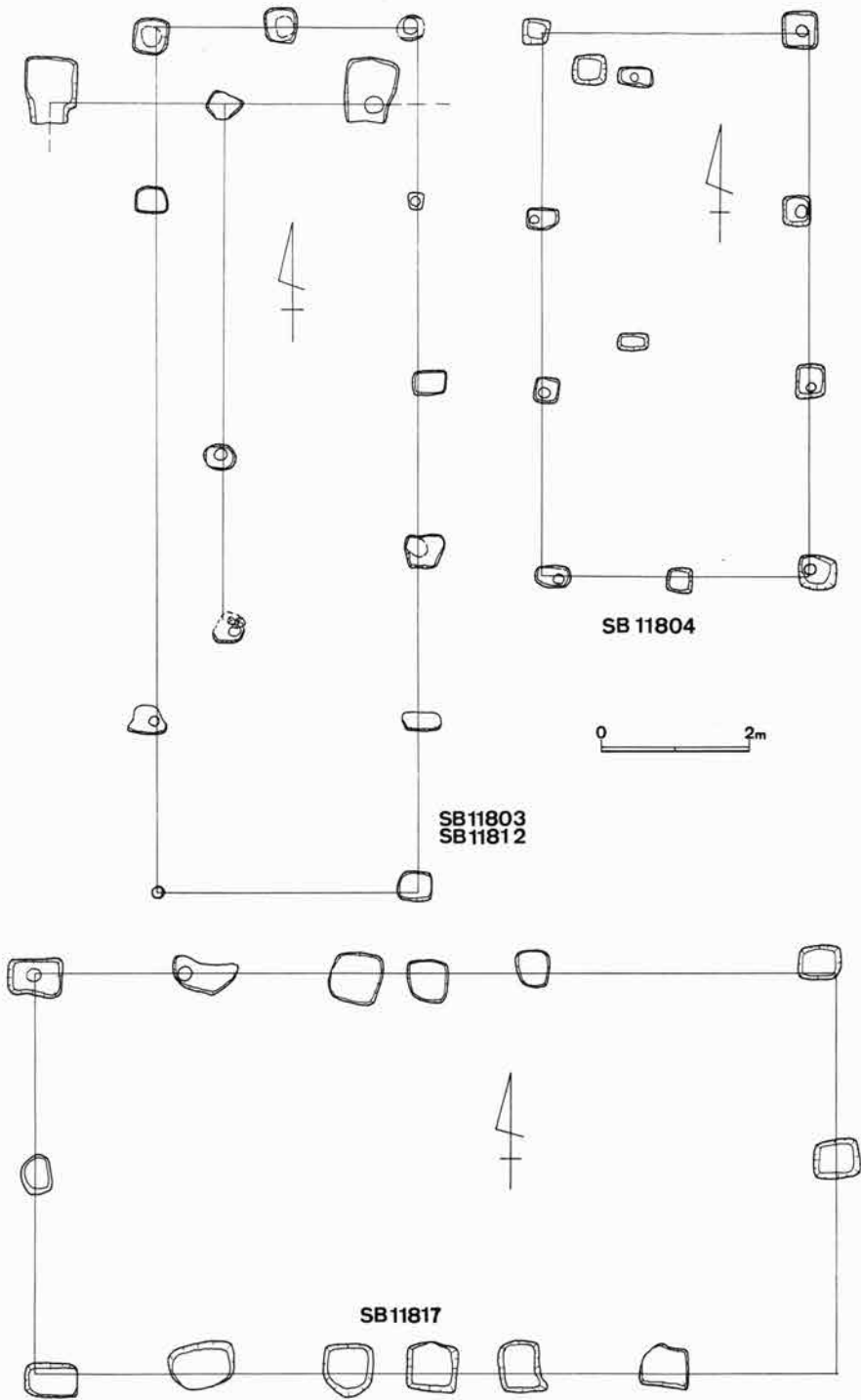
町域の発掘区で検出され、完結しないものを含めると14棟以上で、東部と西部の2群に分けることができる。井戸は西部で2基あり、1基は井戸枠を残していた。溝では、南一条条間大路南・北側溝や宅地内の溝等が確認できた。また、土師器の小皿と銭貨が集中して出土した特殊遺構も検出した。



第47図 SB11802 実測図

SB11802 東部建物群の北側中央に位置する桁行5間(13.5m)・梁行2間(5.1m)の東西棟の建物跡である。柱間寸法は、桁行2.7m(9尺)・梁行2.55m(8.5尺)等間である。柱掘形1辺0.6~0.8mの掘形を基本として、深さは深いもので約0.4m、浅いもので約0.2mを残すが、明確な柱抜き取り痕はない。柱痕は径約0.2mを測る。この建物群の中では、柱間寸法が大きく、その建物配置からも、中心的役割を持つ建物であったと考えられる。なお、この付近には中世の素掘り溝が多く、またその深さも深いことから、柱掘形の遺存状況は悪い。国土座標は、北西隅柱でX=-117, 216.6, Y=-25,943.6である。

SB11803 東部建物群の中でSB11802の南東に位置する、桁行5間(12m)・梁行2間(3.6m)の南北棟の掘立柱建物跡である。柱間寸法は、桁行2.4m(8尺)・梁行1.8m(6尺)等間である。この付近も中世の小溝が多く、また深く掘られているため、すべての柱穴を検出することはできなかった。

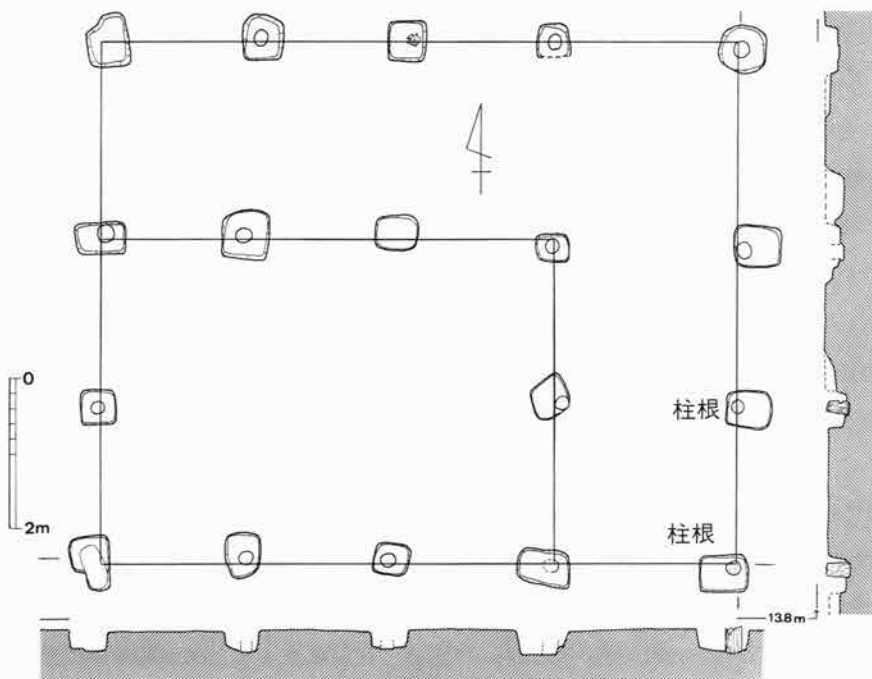


第 48 図 SB11803・11804・11812・11817 平面図

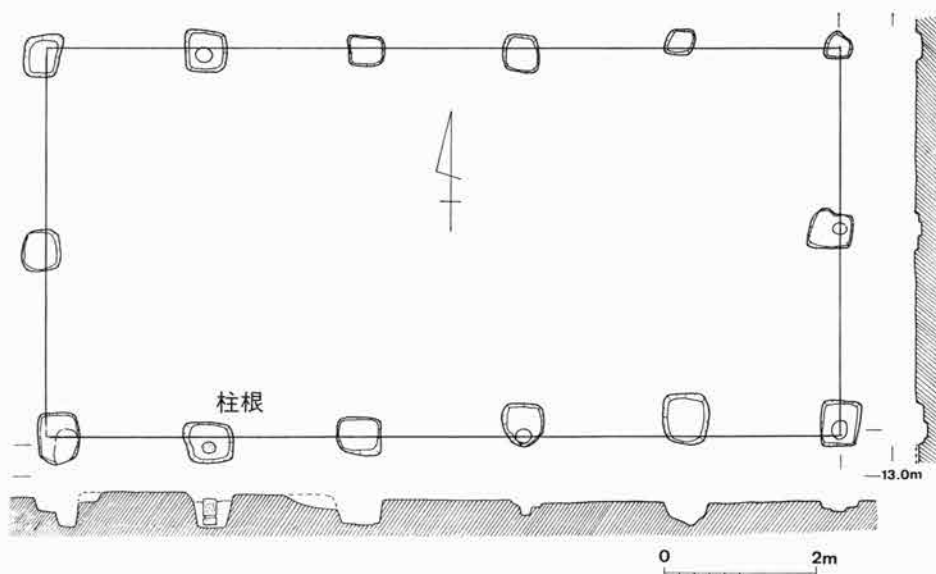
柱穴の平面形は遺存状態の良いものは、1辺40～50cmの矩形であるが、柱根部分しか検出できないものもある。南東隅の柱穴内から、土師器高杯の脚部が出土した。建物北西隅の柱穴の国土座標は、 $X = -117, 224. 7$ 、 $Y = -25, 931. 9$ である。

SB11804 発掘区東部の一連の建物からやや西に離れた位置に建つ桁行3間(7.2m)・梁行2間(3.6m)の南北棟建物跡である。柱間寸法は、桁行2.4m(8尺)・梁行1.8m(6尺)等間で、柱穴平面形は、1辺30～40cmの矩形を呈する。国土座標は、北東隅柱穴で $X = -117, 233. 9$ 、 $Y = -25, 961. 9$ である。また、建物に重なるように他の柱穴があるが、性格は不明である。

SB11810 SB11802の南西部に建つ東西棟の掘立柱建物跡で北面と東面に廂を持つ。身舎部分は桁行3間(5.85m)・梁行2間(4.2m)で、柱間は、それぞれ1.95m(6.5尺)と2.1m(7尺)であるが、北面廂は2.7m(9尺)、東面廂は2.4m(8尺)を測り、各部において変則的な寸法を用いている。柱穴平面形は、1辺40～60cmの矩形のものが多く、遺存状態は、比較的良好である。柱穴には、柱根の遺存したものや、底面に礎板状の板材の残るものもあった。国土座標は、身舎北西隅柱で $X = -117, 228. 3$ 、 $Y = -25, 949. 7$ 、東面廂南端の柱穴で $X = -117, 232. 8$ 、 $Y = -25, 941. 5$ である。



第 49 図 SB11810 実測図



第50図 SB11811 実測図

SB11811 東部建物群の南西部に配置された桁行5間(10.5m)・梁行2間(5.1m)の東西棟の掘立柱建物跡である。柱間寸法は、桁行2.1m(7尺)・梁行2.55m(8.5尺)等間で、柱穴掘形は1辺50~60cmの矩形であるが、軟質な砂層に掘り込まれている部分もあり、原形のくずれているものもある。柱穴の1つには、遺存状態の良好な柱根が残っていた。柱根は八角形で、径約15cm、下端部近くに抉り込みがあり、それが柱根を一周していた。この建物の国土座標は、南東隅柱穴でX=-117,246.4、Y=-25,944.1である。

SB11812 SB11803と重複して検出した掘立柱建物跡である。確認できた柱穴は少なく、北側の東西柱列と、南北の柱列の一部に留まる。その柱間寸法および位置から、SB11810に对置された同規模の建物を想定することができるが、後世の削平、小溝等による攪乱を考慮しても、遺存している柱穴数が乏しい。SB11803との関係は、柱穴の重複している場所はないが、想定し得る形状から、この建物がSB11803に先行するものと考えられる。あるいは確認できた柱数等から、建設途中で放棄され、形状を変えたSB11803が建てられたとも考えられる。

SB11813 東部建物群の南部に建てられた桁行3間(7.65m)・梁行2間(5.1m)の東西棟の掘立柱建物跡である。柱間寸法は桁行・梁行ともに2.55m(8.5尺)である。南西隅の柱は、中世の土壇(SK11855)によって削られている。この建物とSB11817は、極めて近接しており、それぞれの南北の柱列の間隔は、約1.2mであることから、先後関係があるものと考えられる。この建物群がある程度、左右対称に配置されていることから、SB11817を先とすること

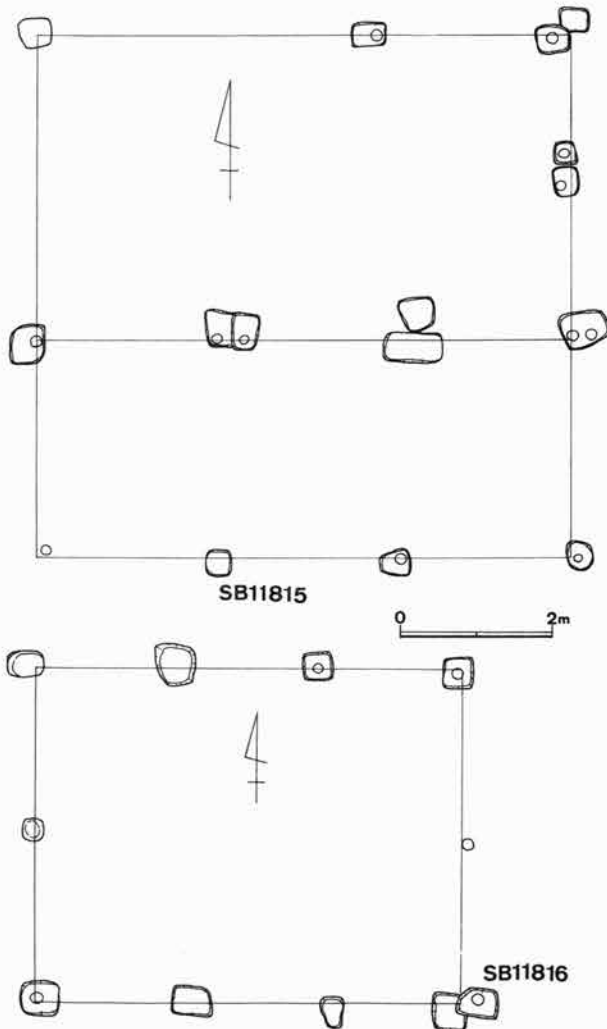
ができるが、確証はない。北西隅柱穴の国土座標は、 $X = -117,248.1$ 、 $Y = -25,936.9$ である。

SB11817 SB11811の東に位置する掘立柱建物跡で梁行2間(2.7m)であるが、桁行については変則的である。桁行は5間(10.8m)を原則とするが、両側各2間分の柱間寸法は2.1m(7尺)で、中央の柱間の両脇に1.2m(4尺)の間隔で柱が設けられている。補強的な意味で建てられたものと考えられるが、正確な意図は不明である。東の妻側中央の柱穴内から和同開珎が1枚出土している。国土座標は、北西隅柱穴で $X = -117,241.3$ 、 $Y = -25,939.8$ である。

SB11819 東部建物群最南部で、SD11805に接するように建てられた桁行、梁行とも1間の掘立柱建物跡である。柱間は、南北1.5m(5尺)・東西3m(10尺)の規模である。南一条条間大路に面したその位置から、小規模な門跡である可能性が高いが、続日本紀に見える門

を規制する記事内容には反しており、課題を残す。北西隅柱穴の国土座標は、 $X = -117,254.5$ 、 $Y = -25,944.2$ である。

SB11815 発掘区西部で検出した東西棟の掘立柱建物跡で、桁行3間(7.2m)・梁行2間(3.9m)の身舎の南面に廂を持つ。柱間寸法は、桁行2.4m(8尺)・梁行1.95m(6.5尺)・廂部分2.85m(9.5尺)が基本となる。しかし、その柱間寸法、方向等に乱れがあることに加え、2個の柱穴が重なる部分もあり、建て替えが行われていることがわかるが、建物の変化を特定するには至っていない。国土座標は、身舎南西隅柱穴で $X = -117,246.2$ 、 $Y = -25,944.6$ である。なお、この建物の身舎部分の柱穴から、須恵器壺G、高杯がそれ



第 51 図 SB11815・11816 平面図

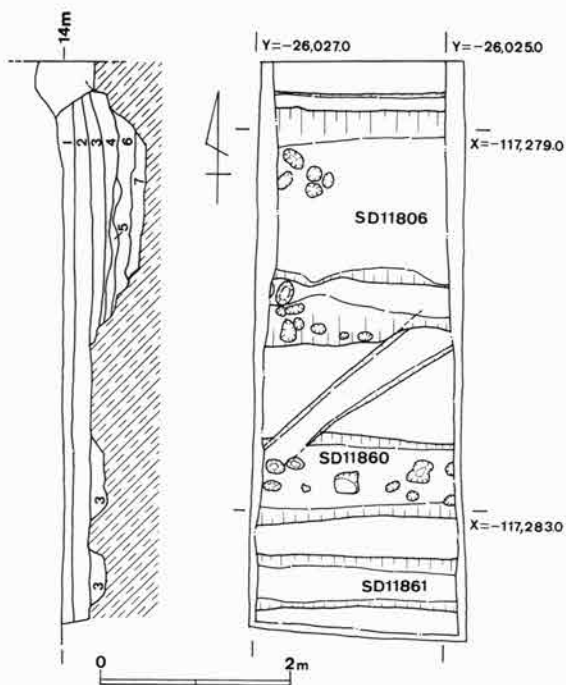
ぞれ完形に近い状態で出土した。

SB11816 SE11808の北で検出した桁行3間(5.4m)・梁行2間(4.2m)の掘立柱建物跡である。柱間寸法は、桁行1.8m(6尺)・梁行2.1m(7尺)を測る。国土座標は、北東隅の柱穴で $X = -117,228.7$, $Y = -25,991.4$ である。

なお、SB11815・16をはじめ、SE11808を囲むように構築された西部の建物群については、前記の2棟以外にも、井戸の北東部および、南西部分に数間分の柱列を検出し、さらに何棟かの建物、あるいは柵等が存在していたことがわかるが、流路等で消失した部分もあり、特定できない。

SB11842 東部建物群のSB11802より更に北に建つ、桁行2間(3.6m)以上・梁行1間(2.1m)の掘立柱建物跡である。規模も他のものに比べて小さく軸も偏しており、この南の建物群と一連のものであるかは確定できない。

SD11805 十町域の発掘区南部で検出した溝で、南一条条間大路の北側溝と考えられる。一部後世の流路によって寸断され、不明瞭な部分もあるが、延長109mにわたって検出できた。規模は、場所によってやや異なるが、幅1~1.3m・深さ0.15~0.4mを測る。埋土は、



第 52 図 南3トレンチ SD11806 実測図

1. 耕作土 2. 床土(灰褐色土) 3. 黒褐色粘質土(灰色土混)
4. 黒褐色粘質土 5. 黒灰色砂質土 6. 黄灰色砂層
7. 暗青灰色粘質土

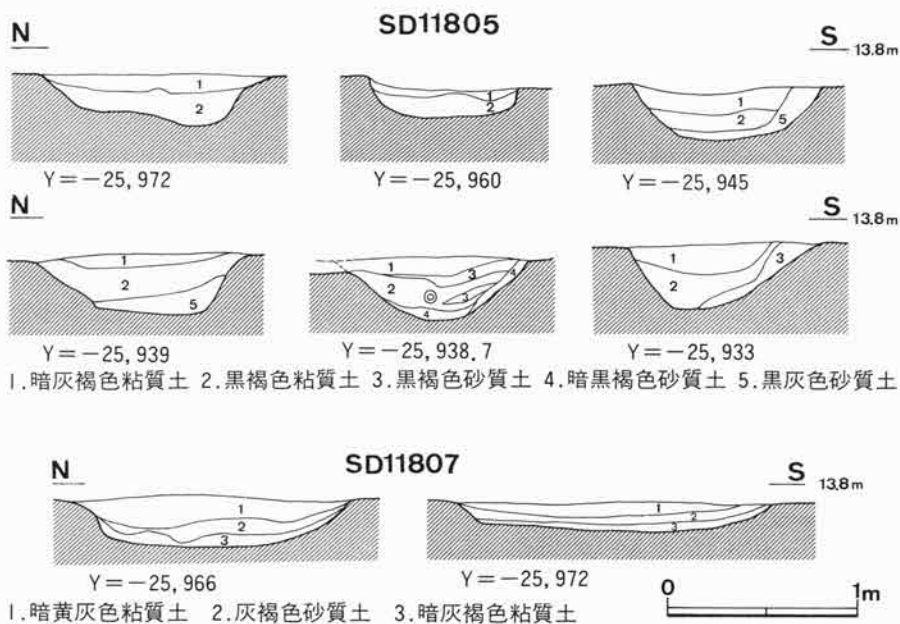
地山との関係もあり、東側では砂礫分が多く、西側では黒褐色粘質土である。比較的深く残っている東側の土層は、大きく分けて、上下2層からなり、下層に砂質分の多い土が堆積していた。遺物は、西半分から集中して出土し、東側では極めて少ないものであった。この遺物の多少は、東西の建物の性格に起因することが考えられる。溝底の一部では、形状がやや不鮮明であるが、獣足等の痕跡が残っていた。国土座標は、西端で $X = -117,257.3$, $Y = -26,034.0$ 、東端で $X = -117,256.8$, $Y = -25,928.0$ である。

SD11806 十一町域に入れた3

本のトレンチ(東から南1・2・3トレンチ)のうち、2本で確認した溝で、南一条条間大路の南側溝と考えられる。南2トレンチでは、後世の攪乱によって確認できなかった。南1トレンチでは、幅2.3m・深さ0.35mで5mの間を検出し、南3トレンチでは、幅2.6m・深さ0.5mを測った。北側溝に比べると規模が大きく、堆積した土層から、水の流れていた痕跡も観察できるが、溝の埋土中に新しい時期の遺物は認められず、都の廃絶後、大きく時を移さずに埋没したものと考えられる。しかし、現在も、この遺構に沿って水路が設けられており、何らかの形で生かされ続けた溝であったことがわかる。南3トレンチでは埋土に水分も多く、遺物の遺存状況も良好であり、溝底近くから完形に近い提瓶や、木印を脚部中空部に入れた土師器高杯が出土した。国土座標は、南3トレンチでX=-117,279.8, Y=-25,025.0, 南1トレンチでX=-117,279.5, Y=-25,957.0である。

SD11807 十町域発掘区の南部中央で検出した東西溝で、SD11805に平行して掘られている。長さは約27m・幅1.1~1.4m・深さ0.1~0.3mを測る。出土遺物は少ないが、溝東端付近から、やや集中して出土した。SD11805の北側に位置してほぼ平行であるが、溝の肩部では、約2.9~3.3m離れている。宅地内溝と考えられるが、建物の希薄な部分にだけ設けられている。国土座標は、西側でX=-117,253.0, Y=-25,981.6, 東側でX=-117,251.7, Y=-25,954.5である。

SA11820 SD11805と07両溝の間で延長37.7mにわたって検出した東西方向の柱列で、大



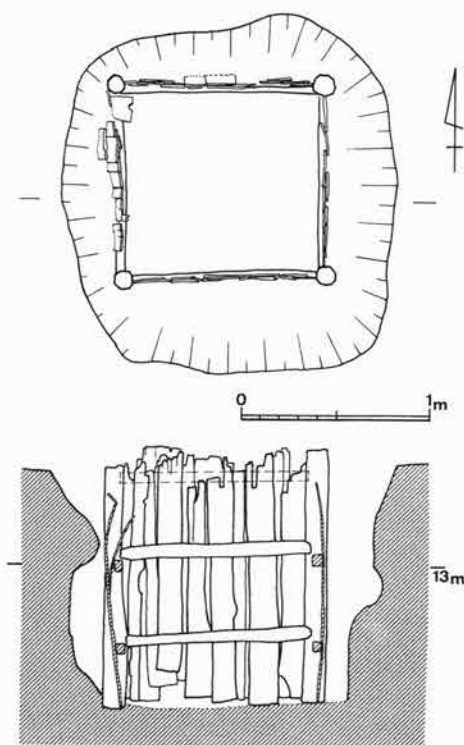
第 53 図 SD11805・11807 土 層 図

路と宅地間を仕切る堀跡と考えられる。東はSB11819の東辺から始まり、SD11807の西端まで続く。11間分検出したが、柱間は3~3.7mと厳密には統一されていない。柱掘形も、径0.2~0.4mと小規模で、不整形な円・楕円形を呈するものが多い。また、西端の柱穴から、北へほぼ直角に曲がった3mの位置に、SD11807に接するように、もう1か所、柱根の残った柱穴があり、この柱列とつながる可能性を持っている。柱列と両溝の間隔は、西端付近でSD11805から2.1mと、やや大路北側溝に近い位置で東西に連なっている。国土座標は、柱列西端で、 $X = -117,255.6$ 、 $Y = -25,982.0$ 、東端で $X = -117,255.2$ 、 $Y = -25,944.3$ である。

SF11801 面的な検出はできなかったが、北側溝(SD11805)と南側溝(SD11806)によって画された東西方向の道路で、南一条条間大路である。長岡京当時の呼称は不明だが、平安京跡においては近衛大路として現在まで名称が残る道路に相当する。後世の削平のため、整地層は、認められず、現況での路面幅は20~21mを測る。南北両側溝心々間の距離は22.5mであり、それから求めた道路心の国土座標は $X = -117,269.5$ 、 $Y = -26,025.0$ である。

SE11808 発掘区西部の建物群内に掘られた井戸である。検出面で径1.6m・底面径0.6mのほぼ円形を呈し、深さは1.3mを測るが、井戸枠等の内部施設は遺存していなかった。埋

土下層から、土器類のほか、斎串、ミニチュア竈、柄が装着されたままの刀子、手斧の一種とも考えられる鉄器や墨書土器などが出土した。また、瓦では、6801型式の軒平瓦片が出土している。国土座標は井戸中央で、 $X = -117,239.9$ 、 $Y = -25,992.6$ である。



第54図 SE11818 実測図

SE11818 調査地西側の拡張部で検出した隅柱横棧縦板式の井戸である。井戸枠は、隅柱間で、東西・南北ともにほぼ1mで、四隅に面取りを施した柱を立て、柄を持った横棧を渡して四辺の縦板を支えている。横棧は、3段遺存し、東西面と南北面では、隅柱の柄穴の位置を上下に穿つことで高さを変えて渡されていた。縦板は、厚さ1~2cmの薄いものを用い、2~3枚を重ねて使用している。検出面からの深さは1.45mで、部材の上部は、腐食も進んでいたが、遺存状態の良い隅柱の

上端は、現地表下約0.3mのところであったものである。井戸の掘形は、1辺3.6mのやや不整形な隅丸方形を呈し、井戸中位まで、徐々に狭くなるように掘られているが、それ以下では、部分的に抉り込んで掘っており、断面がオーバーハングした状態になるところもある。内部からは、土器類等が出土したが、SE11808に見られたような特殊な遺物は認められなかった。国土座標は、北西の隅柱で、 $X=-117,256.0$ 、 $Y=-26,015.5$ である。

SK11814 東部建物群の中のSB11811の北側で検出した土坑である。東西2.4m・南北1.2mの長方形で、深さは0.15～0.25mを測る。坑内からは、土器類が少量出土したが、特徴的な出土状況は認められず、その性格は確定できない。

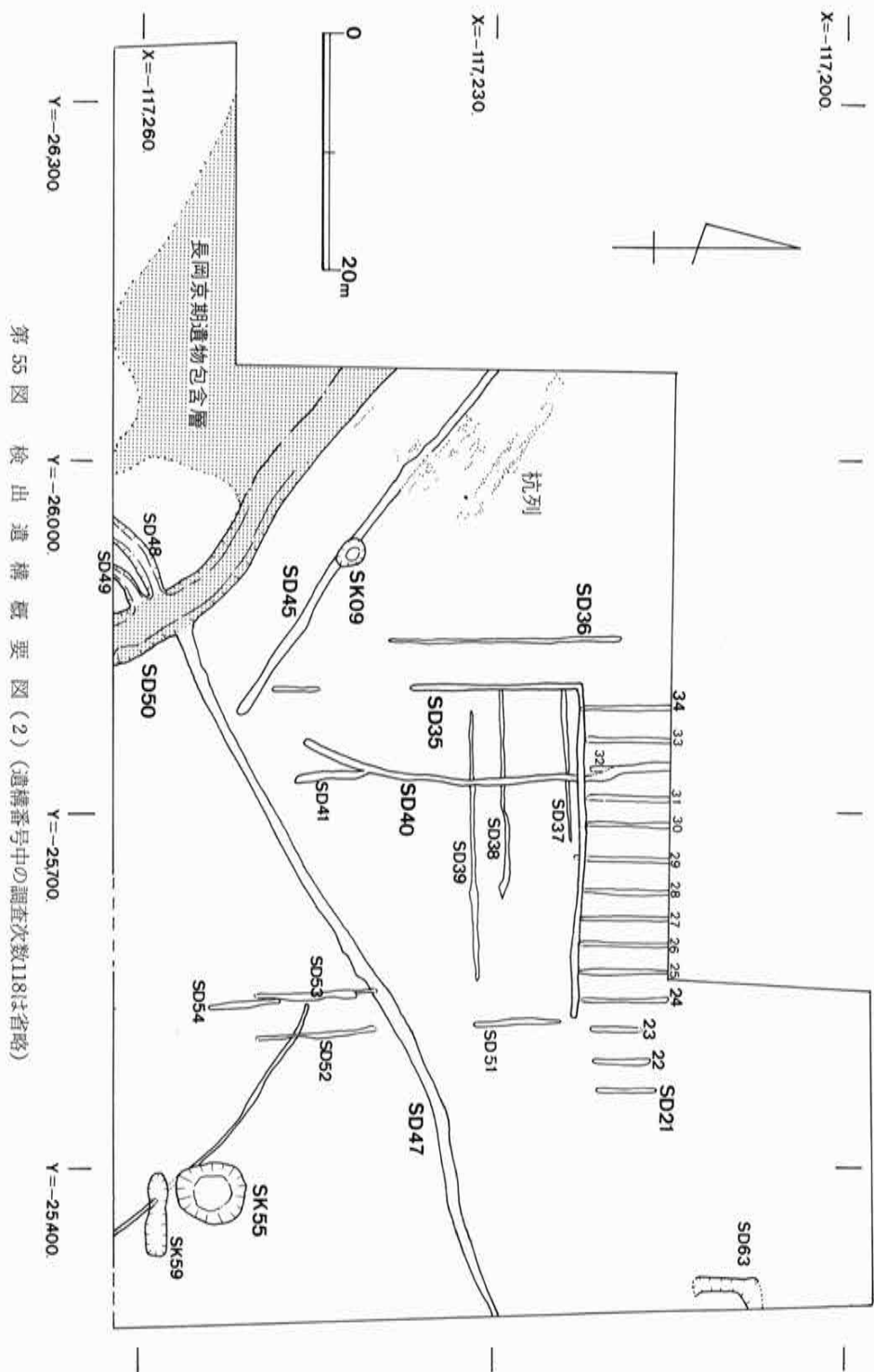
SX11856 十町域の南西部の拡張部で検出したもので、南北約1m・東西約0.6mの範囲で、土師器小皿(皿C)と銭貨が集中して出土したものである。土師器は、同一形態のものが、上下は一定でないが、10個体以上重なるようにして出土し、それに混在して、和同開珎・神功開寶・萬年通寶の3種類の銭貨が6枚検出できた。平面、断面の観察によっても土坑等の遺構は認められず、周辺でも発掘区内では、東12mにSE11818があり、南3mに大路北側溝が走る程度である。おそらく、何かの祭祀が行われたものと考えられるが、詳細は不明である。

(2) その他の遺構(第55図)

ここで取り扱う遺構の多くは、溝であるが、その中には時期を限定できるもののほか、埋土中の遺物が皆無に近く、時代を限定できないものや、せいぜい長岡京期に対して新旧のわかるもの、あるいは、長岡京期に入る可能性のあるものも含まれている。

SD11821～34 十町域発掘区の北側中央で検出した南北方向の溝で、14条確認できた。SB11802の西から規則的に掘削され、内部には黒褐色粘質土が堆積していた。溝1条の幅は0.3～0.4m・深さは0.15～0.2mで、北端は発掘区域外に出るものが多いが、北端まで検出できた溝の1つであるSD11824では、南北6.5mを測る。溝と溝との間隔は2.2～3.3mと一定しないが、一連のものであり、何らかの耕作に関する遺構を想起させる。溝中から検出した遺物は極めて少ないが、その中で器形がわかる椀C土師器を見ると、長岡京期から平安時代前葉に位置づけることができる。その南端は、中世の東西方向の小溝が錯綜し、不明瞭だが、SD11837、あるいはSD11835付近で終結している。

SD11835 発掘区中央、やや西よりで南北方向に約15m掘られ、東にほぼ直角に曲がってSB11810の近くまで達している。幅は0.3～0.4m・深さは0.15～0.2mで、内部に黒褐色土が堆積していたが、時期を確定できる遺物はなかった。南から東へと屈曲する位置の国土座標は、 $X=-117,222.1$ 、 $Y=-25,980.8$ である。また、この溝の南端から約8m離れて、規模・方位等が同様の溝が4mの間、掘削されている。その南端の国土座標は、 $X=-117,248.5$ 、



第55図 検出遺構概要図(2) (遺構番号中の調査次数1181は省略)

Y=-25,980.6である。

SD11836 SD11835の西側4mのところ、ほぼ平行して掘られた溝である。西部建物群の東にあり、幅0.3~0.4m・深さ0.1mで、南北方向に約20mの間掘削されている。その形態はSD11835に極めて近似しており、対になる可能性を持つ。国土座標は、その北端でX=-117,218.6、Y=-25,984.8、南端でX=-117,238.2、Y=-25,984.6である。

SD11837・38・39 SD11835付近から、東部建物群の西まで掘られた溝で、規模は小さく、幅0.2~0.3m・深さ0.1~0.2mである。ほぼ東西方向であるが、やや東側で北へ、西側で南に偏している。すべて黒褐色土が埋土となり、明らかに中世の小溝群とは異なるが、出土遺物はない。

SD11840 発掘区中央付近を南北方向に走る溝である。北はSD11841と重なる形で始まり、ゆるやかに湾曲しつつ南下し、一部で枝分かかれする(SD11841)。確認できた範囲では約28m掘られている。場所によってやや異なるが、幅は、0.3~0.4m・深さは0.8~0.9mで、溝の形状も鋭角に掘り込まれている。この溝にも出土遺物がなく正確な時期は不明だが、長岡京期より新しく、中世小溝群よりも古いと考えられる。

SD11845 調査地西部を北西から南東方向に走る溝である。溝の遺存状態は悪く、溝底面がかろうじて残る程度の部分もあったが、弥生時代後期の遺物が出土した。規模は残りの良い部分で幅0.7m・深さは0.1mを測る。

SD11847 調査地を北東から南西にかけてやや湾曲しつつ流れる溝で、64mにわたって検出した。東は発掘区外となるが、西は、SD11850に合流する形となる。幅0.7~1.2m・深さ0.3~0.5mを測る。

SD11850 調査地西部で検出した流路で、北西から南東方向に流れ、上面で幅3.5mを測る。その確認できた南端近くで、SD11847・48・49が合流している。この合流点付近には、流路に対して平行、あるいは直交して杭が打ち込まれ、小規模なしがらみが形成されていた。出土した遺物は、摩滅した土器片1点と石器1点にとどまり、時期を明確にはできないが、長岡京期より古いことは確実であり、SD11845の時期より遡ることはないと考えられる。この流路の方向が、本来の地形に沿った水流の方向であり、SD11850の上面および周辺には、長岡京廃絶後に形成された遺物包含層も、この方向を踏襲して形成されていた。

SK11855 発掘区東南部で検出した土壇である。直径約5.5mのほぼ円形を呈し、深さは1.2mで摺鉢状に掘られていた。埋土下部は灰色形の粘質土で水分が多く、水溜的な用途で掘削されたものと考えられる。この土壇によってSD11813の南西隅柱穴や、SD11805の一部が削られている。また、土壇内の傾斜面に数本の杭が不規則に打ち込まれ、腐朽せずに遺存

していた。内部から、瓦器片が少量出土し、中世の範疇に入れるが、小溝群の多くよりは、時期の新しいものである。

SK11858 SB11817の西で検出した小土坑である。不整形な卵形で、長径0.9m・短径0.7m・深さは約0.4mである。埋土は暗茶褐色系の土で、よく締り、土器の細片とサヌカイトの剥片が数点出土した。土器の厳密な時期は確定できないが、縄文時代に属する可能性がある。ここに列記した各遺構以外にも、東部建物群周辺に、断続的な南北溝や、浅い土坑状の落ち込みがあり、発掘区西部でも杭列等がある。杭列は、発掘区北西部のSD11845の北東側から、SB11816に重なるように数条検出された。方向はSD11845とほぼ並行し、同時期のものである可能性もあるが確証はない。また南3トレンチでは、SD11806の南に、それと平行した東西方向の溝を2条(SD11860・61)検出できた。ともにこの範囲では無遺物であったが、方向・埋土の状況等から、長岡京期に属する可能性がある。(長谷川 達)

4. 出土遺物

今回の調査では、土器類・土製品・瓦類・銅製品・鉄製品・銭貨・木製品・石器類等が出土している。

(1)土器・土製品(第56～63図)

調査地全域から土器類は出土しているが、特に調査地南端部付近で検出した南一条条間大路北側溝であるSD11805から、長岡京期の土師器・須恵器・墨書土器等の土器類が多量に出土した。出土量は、今回の調査で出土した土器類の大半を占めている。また、掘削面積が少ないにもかかわらず、南一条条間大路南側溝であるSD11806からもまとまった量の土器が出土した。このほか、量的には限られるが、建物の柱穴・井戸・溝・土坑からも種々の土器が出土している。

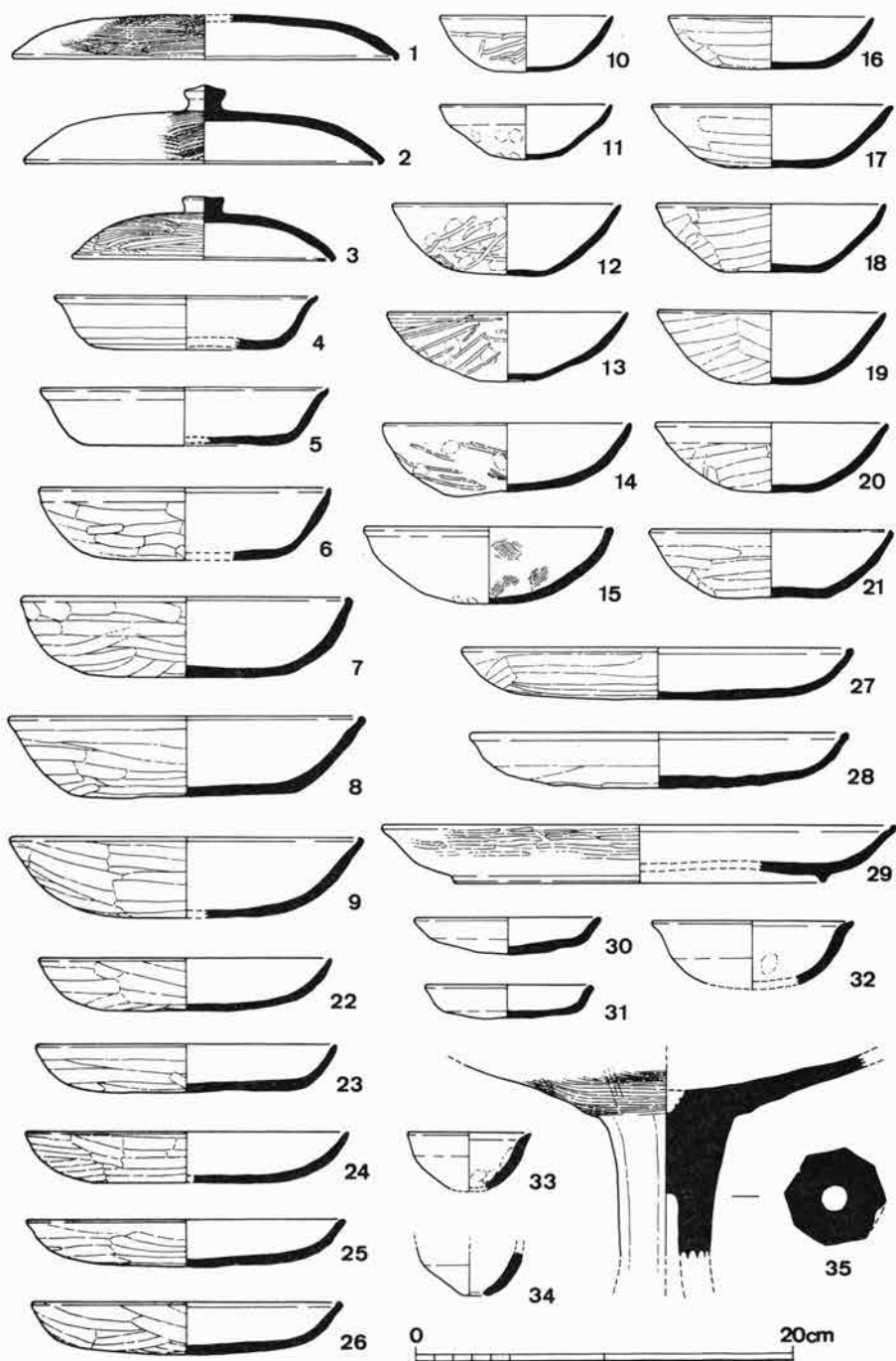
出土した土器・土製品は、土師器・須恵器のほか、墨書土器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・二彩陶器・青磁・白磁・ミニチュア土器・弥生土器・瓦器・製塩土器・土馬・土製紡錘車・転用硯等がある。また、わずかではあるが、縄文土器片も出土している。量的には、土師器・須恵器が圧倒的に多数を占め、それもわずかな量を除き、長岡京期のものである。須恵器には、古墳時代後期のものや平安時代のものがあり、土師器も中世のものや長岡京期よりやや時代の降るものが少量認められる。なお、長岡京期の土師器中には生駒西麓産の羽釜片がごく微量含まれている。

ここでは、出土土器の多くを占めるSD11805出土の土器を中心に報告する。以下、遺構別に記すが、墨書土器・施釉陶器・土製品・弥生土器については別項で記述する。なお、長岡

京期の土器の分類については、奈良国立文化財研究所が平城京跡の調査で行っている土器分
(注7)
 類に準拠した。

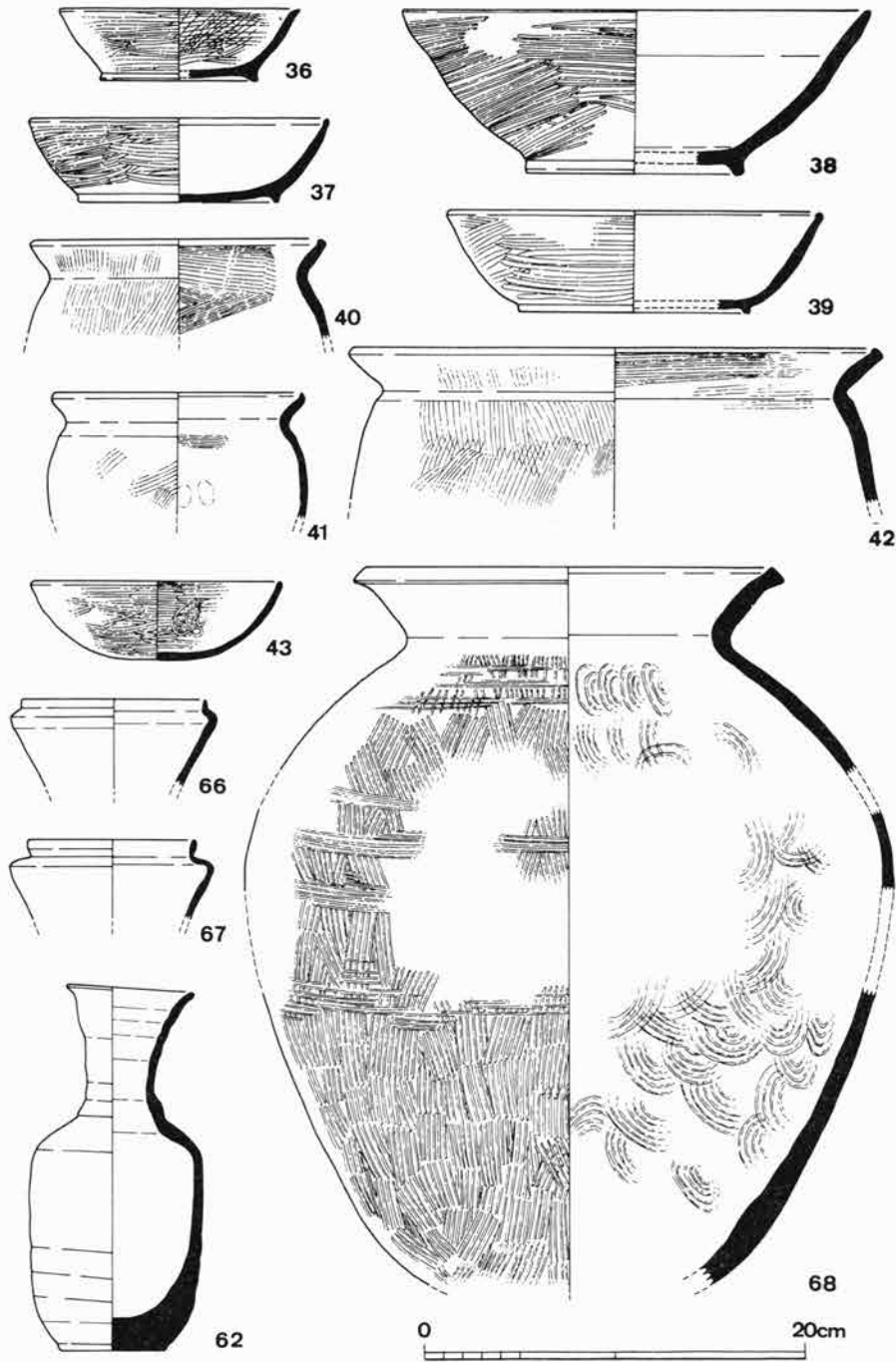
SD11805出土土器(第56・57・58図) 土師器の蓋(1~3)・杯A(5~9)・杯B(36~39)・椀A(16~21)・椀C(10~14)・椀(15)・椀E(32)・皿A(22~28)・皿B(29)・皿C(30・31)・高杯(35)・甕A(40~42), 須恵器の蓋(44~46)・皿A(47)・皿B・杯A(52~54)・杯B(48~51)・椀C(55)・壺(56)・壺A(63)・壺B(65)・壺E(66・67)・壺G(60~62)・壺L(57)・壺M(58・59)・鉢D(64)・甕A(68), 黒色土器の椀(43), ミニチュア土器の甕(33・34)・竈片, 製塩土器, 転用硯等が出土している。

土師器の蓋(1~3)は、やや丸みを帯びた平坦な頂部となだらかに湾曲する縁部からなり、頂部にボタン状のつまみを付す。外面に、比較的密なヘラ磨きを施し、口縁端部はわずかに内面に肥厚させる。法量は、口径14~15cmを測るもの(3)と、口径20cm前後を測るもの(1・2)がある。杯A(4~9)は、口径が14~15cmを測るもの(4~6)と、17.5~19cmを測るもの(7~9)の二種類に分かれる。大半は、平底からゆるやかに内湾気味に立ち上がり、端部をわずかに肥厚させる(7~9)か、丸くおさめるもの(5・6)であるが、口縁部上半を外反させ、端部を巻き込み気味に内面に肥厚させるもの(4)もいくらか認められる。調整手法は、外面全面にヘラ削りを施す。ただ、口縁端部近くを削り残すもの(6・8)や、口縁上半部を削らないもの(4)もある。杯B(36~39)は、体・底部の境に高台を付し、外面に比較的密なヘラ磨きを施す。36は、内面にもヘラ磨きを行い、さらに斜放射状の暗文を施している。法量は、36が口径12.8cm・器高3.8cm, 37が口径15.8cm・器高4.4cm, 38が口径24.6cm・器高8.6cm, 39が口径19.6cm・器高5.3cmを、それぞれ測る。椀A(16~21)は、口径11~13cm・器高2.8~4cmを測り、外面ヘラ削りを行っている。20は、口縁端部近くの横ナデが強いので削り残しが見られる。また、21は、口縁端部近くまでは、ヘラ削りが及んでいない。口縁端部は、多くがやや尖り気味に丸くおさめている。なお、21は、内面に漆が付着している。椀C(10~14)は、外面の口縁端部近くを横ナデし、以下は未調整で指頭痕を残す。外面には粗いヘラ磨きを施している。法量から、口径9cm前後のもの(10・11)と、口径12~13cm前後のもの(12~14)に分かれる。12は、内面に十字のヘラ記号がある。椀(15)は、小さな丸底から内湾して外上方に立ち上がり、口縁端部をわずかに肥厚させる。外面の口縁上半部は横ナデし、以下は未調整で指頭痕を残す。内面は横ナデ及びナデを施すが、ハケ目の痕跡が認められる。口径13.1cm・器高4cmを測る。椀E(32)は、口縁部が内湾しながら外上方に立ち上がり、端部を外反させ、尖り気味におさめる。内面及び外面の口縁端部に横ナデを施し、他は未調整である。口径は、10.7cmを測る。皿A(22~28)は、口径が約16~17cmのもの(22~26)と、

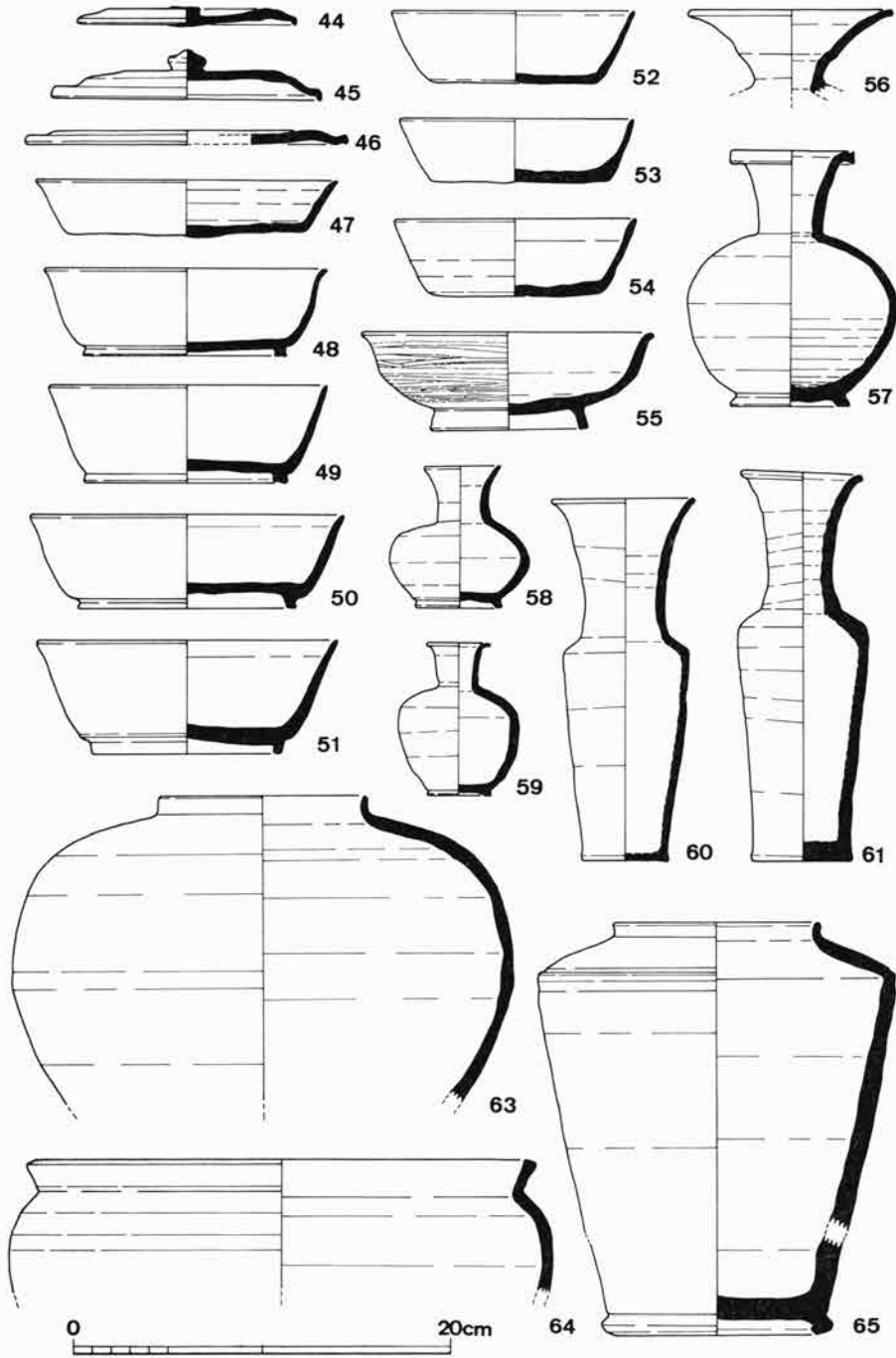


第56図 SD11805出土土器実測図(1)

1~31・35;土師器 33・34;ミニチュア土器



第57図 SD11805出土土器実測図(2)
36~42;土師器 43;黒色土器 62・66~68;須恵器



第58図 SD11805出土土器実測図(3)
44~61・63~65; 須恵器

約20～21cmのもの(27・28)の二種類がある。前者は、口縁端部を丸くおさめるもの(22～25)が多いが、少量、端部を内面にわずかに肥厚させるもの(26)がある。後者は、端部を肥厚させているものが比較的多い。両者とも外面調整はヘラ削りを行うが、23・25のように口縁端部近くを削り残すものや、28のように口縁部上半は、ヘラ削りを行わず横ナデのままとし、下半部から底部外面にかけてヘラ削りを行うものもある。皿B(29)は、口径27.4cm・器高3cmを測り、貼り付け高台を付す。口縁端部をやや外反させたのち、巻き込むように内面に肥厚させる。外面は、ヘラ磨きを施している。皿C(30・31)は、口径9～10cmを測る小型の皿である。平底とわずかに外反して短く立ち上がる口縁部からなる。内面及び口縁部外面には横ナデを施し、底部外面は未調整である。高杯(35)は、杯部外面にヘラ磨きを施し、筒部は、断面八角形の面取りを行っている。筒部の成形は棒芯に粘土を巻き付ける方法によっている。ミニチュアの甌(33・34)は、33が口径6.6cmを測り、手づくねで作っている。甕A(40・41)は、球形の胴部に「く」の字状に外反する口縁部をもつ。端部は内側に肥厚させる。胴部外面には縦及び斜方向のハケ目を施し、口縁部には横ナデを行っている。40・42は、口縁部内面に横方向のハケ目を施し、42はその後横ナデしている。口径は、40が15.2cm、41が13.2cm、42が27.6cmを測る。

黒色土器の椀(43)は、丸みを帯びた底部から口縁部が内湾して立ち上がり、端部を丸くおさめる。内面及び口縁部外面上半に炭素を吸着させ、内外面とも密なヘラ磨きを施している。内面には、不整形な螺旋暗文を施す。口径13cm・器高4cmを測る。

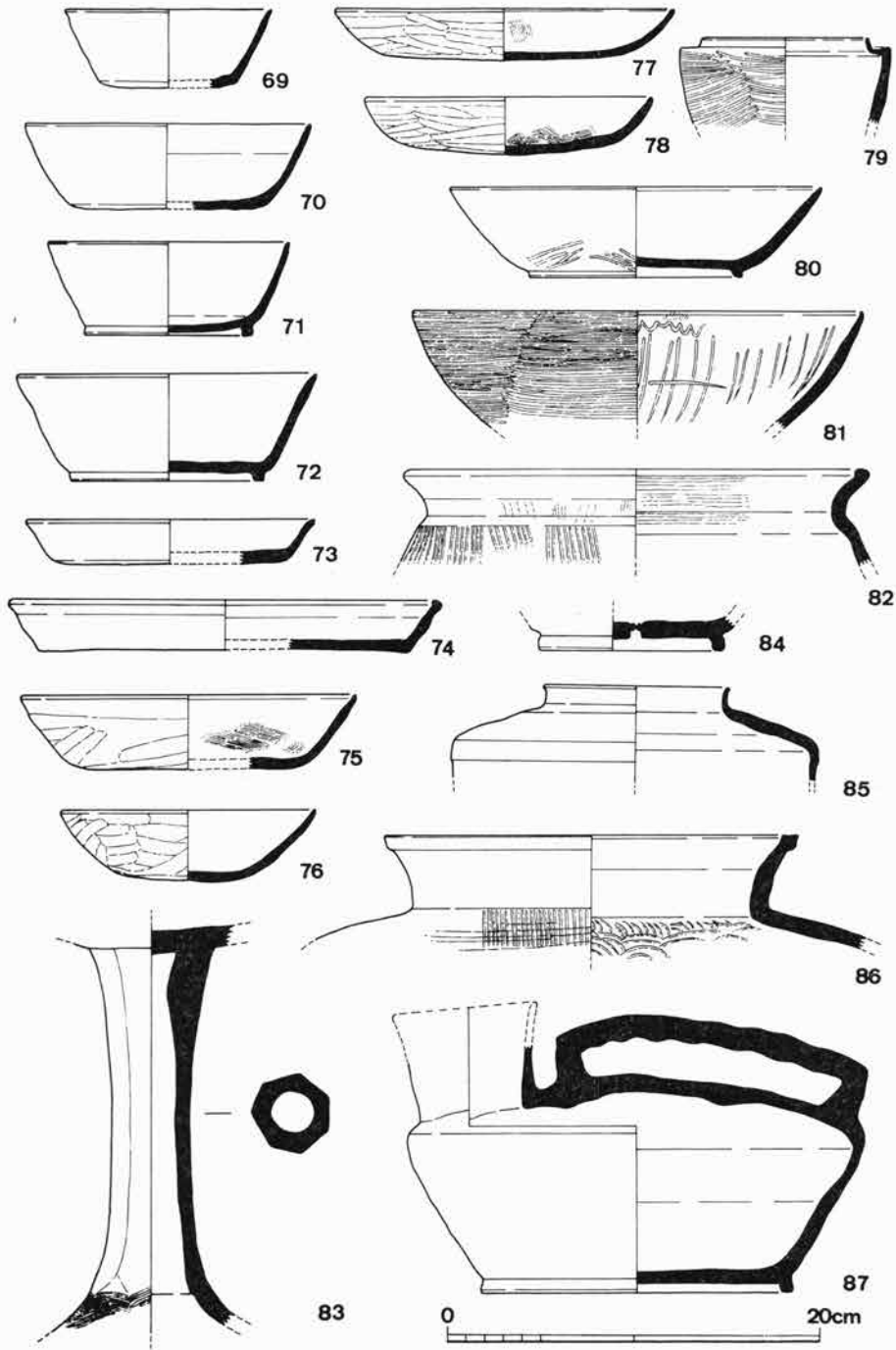
須恵器の蓋(44～46)は、平坦な天井部と屈曲する縁部からなり、宝珠つまみを付す。口径は、44が11.6cm、45が12.3cm、46が17.2cmを測る。12cm前後のもの、17cm前後のものに分かれる。皿A(47)は、口径16cm・器高2.7cmを測る。内面及び口縁部外面に回転ナデを施す。ほかに、口径21cm前後の大型のもの(115)も出土している。115は、墨書土器の項に図示した。杯A(52～54)は、平底の底部から口縁部が外上方に直にのび、口径は12～13cmを測る。54は、内面上半に炭素が吸着している。杯B(48～51)は、底部と口縁部の境ないしやや内側に高台を付し、口縁部が外上方に直に立ち上がるもの(49～51)と、内湾気味に立ち上がり端部を外反させるもの(48)がある。法量は、口径15～17cm・器高5～6cmを測る。椀C(55)は、金属製の椀を模したもので、外下方にやや開く高い高台を持ち、内湾して外上方に開く。口縁部は、途中にあまい稜を持ち、端部を外反させる。口径15.4cm・器高5.1cmを測る。外面にはヘラ磨きを施し光沢を持たせ、金属製品に似せる努力をしている。壺A(63)は、球形の体部に短く直交する口縁を付し、内外面回転ナデを施している。外面には、自然釉が部分的に薄くかかっている。壺B(65)は、斜上方に直に立ち上がる体部と、平坦な肩と短い直立

する口縁部からなり、外上方に開く短い高台を付す。口径は、10.8cmを測る。壺(56)は、口頸部の破片で、外上方に立ち上がり、一度鈍い稜を持ったのち、大きく外反する。口径は、10.8cmを測る。唾壺の口頸部である可能性が強い。壺L(57)は、球形に近い卵形の体部に口縁部が外反する口頸部を付したもので、貼り付けの高台を有している。胴部最大径は、胴部中央よりもやや上にある。壺M(58・59)は、壺Lの小型品である。58は、胴部最大径がほぼ中央にあり、59は肩部と胴部の境にある。58は、体部最大径が体部高よりかなり大きく、扁平な感じをうける。また、58・59は高台を有するが、図示していないもののなかで、無高台のものがある。壺G(60~62)は、筒状の胴部と外反する細長い口頸部からなる。いずれも糸切り底で、胴部が太くふくらむもの(62)と、胴部が細長くふくらまないもの(60・61)がある。前者は、色調が淡灰白色を呈し、胎土も良好で、調整も丁寧に仕上げられている。後者は、青灰色を呈し、調整もさほど丁寧でない。量的には後者が圧倒的に多い。壺E(66・67)は、口径9.8cm(66)と8.8cm(67)を測る。甕A(68)は、卵形の体部と外反する口縁部からなり、端部は内外に拡張せず、外傾する面を有する。口径21.6cmを測り、体部内面は、軽くナデを行い、当て板の同心円文が部分的に消されている。鉢D(64)は、短く外反する口縁部を持つもので、口縁端部はわずかに肥厚し、外傾する端面を有する。口径は、26cmを測る。

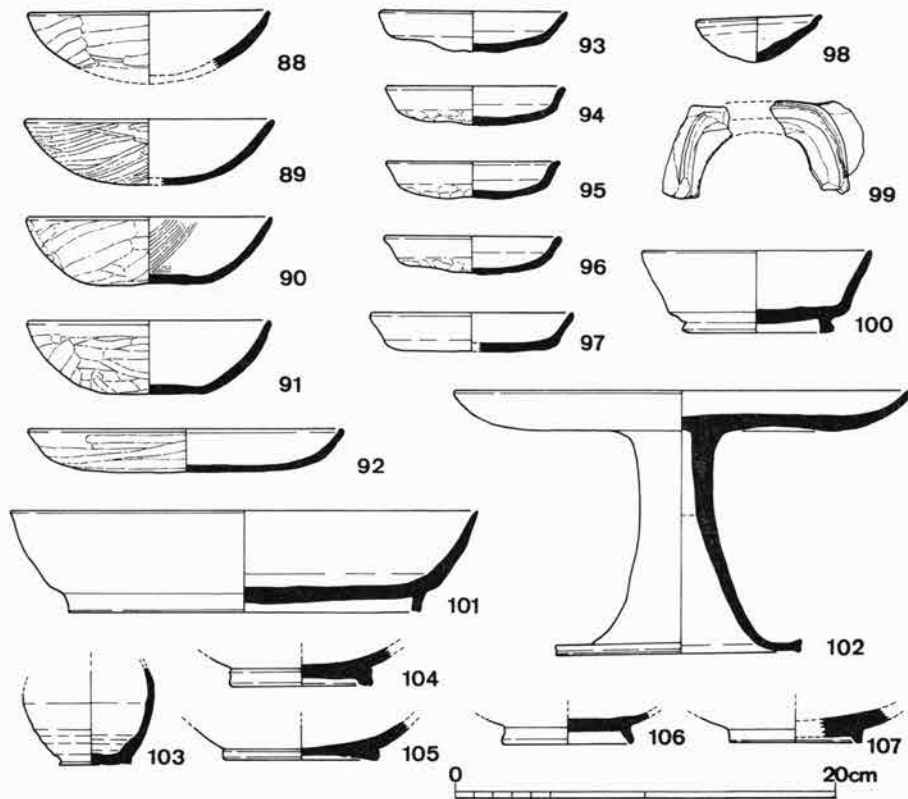
これらの土器の大半は、溝の西半部から出土した。器種構成も豊富ではあるが、数量的には、供膳形態のものが圧倒的多数を占める。土師器の甕等煮沸形態のものは、かなり少なく、また、出土地点もより西半部に集中する傾向にある。須恵器と土師器の数量比は、須恵器1に対し土師器2以上の割合でみられる。須恵器では、杯A・Bが最も多く認められ、土師器では、杯A・皿A・椀A・椀Cが大部分を占めている。正確な数量比は、まだ検討の余地があるが、皿Aが最も多く土師器中の4分の1以上を占め、杯Aが5分の1近く、椀A・Cが合わせて4分の1程度認められる。

SD11806出土土器(第59図) 土師器の杯A(75)・杯B(80・81)・椀A(76)・皿A(77・78)・椀C・皿C・壺E(79)・甕A(82)・高杯(83)、須恵器の蓋・杯A(69・70)・杯B(71・72・84)・皿A(73・74)・皿B・壺B(85)・壺A・壺L・壺M・壺G・甕A(86)・平瓶(87)、黒色土器の椀等が出土している。

土師器の杯A(75)は、口径17.6cmを測り、外面は、口縁端部近くを削り残して、全面ヘラ削りを施し、内面は、ハケ目痕を残し、ハケ目を行った後横ナデを施している。椀A(76)は、外面全面にヘラ削りを行っている。皿A(77・78)は、口径18cm前後のもの(77)と、15cm前後のもの(78)がある。外面調整はヘラ削りを行うが、口縁端部近くを削り残している。内面にはハケ目の痕跡が残っている。杯B(80・81)は、外面に比較的密にヘラ磨きを施してい



第59図 SD11806出土土器実測図
69~74・84~87;須恵器 75~83;土師器



第60図 SD11807ほか出土土器実測図

88・89・92・101・103；SD11807出土 90；SE11808出土 93・98・100；SE11818出土 102；SB11815出土 90・91；SD11830出土 94～97；SX11856出土 104～107；包含層出土 88～97；土師器 100～103；須恵器 98・99；ミニチュア土器 106；灰釉陶器 104・105・107；緑釉陶器

る。81は、内面に正放射等の暗文がある。甕A(82)は、「く」の字状に口縁部が外反し、端部は内側に肥厚させ、口縁部内面は、横方向のハケ目を施している。外面端部は、幅の広いハケ目を縦方向に施す。口頸部外面には、横ナデが施されているが、ハケ目の痕跡がある。高杯(83)は、裾部にヘラ磨きを施し、筒部を断面七角形に面取りしている。

須恵器の杯A(69・70)は、口径11cm前後のもの(69)と、口径15cm前後のもの(70)がある。70は、口縁内面上半部に炭素を吸着させている。杯B(71・72)は、口縁部と底部の境またはその内側に短い高台を付し、口径13cm前後のもの(71)と、16cm前後のもの(72)がある。皿A(73・74)も、口径15cm前後のもの(73)と、23cm前後のもの(74)がある。73は、口縁部がわずかに外反し、74は、端部を内側に肥厚させる。壺B(85)は、図示したもののほか、肩部に紐をもつものが出土している。平瓶(87)は、口縁部を除き完形品で、体部最大径が24.6cmを測る。1点のみ出土した。84は、杯Bの底部中央の内外面に穴をあけている。貫通はして

おらず、用途不明である。壺E(79)は、口縁部は内傾し、体部外面にヘラ磨きを施す。

なお、土師器の杯A・皿Aは、図示したほか、外面のヘラ削りの削り残しや内面のハケ目痕の認められないものも出土している。量的には、こちらの方が多い。

SD11807出土土器(第60図) 土師器の杯A・椀A(88)・椀D(89)・皿A(92)、須恵器の杯A・杯B・皿A・皿B(101)・壺M(103)等が出土している。

88は、外面ヘラ削りを施し、口縁端部近くに部分的に削り残しが見られる。89は、ヘラ削りの後、粗くヘラ磨きを施している。口径は、88が12.7cm、89が13cmを測る。92は、口径16.5cm・器高2.1cmを測る。外面ヘラ削りを施し、口縁端部近くに部分的な削り残しがある。101は、高台を有し、底部から内湾気味に立ち上がる。端部は尖り気味に丸くおさめている。口径24.6cm・器高5.5cmを測る。調整は回転ナデが施されている。103は、平底で、底径は3.8cmを測る。糸切り底である。

SD11830出土土器(第60図) 土師器の椀A(90・91)等が出土した。この溝からの出土遺物は少なく、図示したもののほかは土師器・須恵器の細片である。

90・91とも小さな平底から内湾して立ち上がり、端部は丸くおさめる。90は、口径13cm・器高3.4cmを測り、外面はヘラ削りを施し、内面はハケ目による整形を行った後、横ナデ及びびナデを施している。91は、口径12.7cm・器高3.8cmを測り、外面はヘラ削りを行い、口縁端部近くを削り残す。内面は横ナデを施している。

SE11808出土土器(第61図) 須恵器の杯B(117—墨書土器—)、ミニチュアの甕等が出土している。

117は、口径15cm・器高2.3cmを測る。口縁部と底部の境やや内側に高台を付す。口縁は、端部をわずかに外反させる。

SE11818出土土器(第60図) 土師器の皿C(93)、ミニチュア土器(98)、須恵器の杯B(100)等が出土した。

100は、井戸の掘形内から出土したもので、口径12.2cm・器高4.2cmを測る。高台は、底部と口縁部の境より内側にあり、外下方にやや開き気味に付してある。93は、口径10cm・器高2cmを測り、内面及び口縁外面は横ナデし、底部外面は未調整で指頭痕を残す。98は、丸みを帯びた底部と外上方に大きく開く口縁部からなる。口径6.4cmを測る。ミニチュア甕の上にのせる甕であろう。

SB11815出土土器(第60図) SB11815の柱穴内から須恵器の高杯(102)・杯B・壺G、土師器の杯片等が出土しているが、102及び壺Gを除き小片である。

102は、口径24cm・器高13.8cm・底径7cmを測る。杯部の口縁は、内湾して外上方に大きく開く。脚部は、裾がラップ状に開く。調整は回転ナデを施している。

SX11854出土土器(第60図) 土師器の皿C(94~97)が出土している。この遺構は、銭貨とこの皿Cが集中して出土した特殊遺構である。

皿Cの法量は、94~96が口径9.2~9.5cm、97が口径11cmを測る。器高はいずれも2cm前後である。

施釉陶器(第60図) この調査では緑釉陶器8点、灰釉陶器1点、二彩陶器1点の計10点の施釉陶器が出土している。このうち、二彩陶器を除きすべて遺構精査中の包含層出土である。

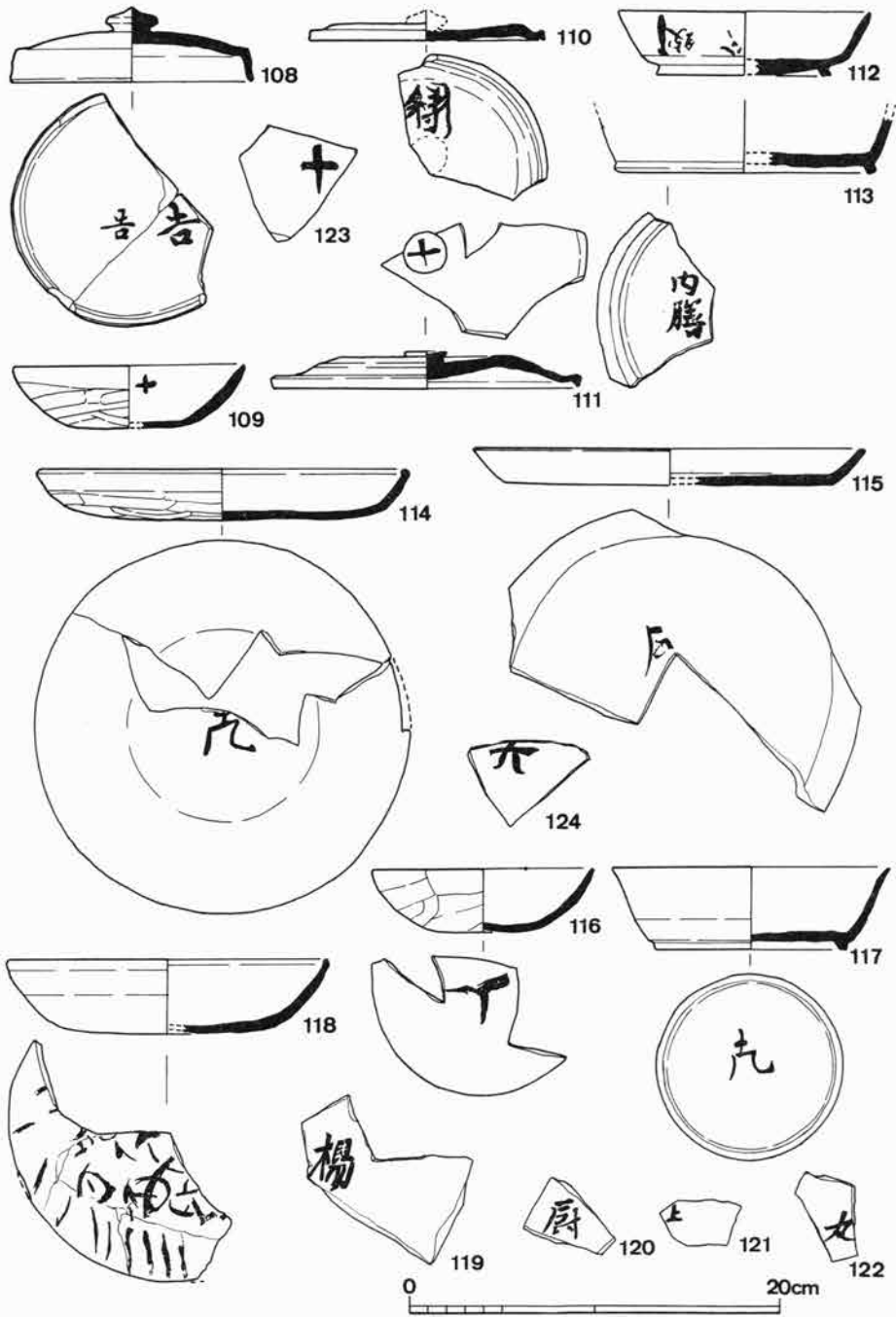
二彩陶器は、小壺蓋の小片でSD11806から出土した。緑釉陶器は、椀の底部が7点、火舎か壺の高台片が1点出土している。後者を除きすべて硬質の焼成である。図示した3点(104・105・107)は、いずれも削り出し高台で、104が高台径7.6cm、105が8.4cm、107が7cmを測る。釉調は、やや濃い緑色である。火舎または壺の高台片は、軟質の焼成で、釉調も淡緑色で、生地も黄白色を呈する。106は、灰釉陶器で、椀の底部である。高台径6.8cmを測り、外下方にやや広がる貼り付け高台を持つ。

墨書土器(第61図) 南一条条間大路北側溝(SD11805)や同南側溝(SD11806)、井戸(SE11808)等から40点以上の墨書土器が出土した。やはりSD11805から出土したものが大半を占める。ただ、字の大半が欠けていたり、土器が小片でわずかに墨痕がある程度のもも多い。SD11805出土の資料を中心に図示した。

108は、須恵器の壺蓋の裏面中央付近に「吉 吉」と記されている。吉祥句であろうか。口径は、13cmを測る。110は、須恵器の蓋の頂部外面に字が記されている。「桴」と判読できる。なお、蓋の内面は、転用硯として使用されている。111は、須恵器の蓋のつまみに「十」と記されている。112は、口径13.8cm・器高3.5cmを測る須恵器杯Bの外側面に、土器を逆にして「鉞」と記されている。これには、土器が欠けていて字体はわからないが、さらに1文字分墨痕がある。底部を硯として使用した痕跡がある。113は、須恵器杯Bの底部裏面に「内膳」と墨書してある。114は、土師器の皿Aの底部外面に「尢」と記されている。解読はまだできていない。中国の則天文字の中に似たものがあるが、詳しくはわからない。115は、須恵器の皿Aの底部外面中央付近に墨書されている。半分近くが消えており、字は判然としないが、厨と読める可能性もある。116は、土師器の椀Aの底部外面に「丁」と墨書されている。109は、土師器の椀Aの口縁部内面に「十」と記されている。119は、土師器の杯または皿の底部片の外面に「楊」と書かれている。120は、須恵器の小片の底部外面に「厨」と記されている。以上は、SD11805から出土したものである。

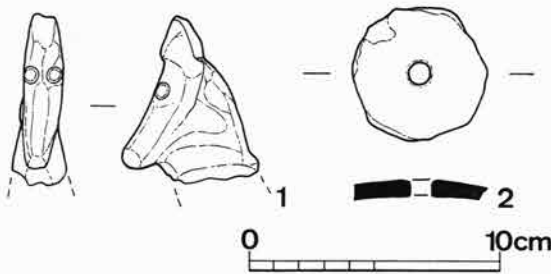
117は、井戸SE11808から出土したもので、須恵器の杯B底部外面に「尢」と記されている。

118は、土師器の杯Aで、その外面全体に墨書が認められる。おそらく習書と思われる。



第 61 図 墨書土器実測図

108・110～113・115・117・120・122～124；須恵器 109・114・116・118・119・121；
土師器 108～116・119・120；SD11805出土 118；SD11806出土 117；SE11808
出土 121～124；包含層出土



第62図 土製品実測図

1;土馬 2;土製紡錘車 1・2;SD11805出土

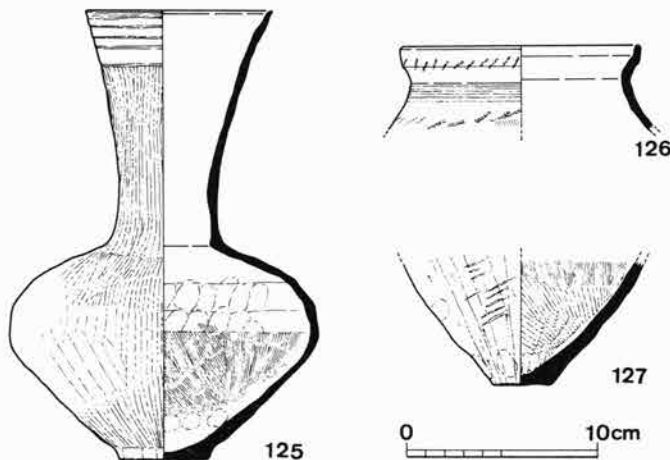
これは、SD11806から出土した。
残りの121・122・123・124は、いずれも包含層から出土したもので、「十」「大」「上」「丸」と記されている。「丸」は人名であろうか。122・123・124は須恵器に、121は土師器に書かれている。

土製品(第62図) 土馬や土製紡錘車等が出土している。土馬は、図示した頭部の破片のほか数点出土している。図示したものは、SD11805出土で、他に同じ溝やSD11806、井戸等からも出土している。土製紡錘車は、土師器を再利用して、まわりを打ち欠き作っている。径5.2cm・孔の径0.8cm・厚さ0.7cmを測り、SD11805から出土した。

(山口 博)

弥生土器(第63図) 少量ではあるが、SD11845から出土している。破片のみで完存するものではなく、器種は壺・甕に限られる。すべて弥生時代後期に属するものである。

壺は長頸壺(125) 1点のみを検出した。器体の大半は欠損しているが、全形を知ることができる唯一のものである。細長い円筒状の頸部を有し、口縁がハの字状に開く。最大腹径が器高に比べて大きく扁平な器体を有する。底部は小さな平底で、ヘラ状工具による粗掻きが見られる。口縁外面に強いナデによる擬凹線の施文を5条施す。器表外面は、口縁部・体部をナデ後丁寧なヘラ磨き。内面は、主にナデによる調整を行い、底部には繊維の束状原体による調整を施す。胎土は、長石・石英を主体とする微細な砂粒を含み良好。



第63図 弥生土器実測図 (SD11845 出土)

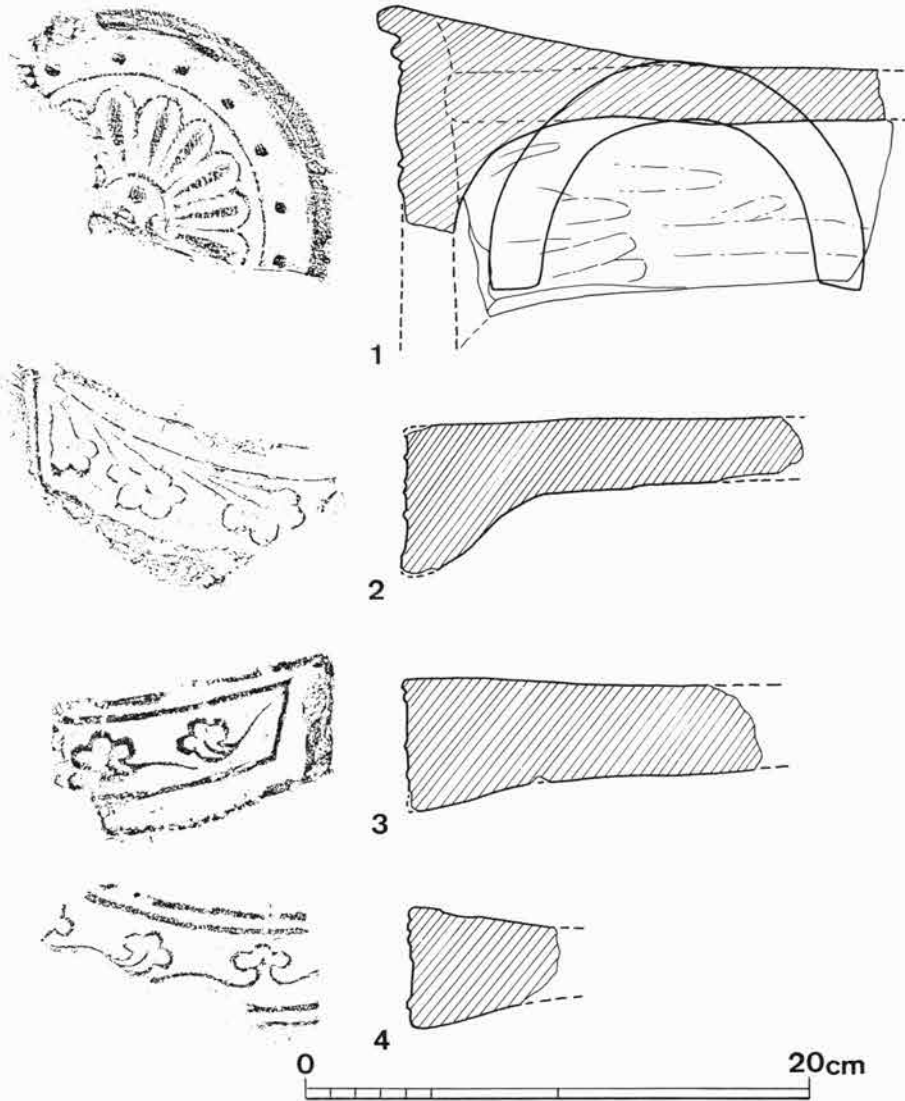
甕は、口縁1点、底部2点を確認した。体部破片の観察によると外面にタタキ成形痕跡を顕著に残すものとハケないしナデによる最終調整を行うものがある。

126は、受口状の口縁を持ち、口径12.8cmを測る。口縁部及び肩部に櫛状工具による連続刺突文を施し、頸部には同一工具による直線

文を施す。いわゆる近江系甕である。調整は器壁が荒れており不明である。口縁外面にはス
スが付着している。胎土には径1~2mmの長石・石英粒のほか頁岩・赤色酸化粒等多く含む。

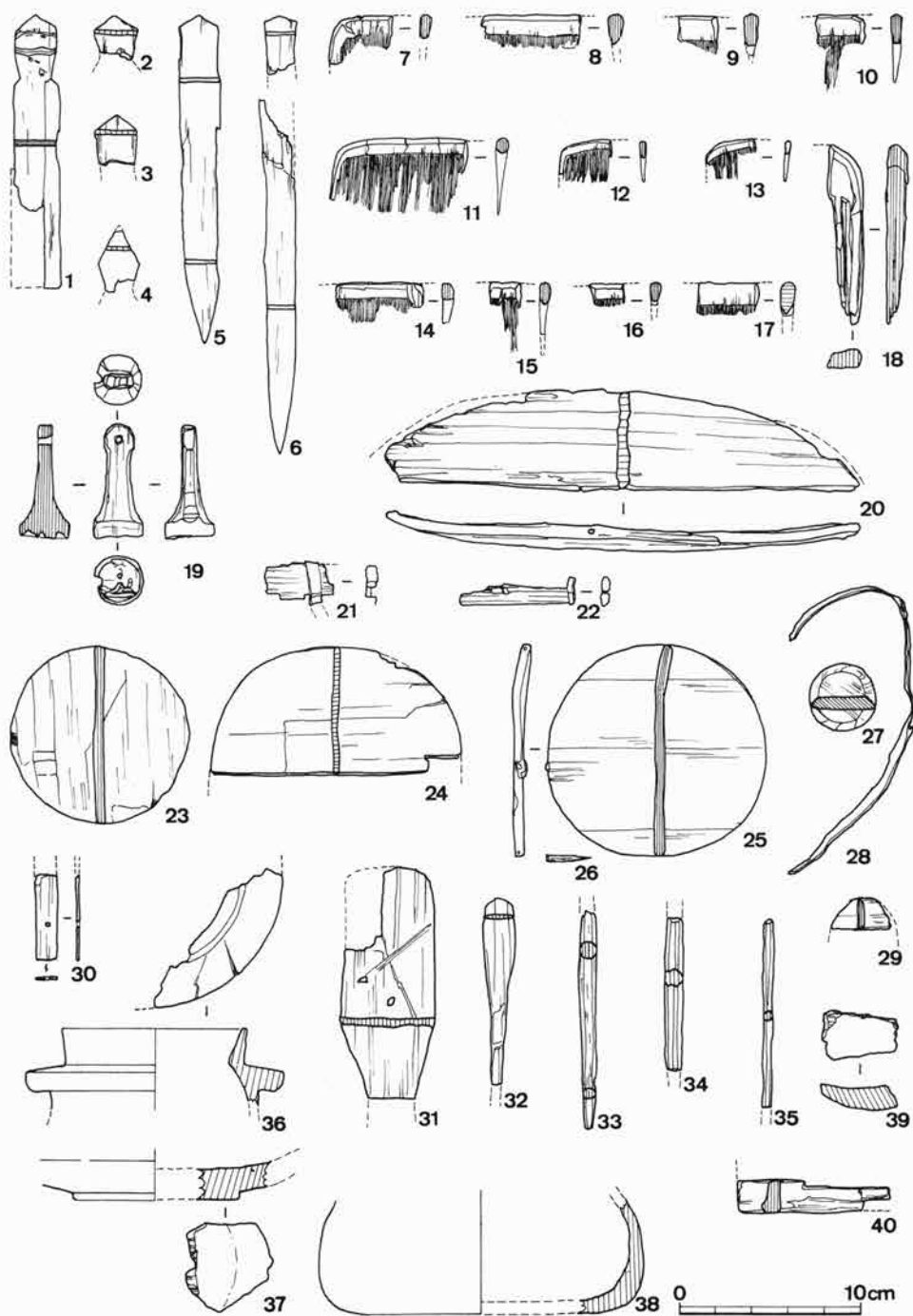
127は全形は明らかでない。やや凹状の小さな底部である。底径3cmを測る。体部外面は
タタキ成形の後、下から上へ荒掻きする。内面は荒い板状原体を用いた後細かいハケを部分
的に施し仕上げとする。内底面には指頭圧痕、爪跡が明瞭に残る。砂質の胎土を持つ。

(田代 弘)



第 64 図 軒瓦実測図及び拓影

1; 軒丸瓦 2~4; 軒平瓦 1; SD11805出土 2~4; 包含層出土



第65図 木製品実測図(1)

1~4; 人形(祭祀具) 5・6; 斎串 7~18; 櫛(身飾具) 19; 木印(文房具)
 20~26; 曲物 28; 桜皮 30; 桧扇 31; 杓子 32; 匙 35; 箸 36~
 39; 挽き物容器 27・29・33・34・40; 不明木製品

(2) 瓦(第64図)

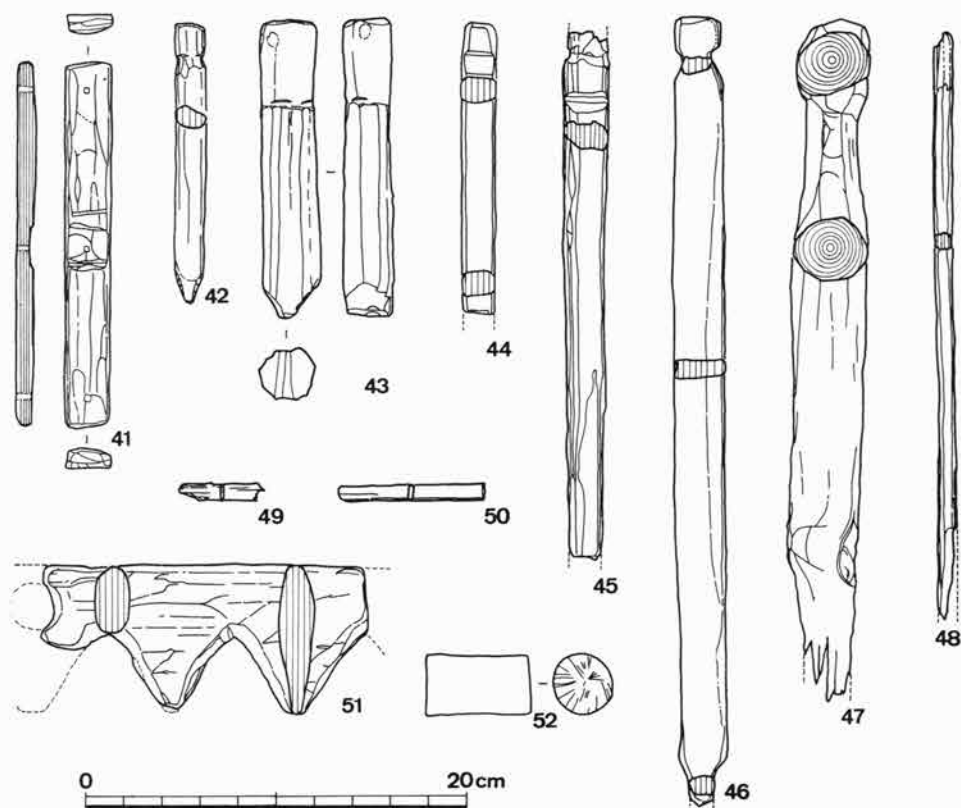
この調査では瓦の出土量は少なく、軒丸瓦2点、軒平瓦6点、丸・平瓦整理箱2箱程度である。ただ、量は少ないながらも、軒平瓦がすべて飛雲文系軒平瓦であることは興味深い。

1は、単弁16葉の軒丸瓦で、平城宮の6133型式である。色調は灰黒色を呈し、丸瓦部外面は縦方向にヘラ削りする。SD11805から出土した。2～4は、すべて包含層から出土した。2は、6801型式、3は、6802型式、4は、6802型式である。色調は、2が灰黒色を呈し、3・4が淡褐色を呈している。この他、SE11808から2点、包含層から1点、軒平瓦が出土している。

(山口 博)

(3) 木製品(第65～69図)

この調査で出土した木製品は、各種のものがあつたその数も多い。そのほとんどは、南一条条間大路北側溝SD11805・同南側溝SD11806から出土した。SD11805では、溝の西部と東部から出土したのものが多し。SD11805・06以外では、SD11805周辺、井戸SE11808・18から出土している。出土遺物には、人形・斎串・櫛・木印・曲物・挽物容器・杓子・匙・組合せ具・



第66図 木製品実測図(2)(用途不明木製品)

用途不明有頭棒・えぶり状木製品などがある。SE11808からは、鉄身が着いた刀子(第70図-1)が出土した。

祭祀具(第65図1~6) 人形, 1は短冊状の扁平な板の上端を圭頭につくり, 板の両側から切り込みを入れて頭と胸を表している。下半の一部を欠くが, 肩から下は直線的で脚は切り出していないと推定される。腕の表現は明瞭でない。頭部に頭と顔の境界を表す墨痕と, 顔の表現とおもわれる墨痕がみられる。長さ15cm・幅2.5cm・厚さ0.2~0.3cmを測る。SD11806から出土した。2は, 上端を圭頭にした人形頭部で, 墨痕がわずかにみとめられる。3・4と人形頭部とおもわれるものである。2~4は, SD11805から出土した。

斎串5は, 短冊状の扁平な板の上端を圭頭につくり, 下端を剣先状につくる。圭頭部の直下に削り込み痕がみられることから, 削りかけがあった可能性が高い。長さ19.1cm・最大幅2.3cm・厚さ0.1~0.2cmを測る。6も5と同様な形式であるが, 削り込み痕はみられない。頭部とそれ以外の2片に分かれているが同一個体とおもわれる。最大幅1.8cm・厚さ0.1~0.2cmを測る。5はSD11805, 6はSD11808から出土した。

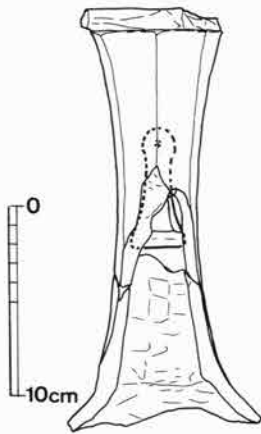
身飾具(第65図7~18・30) 18のみ縦櫛で他はすべて横櫛である。完形品はない。7・11・12は肩がやや角張る形式である。11は歯先まで残存し, 1cmあたり10枚の歯を挽き出す。最大幅4cm・背幅0.65cmを測る。18は, 側線と一枚の厚手の歯をつくる。この歯は両側から切り込んでいる。現存長は, 10cmを測る。7・8・11・12・15・18はSD11805から, 10・14・16はSD11806から, 9・17はSE11808から, 13はSE11818から出土した。

30は, 短冊状の薄板に, 隅丸方形の孔を持つもので, 桧扇の可能性はある。下端に刃物で切った痕があり, 上端を欠く。現存長4.8cm・幅1.2cm・厚さ0.1cm前後を測る。SD11806から出土した。

文房具(第65図19) 木印(19)は, 鈕に孔を持つ「有孔弧鈕」形式の高さ6.1cmの木印である。^(注8)印面は円形で, 径2.7cmを測り, 鈕の孔は0.3cm前後を測る。印文は読めないが, 1字ないし2字の朱文(陽文)で, 文字および周辺には墨痕がみとめられる。この木印は, SD11806の最下層である砂礫層から, 土師器・高杯脚部の中空部分に, 印面を上にした状態で出土した。木印の平安時代までの出土例は, 平城宮跡で1例(「木」八角形印), 平安京西市跡で1例(「里」正方形印)が知られる(後に大宰府跡で1例の陰刻・多角形印の存在を知った)。印面の墨痕が何を意味するか, 現段階では明確でない。

容器(第65図20~26・28・36~40) 21・22は, 曲物側板で樹皮のとじ方がわかる資料である。28は樹(桜)皮である。

20・23~25は, 蓋板・底板と推定されるもので, 25には側板を止める目釘が打ち込まれて



第67図 木印出土状況図

いる。目釘は径13.5cm・長さ2.2cmを測る。25は径21.5~22.1cm, 23は径10cmを測る。18はSE11818から, 他はSD11805から出土した。

挽き物36は, 表面にロクロ挽き痕が明確にみられる。羽釜形の容器である。復元口径は10.2cmとなる。37は, 高台を挽き出した椀と推定されるものである。39と同一個体の可能性が高い。37~39には両面に黒漆が塗られている。いずれもSD11805から出土した。

食事具(第65図31~35) 31は, 扁平な板の先端を半円形につくる, いわゆる「めしじゃくし」に類似した杓子形木製品である。現存長12.7cm・幅5.1cm・厚さ0.4cm前後を測る。

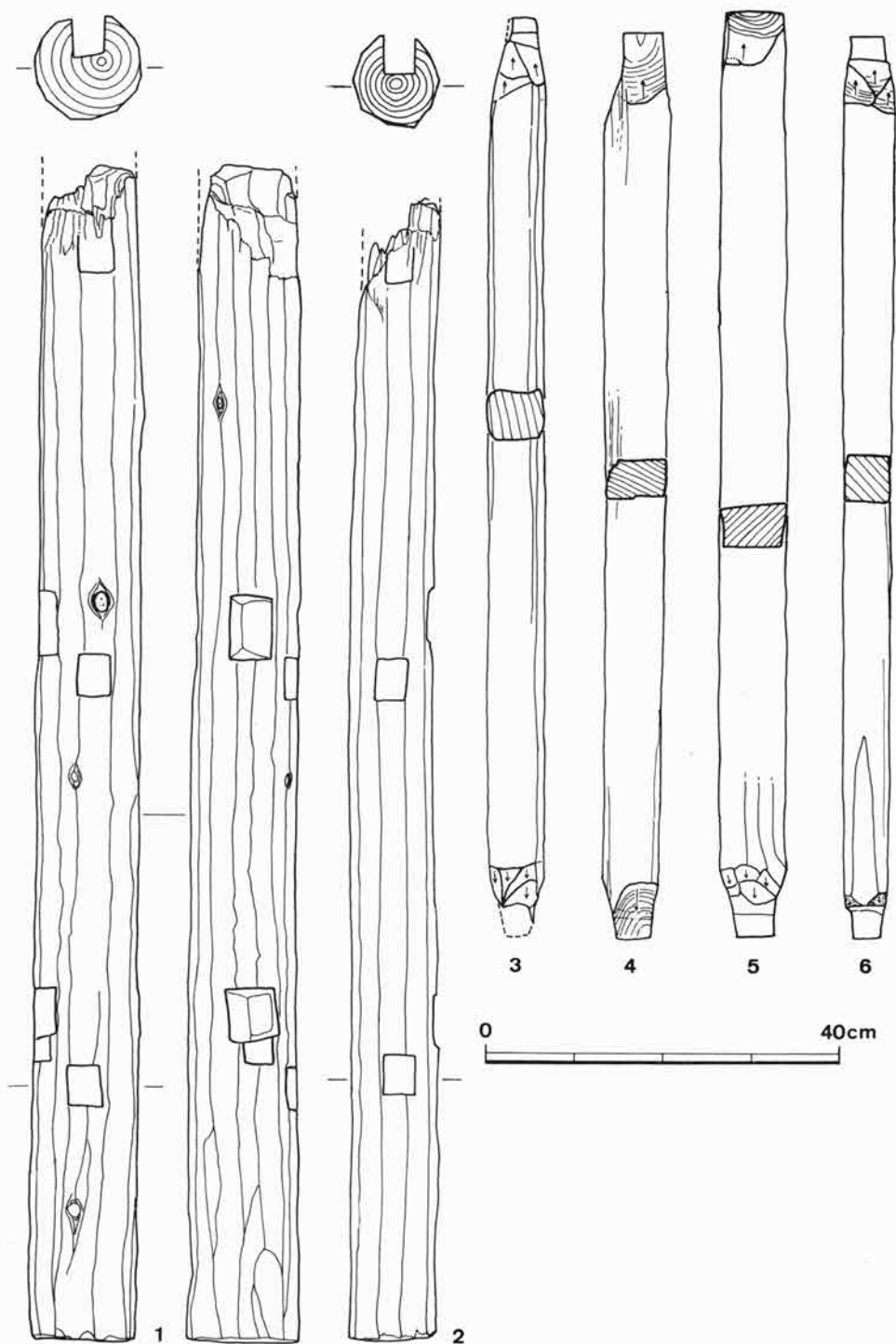
32は, 細板の先端を薄く, 軸を細く削った匙形木製品である。現存長10.2cm・最大幅1.7cmを測る。33~35は, 断面円形, 多角形の棒状木製品である。35は箸と推定される。いずれもSD11805から出土した。

工具(第70図1) 刀子柄は, SE11808から鉄身が着装されたまま出土した。面取り加工され, 自然面を残さず, 断面は円に近い多角形である。茎孔は柄元部分で, 断面三角形である。長さ13.9cm・径約1.4cmを測る。

用途不明木製品(第65図27・29・40 第66図41~52) 27は, 扁平な板材を円形に削り, 紡錘様につくるが, 穴をあけていない。径3.7cm・厚さ0.6cmを測る。40は, 表面に黒漆が塗られており, 箱状のものの一部と推定される。27はSD11805, 40はSD11806から出土した。

41は, 板材の上面を弧状に加工するが, 裏面は割裂いたままである。中央に組合せ用の凹みを削り出し, 中央と両端近くに孔を穿っている。両端の孔には目釘が残っている。紡織糸巻に類似したものである。長さ19.2cm・幅2.4cmを測る。SD11805から出土した。

42は, 断面楕円形の棒の上端を削り頭を表現し, 下端を剣先状に削る。長さ14.9cm・幅1.6cmを測る。43は, 丸木の下端を楔形に切り落とし, 上部は表面が磨かれた様に滑らかで, 下部は面取り加工がみられる。長さ15.1cm・最大径3cmを測る。46は, 断面が長方形の板材の両端に切り込みがみられる。44・45にも浅い切り込みがある。47は, 心持ち丸木の端を削り, いわゆる「木隅」様につくる。49・50は扁平な板材の断片である。51は「えぶり」状木製品で, 大きな鋸歯をつくり, 左端に柄穴と推定されるものがみられる。52は祭祀具の可能性のある心持ち丸木の断片で, 断面に切断痕が確認でき, 表面に樹皮の一部が残っていた。長さ5.5cm・径約3.1cmを測る。52はSE11808, 43はSE11818, 41・48~50はSD11805, 51は

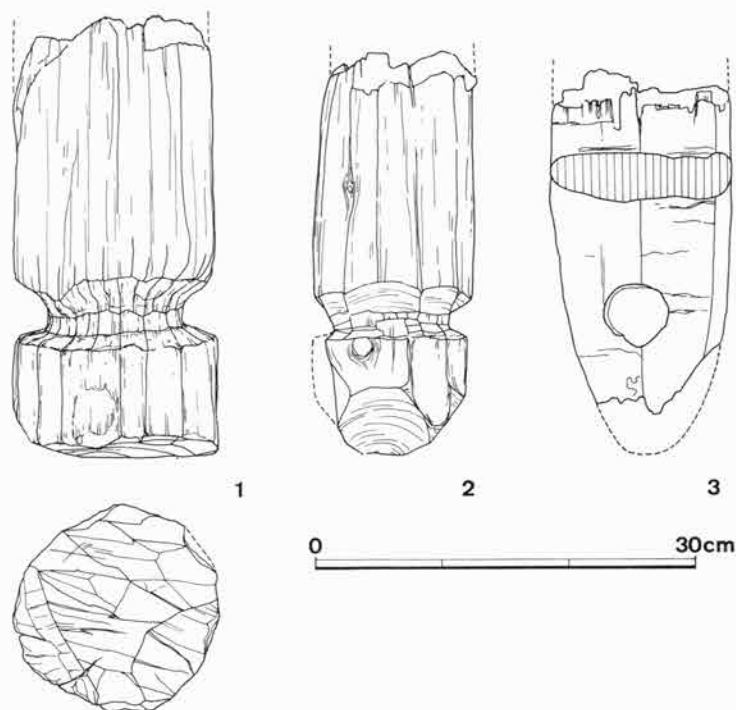


第 68 図 SE11818 井戸 枿 実測図
1・2; 隅柱 3~6; 横枿

SD11850、他はSD11805周辺から出土した。

井戸枠(第68図) 井戸SE11818は、縦板組隅柱横棧止めで遺存状況がきわめて良好であった。縦板は、長いもので1.40cm、幅広いものは20cmあるが、断ち割ったままの長さ・幅ともに様々で、これらを2〜3重に重ね合せている。隅柱は、すべて心持ち丸太材を面取り加工している。手斧で削り取った痕を明瞭にとどめる。納穴は、直交するが各々交わらないように、位置をずらして穿ち、その間隔は1.5尺(45cm前後)ある。1の北東隅柱は、長さ134cm・径12cm前後を測る。納穴は、5cm×4cm前後の長方形で、深さ4〜5cmを測る。上から三段目(最下段)の納穴は、位置(間隔)がずれたためか、穿ち直されている。このため、大きくなった納穴に合わせて横棧5の出納の一方が大きくなっている。横棧は、断ち割った角材の両端を粗く削り落して出納をつくる。4は長さ103cm・幅6.7cm、5は長さ105cm・幅7.7cmを測る。

柱根(第69図1・2) 1・2の柱根には、抉り取った溝がめぐる。2には、斧または鉋で切り込んだ痕が明瞭に残る。いずれも、心持ちの丸太材で、1は先端を平坦に削り取り、2は尖りぎみに切り取っている。この溝は、運搬する際に筏を組む縄掛けと推定されるが、柱を固定する場合の造作の可能性も捨て切れない。1は現存長34.5cm・径16.4cm、2は現存長31.5cm・径12.5cmを測る。1は、SB11810から、2は、SB11815からそれぞれ出土した。



第69図 柱根・杭実測図

杭(第69図3) 3の表面は焼かれて炭化している。そのうえ、径約5cmの孔が穿たれていることから、杭に転用されたことがわかる。以前の用途は不明である。現存長26.8cm・幅14.2cmを測る。SD11815の北東杭列、SX11863から出土した。

(4) 金属器(第70図)

この調査で出土し

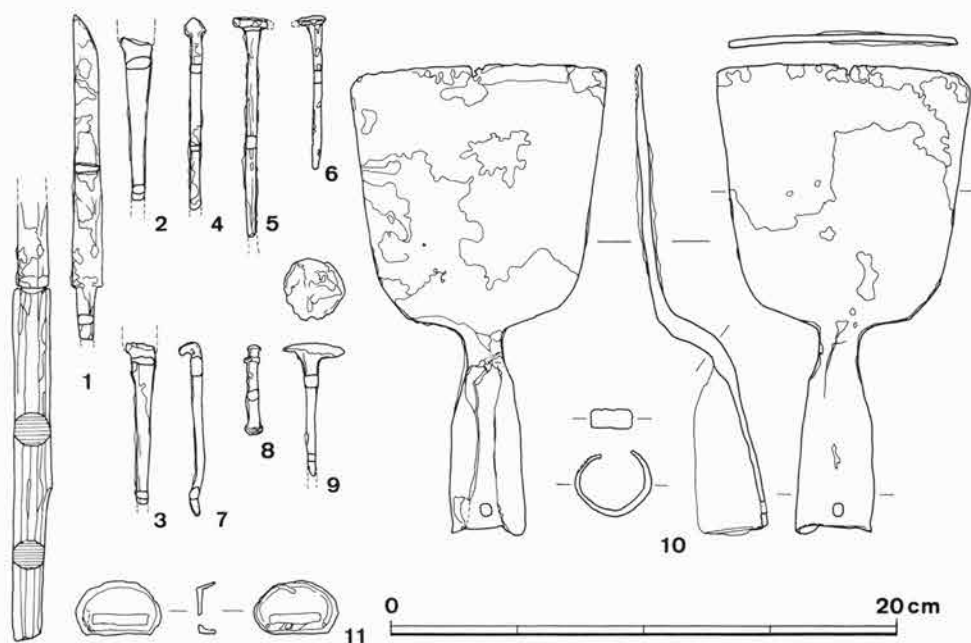
た金属器は合計12点ある。南一条条間大路北側溝SD11805から、銅製丸柄・銅製鋤先・鉄鎌・鉄釘が出土した。素掘り井戸SE11808から刀子(柄付)、コテ状鉄器が折り重なって出土した。縦板組井戸SE11818から、刀子が出土した。掘立柱建物跡SB11815の北方で鉄釘が出土した。以下に、各々の金属器について記す。

刀子(第70図1~3) 1は、SE11818の下層から柄を装着した状態で出土した。刀関と刀棟を明瞭につくり出した平造り角棟の刀子である。刀長10.7cm・棟厚約0.3cm・刀先の身幅1.2cmを測る。2・3は、SE11818から出土した。2は、現存長6.4cm, 3は、現存長6.3cmを測る。いずれも刀身のほとんどを欠いているが、1と同様の形態と思われる。

鉄鎌(第70図4) SD11805から出土した。平造りで茎頭を欠くが、現存長7.6cm・茎幅0.4cm・茎厚0.3cmを測る。

鉄釘(第70図5~9) 5・8は、SD11805から、6・9は、SB11815の北方から、7は、SB11815の東方から出土した。5・6は、断面長方形の脚頂部に方形の頭部を鍛接した方頭釘と呼ばれるものである。5は、現存長8.7cmを測る。6は、完形品で長さ4.5cmを測る。9は、断面方形の脚頂部に円形の頭部を鍛接した円頭釘と呼ばれるものである。頭部径2.4cm前後、現存長5.2cmを測る。

コテ状鉄器(第70図10) SE11808から出土した。平板なコテ状部と屈曲した袋状柄取り付



第70図 金属器実測図

1~3; 刀子 4; 鉄鎌 5~9; 鉄釘 10; コテ状鉄器 11; 銅製丸柄

け部からなる用途不明の鉄器である。コテ状部分は、わずかに湾曲し先端に刃をつけている。全長18.5cm・コテ状部先端幅10cm・袋状柄取り付け部最大径2cm・同茎部幅1.6cmを測る。コテ状部厚さ4cm前後・茎部最大厚さ8cmを測る。明瞭な用途は不明であるが、木柄を取り付け、押し出すことによって木などを削るものと考えられる。

銅丸靱(第70図11) SD11805から出土した。緑青等が付着しており、一部は薄くなり小孔がみられるが、完形品の表金具である。この表金具は、横長で中央のふくらみが小さく、甲高である。そして、透かし孔も横長となる。内側の3隅に鋳足が鋳出されている。最大横幅3.34cm・最大縦幅2.1cm・最大高0.84cmを測り、透かし孔の長さ2.03cm・幅0.33~0.41cmを測る。

(5) 銭貨(第71図)

銭貨は、この調査で合計10枚出土している(中国銭を除く)。それぞれの出土地点・法量は、付表2のとおりである。このうち、SX11856から6枚が土師器皿とともにまとまって出土した。そして、SD11805から1枚、SB11813の柱掘形から1枚、SD11805の周辺から2枚出土した。そのうち、SX11856出土のものは、祭祀と関係するものとみられ、特に注意される。以下に、銭貨の特徴を記す。

和同開珎(第71図 1・2) 1は、全体に青錆(緑青)等が付着し遺存状態がやや悪く、範の特徴は、明瞭ではないが、和同開珎AおよびBと思われる。2は、全体に黄褐色の錆が付着し、摩耗が著しく詳細は不明であるが、1とよく似ていることが窺える。

萬年通寶(第71図 3・4) 3は、緑青等が付着し遺存状態があまりよくないが、「年」の第4画が第6画へ斜めに接し、「通」の一部が不明瞭であるが「通」の_レのはねが上向きになる「横点萬年」と呼ばれるものである。3も4と同様と思われる。

神功開寶(第71図 5~10) 5は、遺存状態があまりよくないが、文字の鋳上がりは良好であることがわかる。「功」のつくりを「力」につくり、「開」につくる。「力功神功」と呼ばれるものである。6は、緑青等が付着し、遺存状態が悪く、一部を欠損するが、内郭にバリが残ることが窺える。「功」のつくりを「刀」につくり、「刀」の第2画がやや長い。「開」を「開」につくり、「寶」の「貝」が小さい。7は、緑青等が付着し、遺存状態がよくないが、「開」を「開」につくり、「寶」の「貝」が小さい。「功」のつくりを「刀」につくり、工へんが鋳つぶれたためか、行書風に第2画と第3画がつながっている。8は、緑青等が付着し、遺存状態が悪いが、「開」が若干右上がりに傾いていることが窺える。9は、遺存状態があまりよくないが、「功」のつくりを「刀」につくり、「開」を「開」につくる。「寶」の「貝」が小さく、外郭幅が若干広い。10は、緑青等が付着し、遺存状態は悪く、外郭縁を一

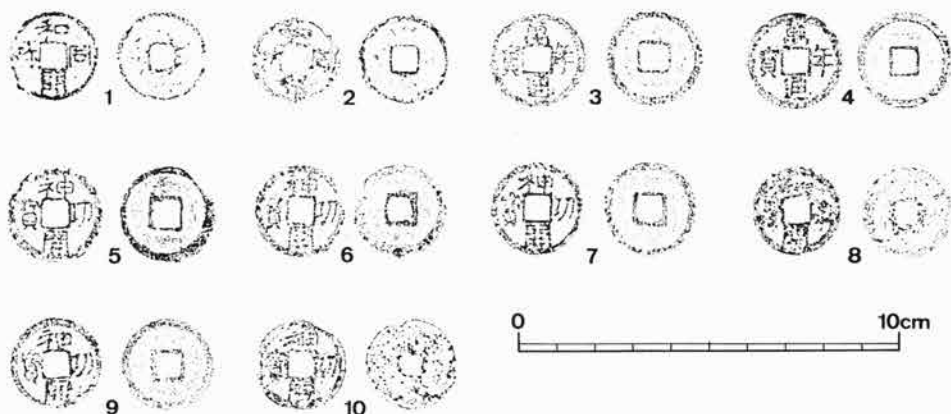
部欠損する。文字は、9に似ている。

その他 中国銭が4枚出土している。文字がわかるものでは、「熙寧元寶」「元豊通寶」「天聖元寶」などがある。「熙寧元寶」は東西方向の中世溝1から出土した。(石尾 政信)

付表2 銭貨計測値一覧表

番号	銭貨名(種)	遺構	地区	W(g)	G(mm)	N(mm)	g(mm)	n(mm)	T(mm)	t(mm)
1	和同開珎A or B	SX11856	8R	(1.8)	24.02	20.95	7.75	6.32	1.37	0.52
2	和同開珎	SB11813		(2.0)	24.17	21.05	7.87	6.52	1.37	0.52
3	萬年通寶Fカ	SX11856	8R	3.6	25.90	20.97	8.07	6.45	1.55	0.86
4	萬年通寶F	—	8R・S	3.5	25.57	21.10	8.02	6.15	1.64	0.80
5	神功開寶B	SX11856	8R	3.8	25.67	20.40	8.02	6.35	1.32	0.95
6	神功開寶E	SX11856	8R	(1.7)	24.30	20.00	7.90	6.35	1.16	0.49
7	神功開寶E?	SX11856	8R	2.5	24.57	20.60	8.02	6.42	1.37	0.64
8	神功開寶Fカ	SX11856	8R	2.4	23.87	19.52	7.80	6.37	1.26	0.90
9	神功開寶	SD11805	19T	4.1	24.72	20.95	8.25	6.60	1.86	1.01
10	神功開寶	—	8R・S	2.6	24.40	19.77	8.05	6.35	1.34	0.86

(注) 銭貨の各部計測は、奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』VIに準じた。



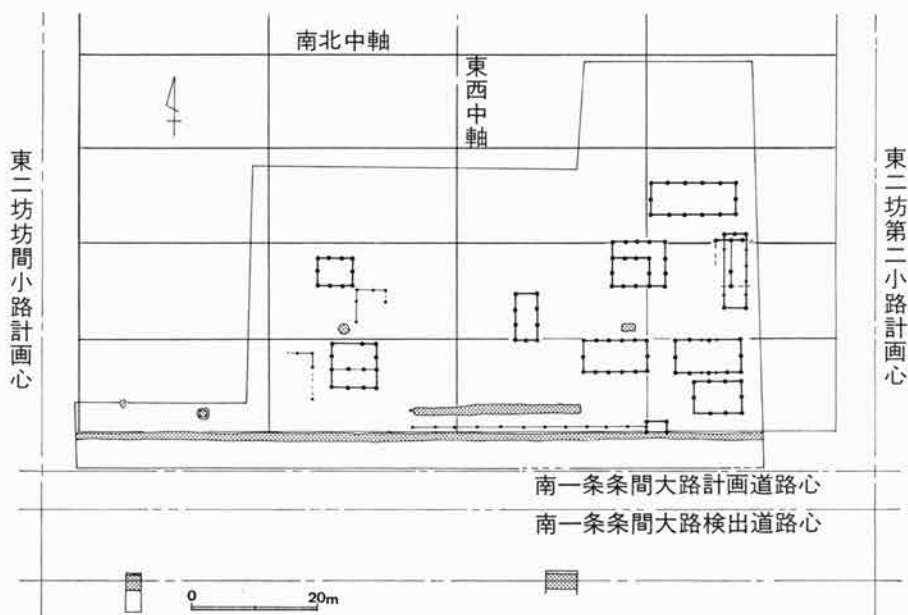
第71図 銅銭拓影

5. おわりに

調査の中心となった発掘区は、長岡京左京一条二坊十町の南半部に当り、京城の中でも長岡宮に極めて近接した場所に位置する。そうした京内での重要度や周辺の調査結果から、長岡京への遷都後、早い時期から整備が進められたことが想定されていた。調査面積は十町部分で約4,700m²ある。これは、1町域(450尺四方)の1/4以上にあたり、長岡京の発掘調査としては、比較的広い面積を掘削できたといえる。その結果、整然と配置された掘立柱建物跡群の把握が可能となり、全体規模が明確にできたもので10棟あり、完結しなかったものも4棟以上数えられる。建物跡群は、東西2群に分かれ、特に東部の建物跡群では、北のほぼ中央に位置するSB11802を中心に、その南側、大路側溝までの間に東西対になる形を意識して建物が配置されたものと考えられる。しかし、中心的な建物跡と考えられるSB11802にしても、その形状、柱穴の大きさなどから、決して大規模なものとは言えず、ある程度整然と配置はされているものの、建物跡個々についてみると、全体的にやや規模の小さいものである。

これら、長岡京期の掘立柱建物跡及び条坊関係遺構等が、十町域内において、どのような計画のもとに構築されたのか、その基本線を抽出してみたい。その基準として長岡京全体計画が方眼に組まれ、一町が450尺四方、その中で町割に利用される部分が400尺四方であることを念頭におき、1尺=29.6cm^(注9)として計算する。その結果、十町域の東西を分ける中軸線は、東・西建物跡群の間にあり、南北の中軸はSB11802の北約20mに位置する。それを基準にして、さらに町内を100尺、50尺等の等間隔で分割し、いわゆる四行八門制の範疇におさめたのが第72図である。そこで各遺構と分割線の関係を見ると、東西線では、中軸から南へ200尺の線が、大路北側溝北肩を走り、そこに接するように柵SA11820が設けられている。その線から北へ50尺の東西線が、SB11817・SB11811の北辺、SB11804の南辺を通り、さらに西のSB11815北辺近くに結ばれる。その線からさらに北、50尺の線が、SB11810・SB11812の北辺にはほぼ合致している。南北線では、中軸から東へ100尺の線が、南からSB11819の西辺、SB11811の東辺を通り、SB11810の身舎部分の東辺を結ぶ位置を通っている。この東西中軸線についてもそれに沿った形の施設は認められない。SB11802についても見ると、先に述べた各分割線からややずれるが、南北中軸から50~100尺、東西中軸から100~150尺の範囲のほぼ中央に位置している。以上のように、これらの各遺構が、ある程度、町内の中軸線を基本に、大路北側溝を南辺として、400尺四方の町割が計画され、建物が配置されたことが窺える。

その性格が確定し得なかったものの一つに、長岡京期の建物跡等と方位の揃う、SD11821~11824・11835・11836等の溝群がある。遺物等から時期を確定することができず、遺構説明では、長岡京期の項に入れなかったが、建物跡群とは重複せず、また、方向・埋土の状況が



第72図 左京一条二坊十町域宅地利用図(南半町)

ら、それらと時期が大きく異なるものと考えられる。このことから、これらの溝が、建物跡群等と同時期のものとした場合、SD11821～11834については、その形状から、宅地内に部分的に設けられた小規模な農耕に伴う遺構であることが想定できる。しかし、この宅地内における中心的建物であるSB11802のあまりにも近傍なまで迫っている点等から同時期であることへの疑問が残るとともに、逆に同時期の小規模な農園的なものとした場合は、その用途について考慮しなければならない点を残す。SD11835・11836については、やや不安定がら溝心間で3.7～3.9mあり、SD11835が東西中軸の西、約7.5mの位置にある。これも同な時期のものとした場合、基本的な計画線には合致しないが、SD11807・SA11820の西端との関連もあり、東と西の建物群をある程度区画するための施設を想定することもできる。ただ、SD11853等のSB11811付近を通る細い溝は、方向もやや振れ、長岡京期より後出のものも含まれ、SD11835・11836等と類似するものすべてを同一に扱えない。

調査の結果から、町域南半で未調査の部分も多く残すが、これら東・西の建物群については、建物の規模・配置、井戸の位置等から、一連のものであり、少なくとも南半町を占地していた宅地内ものと考えられる。建物群の性格については、周辺の調査結果や、宮域との関係・建物配置および、墨書土器・転用硯などの出土遺物、あるいは平安京との対比などから、官衙的なものであった可能性が高いと考えられるが、その機能を確定するに足る資料は得られなかった。また、出土遺物は、多種多様であるが、その中には、類例の極めて少ない

木印があり、長岡京期の土器類については、供膳形態のものが圧倒的に多い。SD11805における土器類の出土状況を見ると、東部では、部分的に集中する場所もあるが、総量としては少なく、建物跡群に面した西部がはるかに多く、各建物跡群の機能の相違を示唆するものと考えられる。

(長谷川 達)

- 注1 条坊関係遺跡の呼称は、『向日市史』上巻による。
- 注2 戸原和人「長岡京跡左京第14次調査7 ANEJS地区」『長岡京』9・10号 長岡京跡発掘調査研究所 1978.11
- 注3 山中 章・清水みき・不破 隆・小林久彦・國下多美樹・松崎俊郎「長岡京跡左京第89次発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第13集 向日市教育委員会) 1984
- 注4 大阪層群からなる丘陵で、向日丘陵と通称され、高位の稜線上には大型の前期古墳が築造され、その低位の部分に、長岡京が造営されている。
- 注5 高橋美久二「長岡京跡昭和51年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1977)』京都府教育委員会) 1977
- 注6 調査補助員として調査に参加したものは下記のとおりである(順不同)。
城田正博・浜口和宏・肥後弘幸・西岸秀文・万谷幸美・鈴木良章・福富 仁・吉田野々・鍋田勇・藤原ひとみ・藤沢秀樹・岩月有行
- 注7 「平城宮跡発掘調査報告Ⅶ」(『奈良国立文化財研究所学報』第26冊 奈良国立文化財研究所) 1976
- 注8 当時の印章には、認め印的な性格がないため、必ず押印しなければならないという必要は全くない。従って、文房具に分類することには問題があるが、ここでは奈良国立文化財研究所編「木器集成(織内編)」によって分類した。
- 注9 各道路等の国土座標値については、『向日市史』上巻によった。

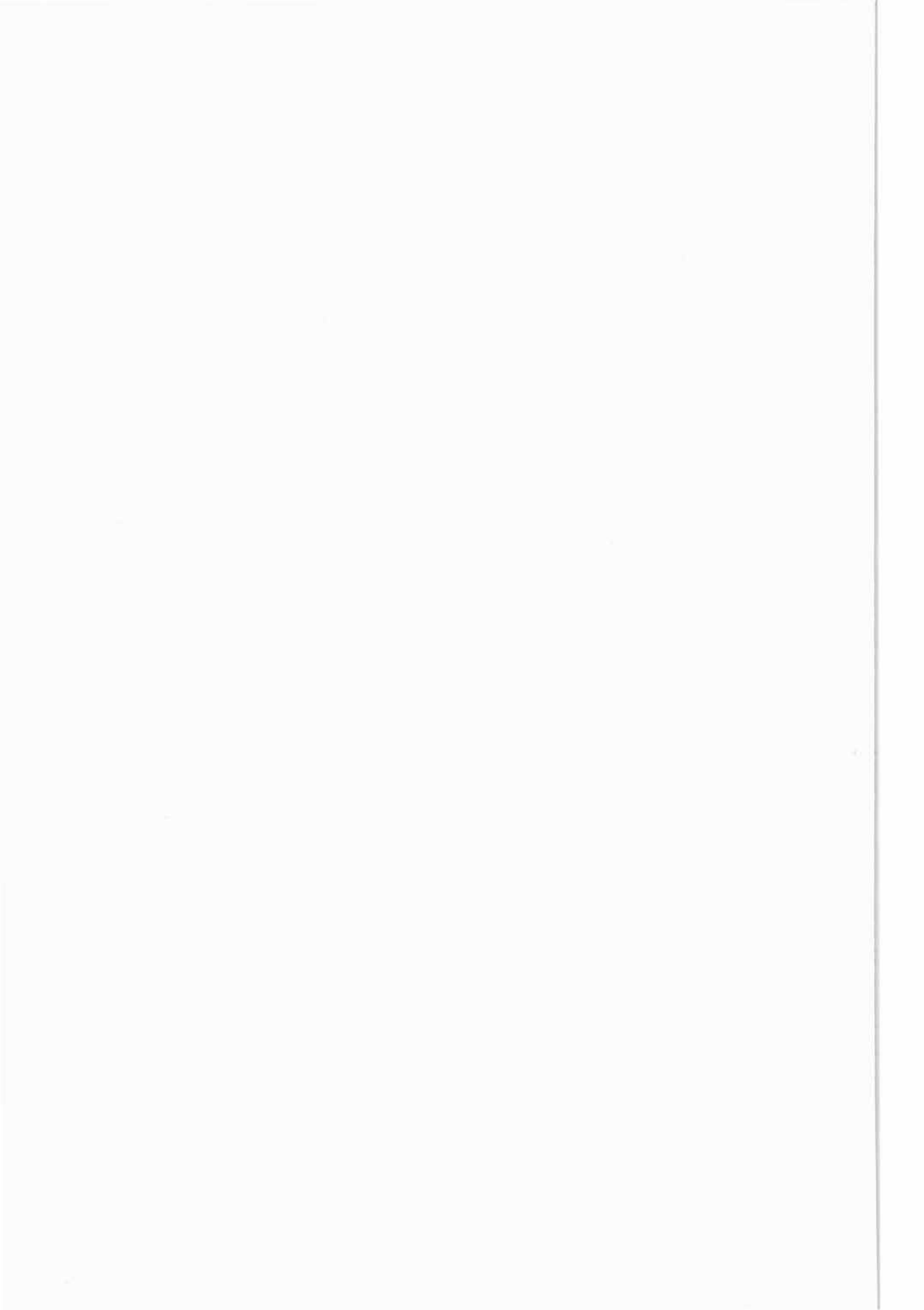
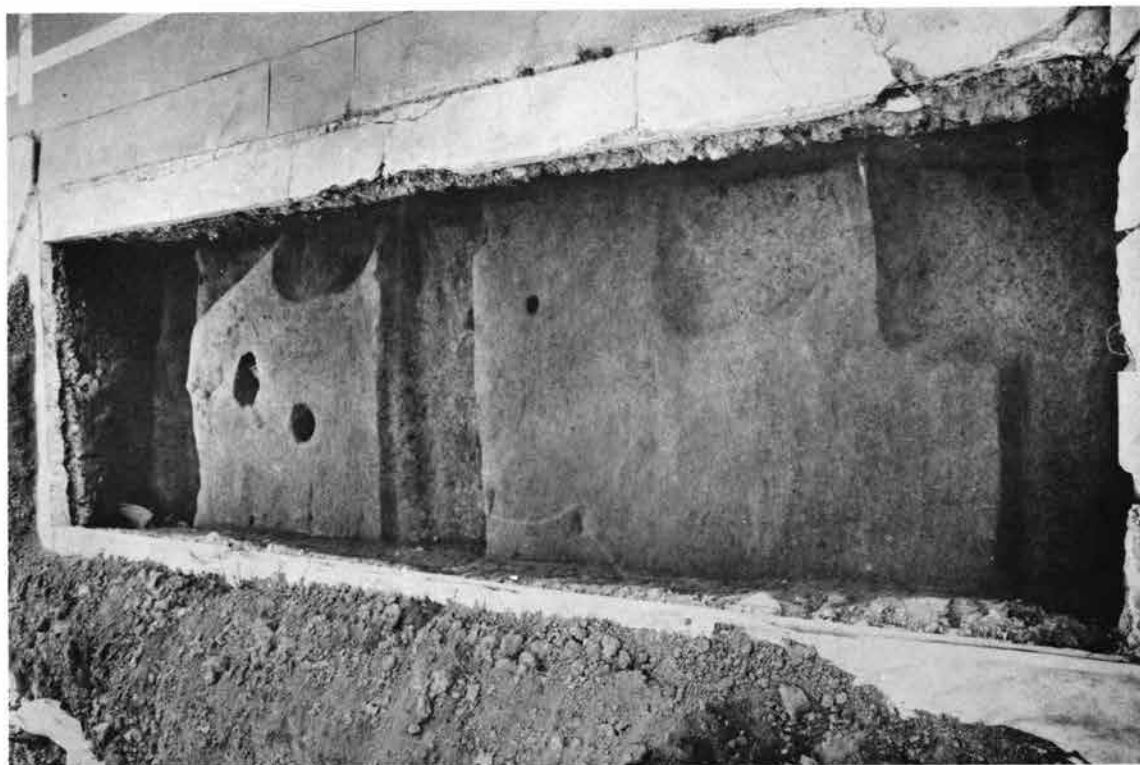
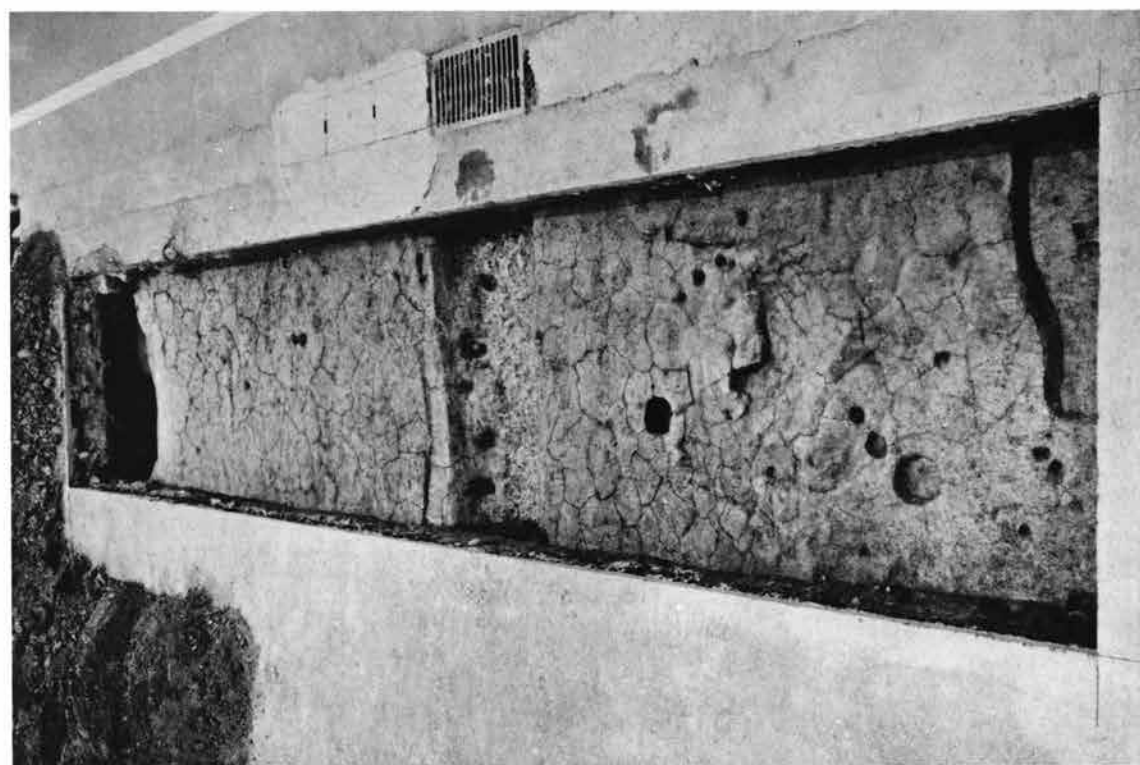


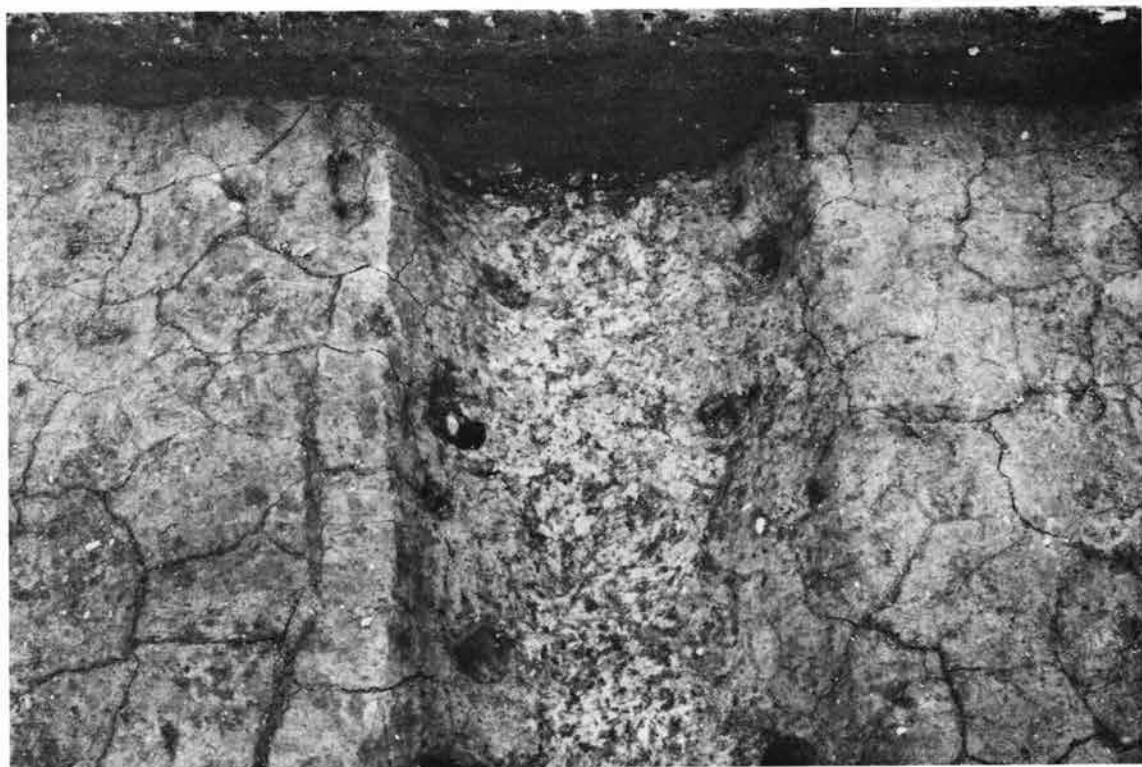
圖 版



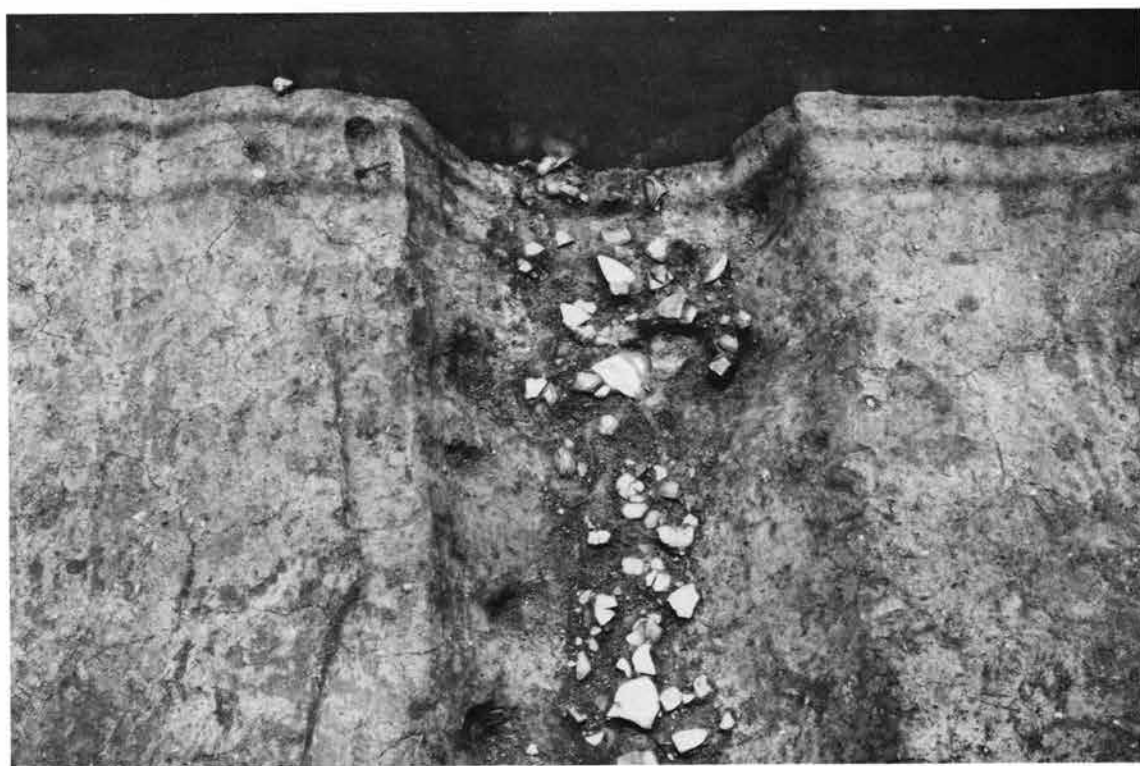
(2) 第2トレンチ全景 (西から)



(1) 第1トレンチ全景 (西から)



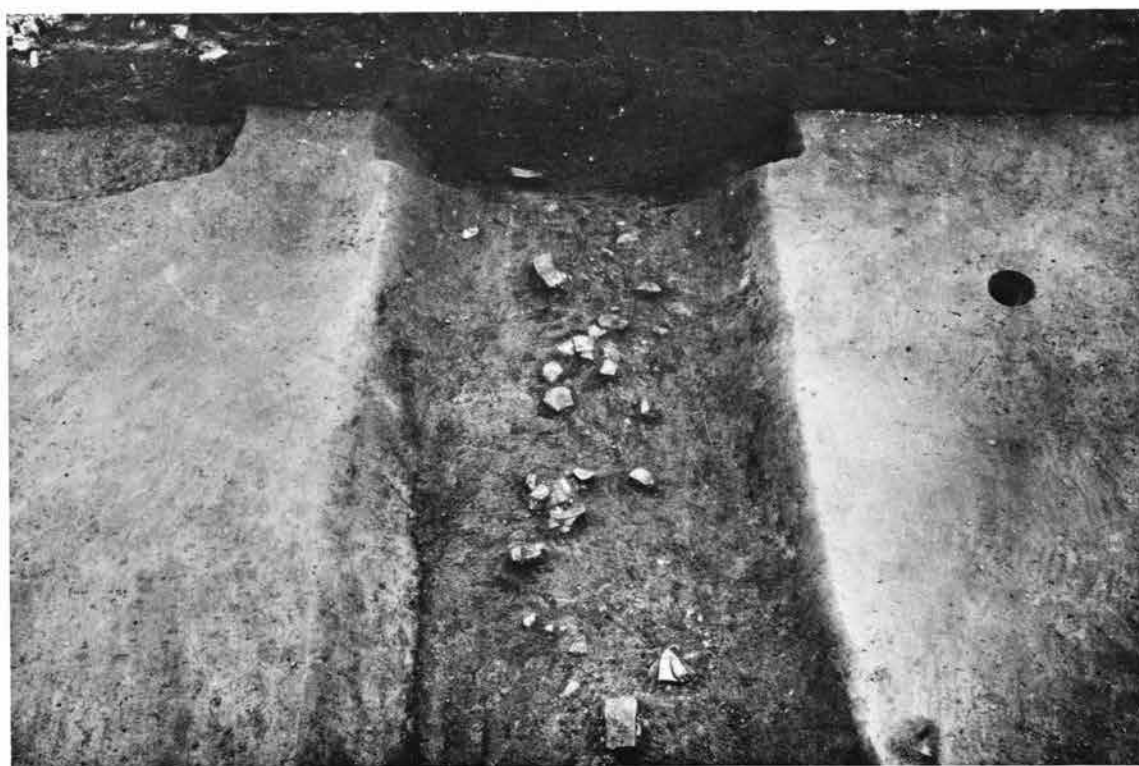
(1) SD16503 (北から)



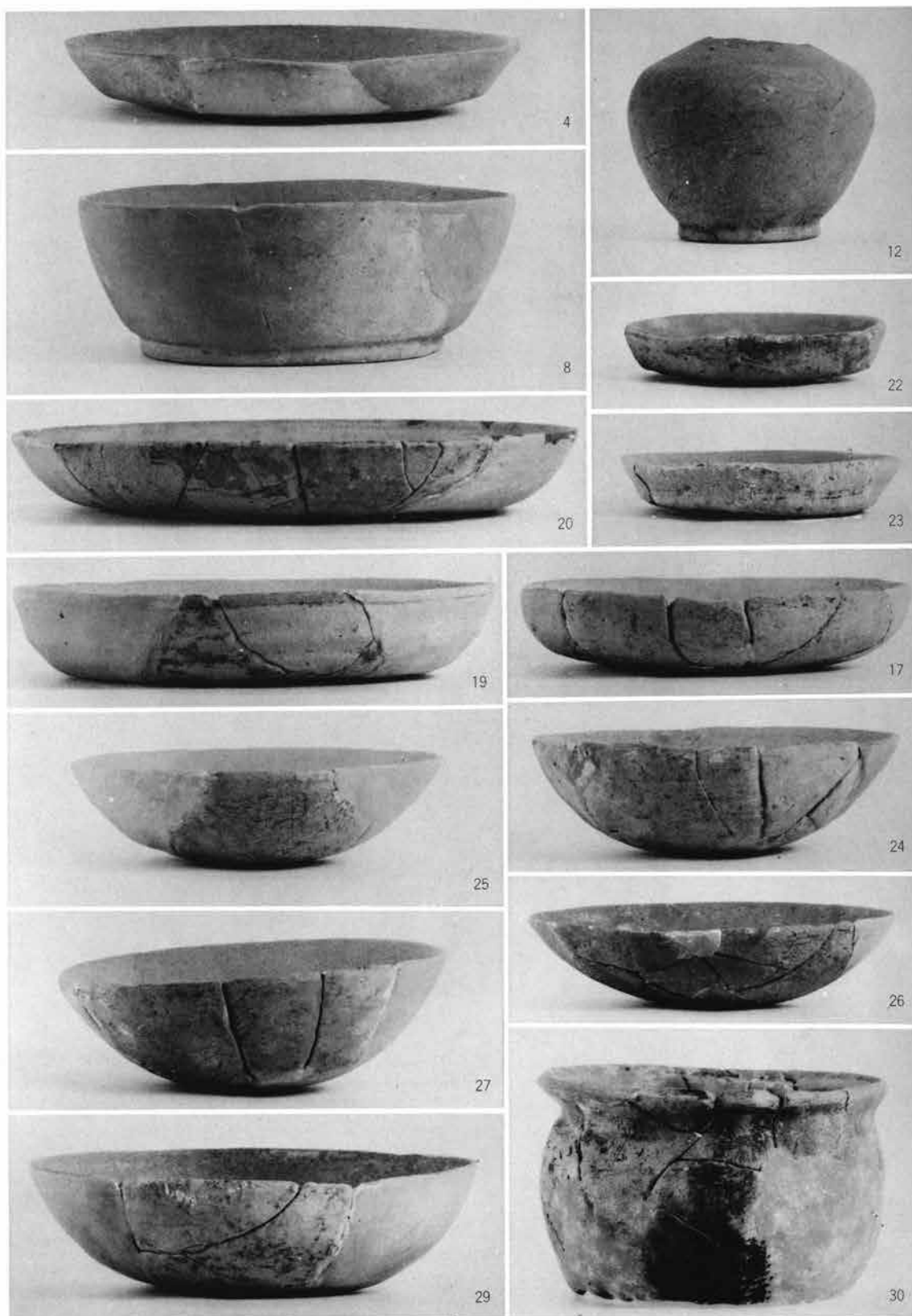
(2) SD16503遺物出土状況 (北から)



(1) SD16507 (北から)



(2) SD16507遺物出土状況 (北から)



出土遺物



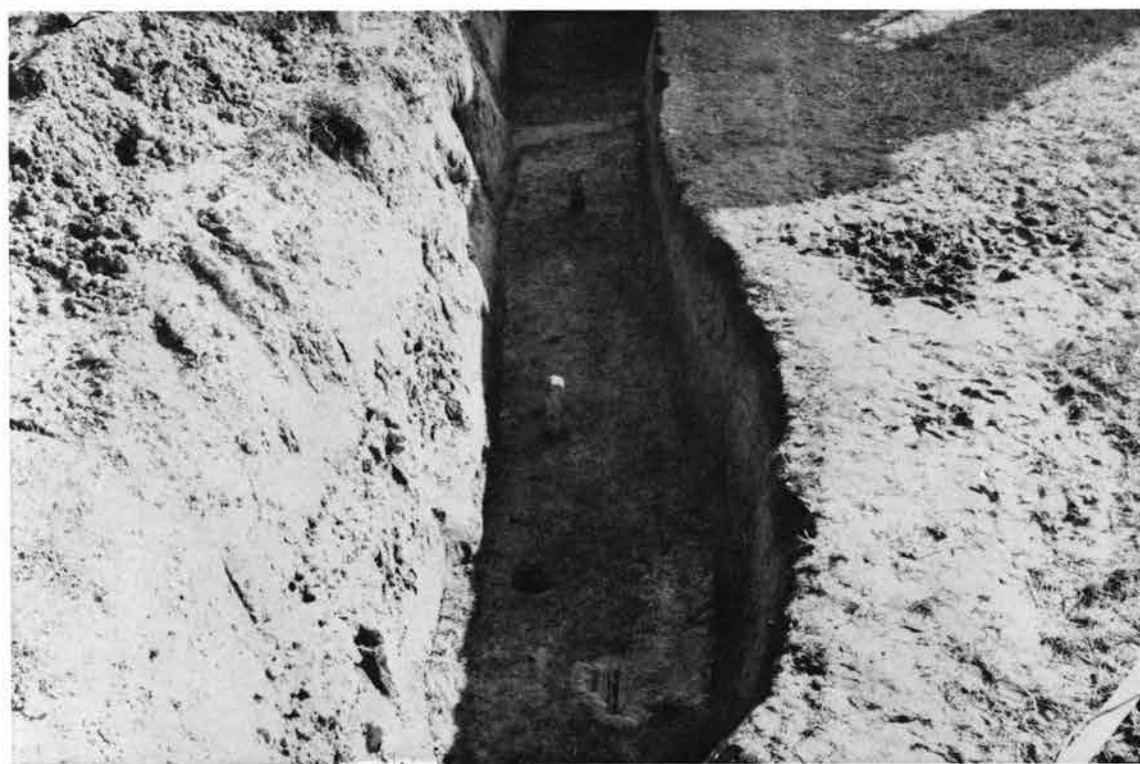
(1) 第1トレンチ全景(北から)



(2) 第2トレンチ全景(北から)



(1) 第3トレンチ全景 (北から)



(2) 第4トレンチ全景 (北から)



(1) 調査地全景 古墳周濠SD17102 (南から)



(2) 調査地全景 西二坊大路東側溝 (北から)



(1) 西二坊大路東側溝SD17104 (北から)



(2) 南北溝SD17101 杭跡 (北から)



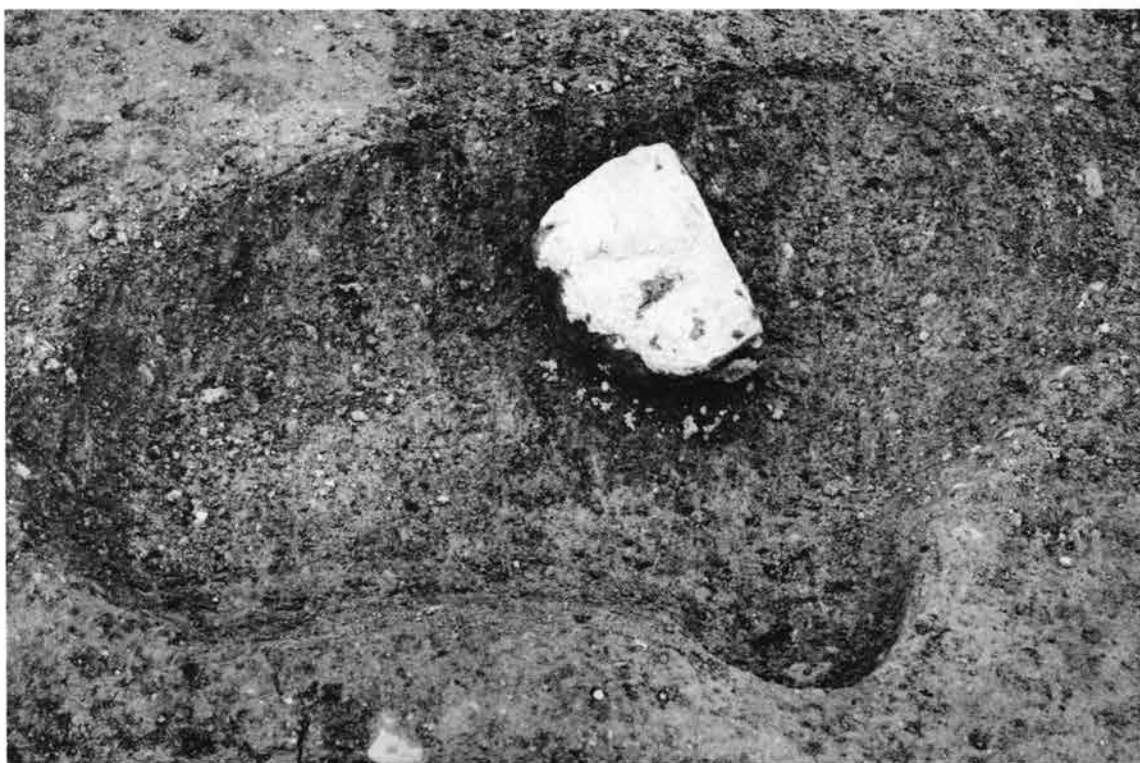
(1) 住居跡SH17106 (南東から)



(2) 住居跡SH17106 (北から)



(1) 東南溝SD17103西壁断面



(2) 土壙SK17107 (西から)



(1) トレンチ全景 (北から)



(2) トレンチ全景—砂礫層除去後— (北から)



(1) S D 11901 (東から)



(2) S D 11901内軒平瓦出土状況



(3) 軒丸瓦出土状況



(4) 轍群 (南から)



(1) S X 11902 (西から)



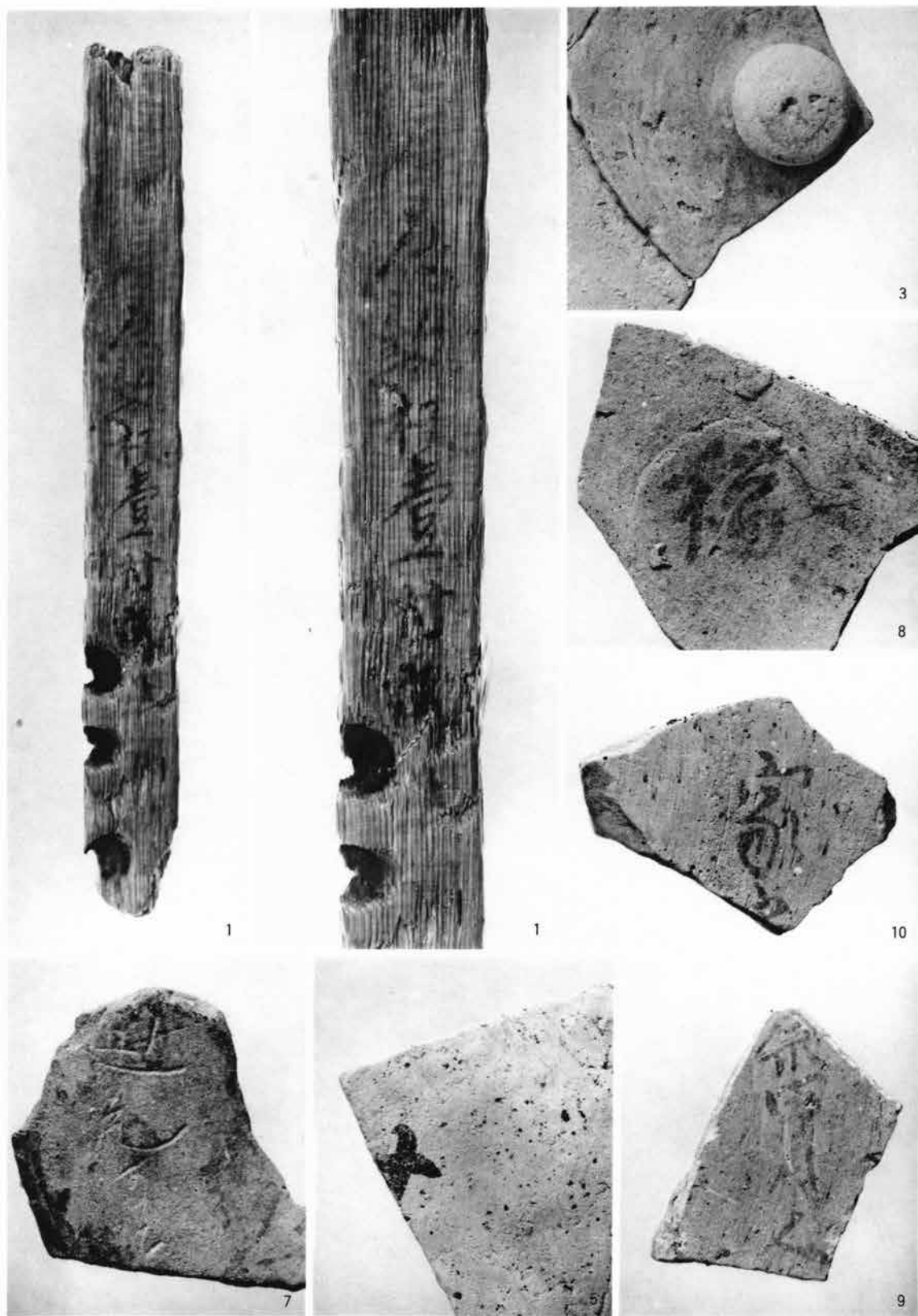
(2) S X 11903 (南から)



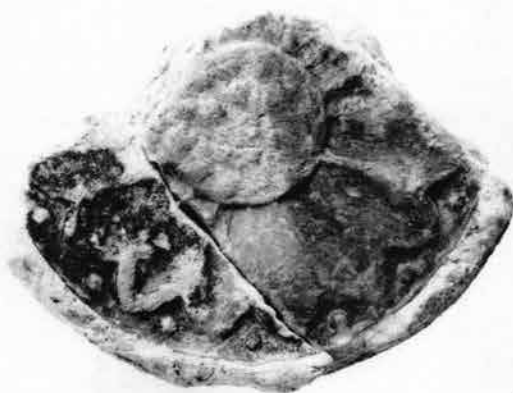
出土遺物(1) (2・6は墨書土器)



出土遺物(2)



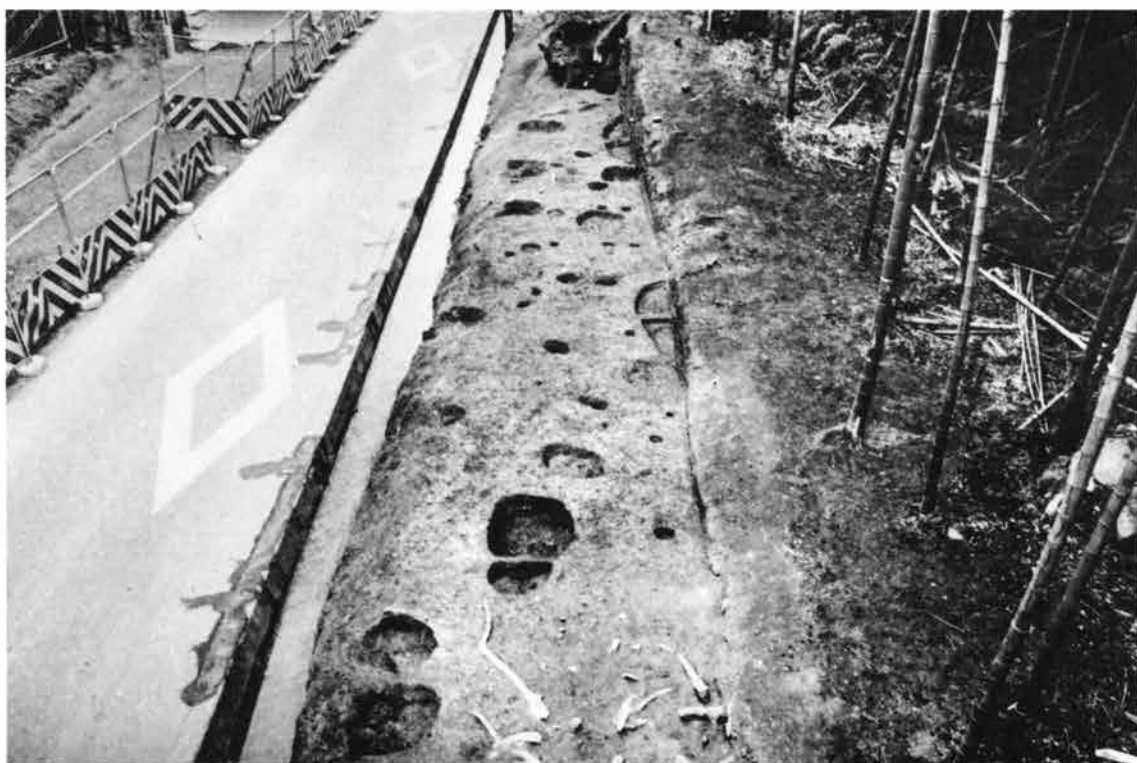
出土遺物(3)



出土遺物(4)



(1) Aトレンチ全景 (西から)



(2) Aトレンチ東部遺構検出状況 (西から)



(1) Bトレンチ全景 (東から)



(1) Cトレンチ全景 (東から)



(1) Aトレンチ遺構検出状況



(2) Cトレンチ遺構検出状況



(1) Bトレンチ土層断面



(2) AトレンチP11内遺物出土状況



(1) 府道大山崎大枝線調査地近景（北から）



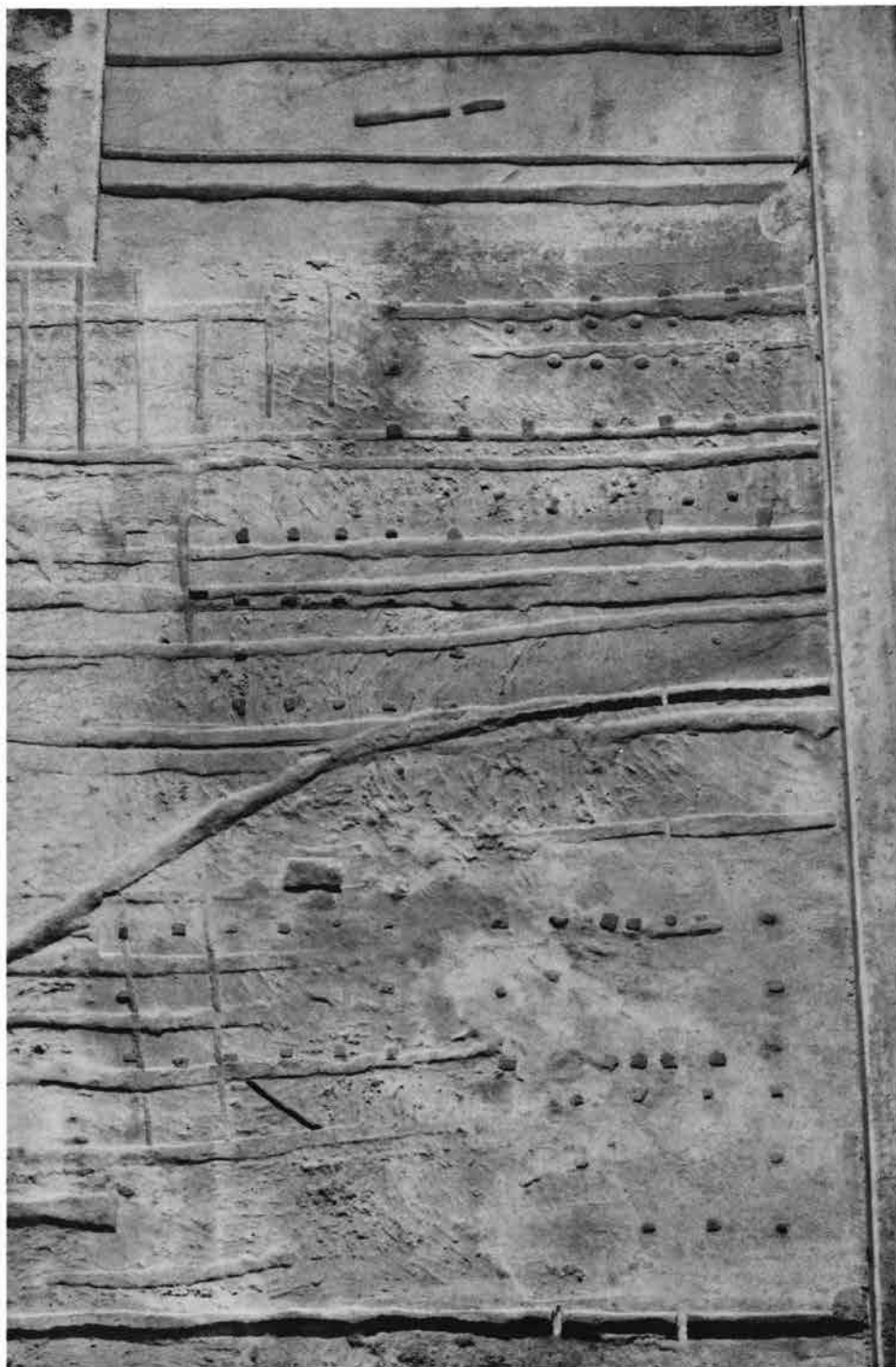
(2) 土層断面



(1) 調査地遠景（東から）



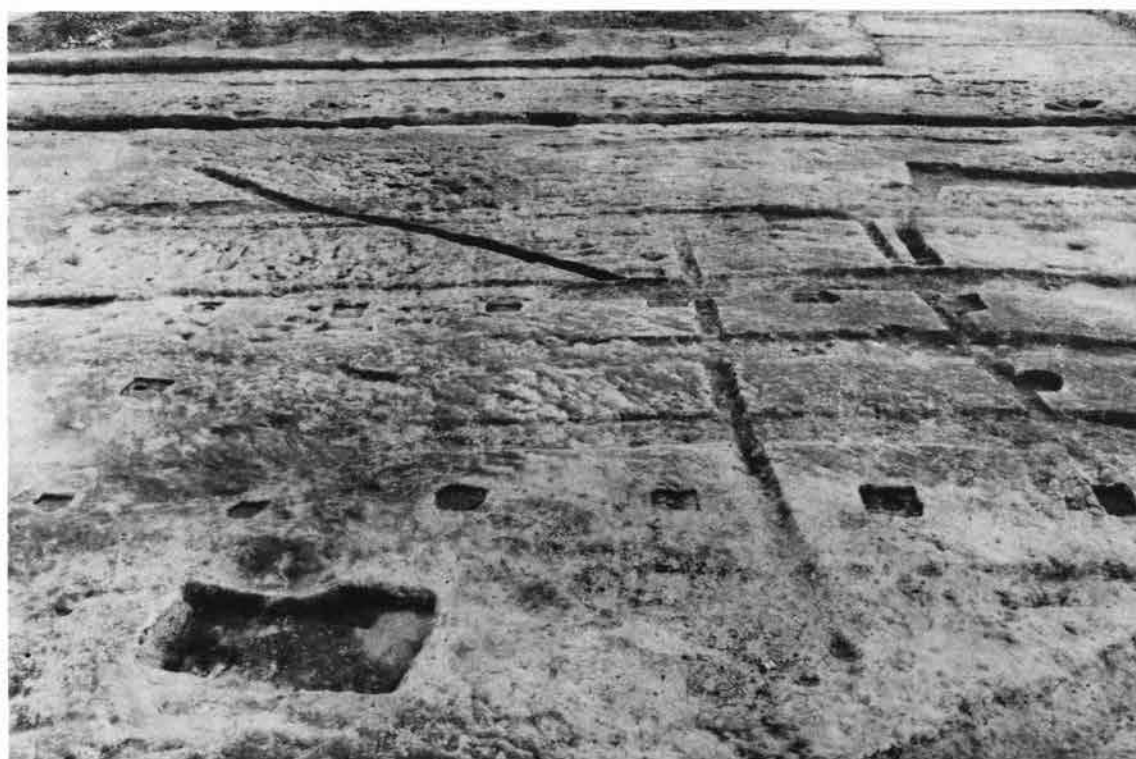
(2) 調査地遠景（南から）



調査地東部遺構検出状況



(1) 掘立柱建物 S B 11810 (東から)



(2) 掘立柱建物 S B 11811, 土壇 S K 11814 (北から)



(1) 掘立柱建物 S B11803・S B11812 (北から)



(2) 掘立柱建物 S B11817・S B11813 (北から)



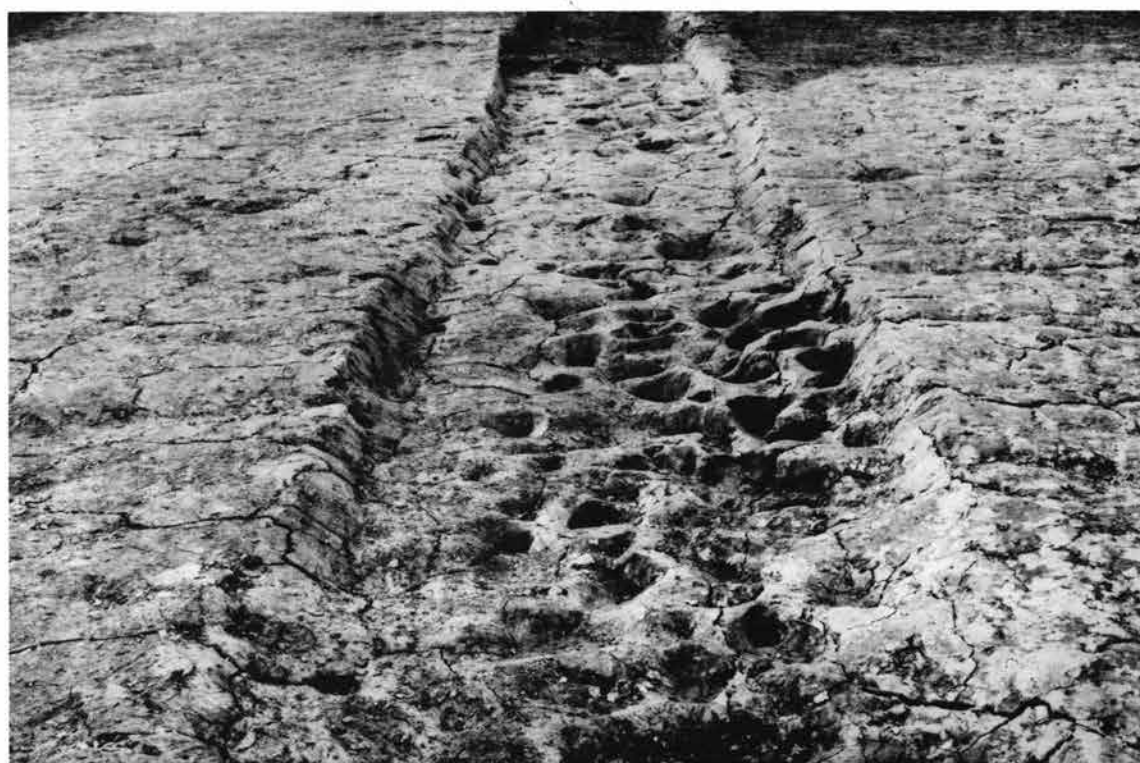
(1) 掘立柱建物 S B11816 (北から)



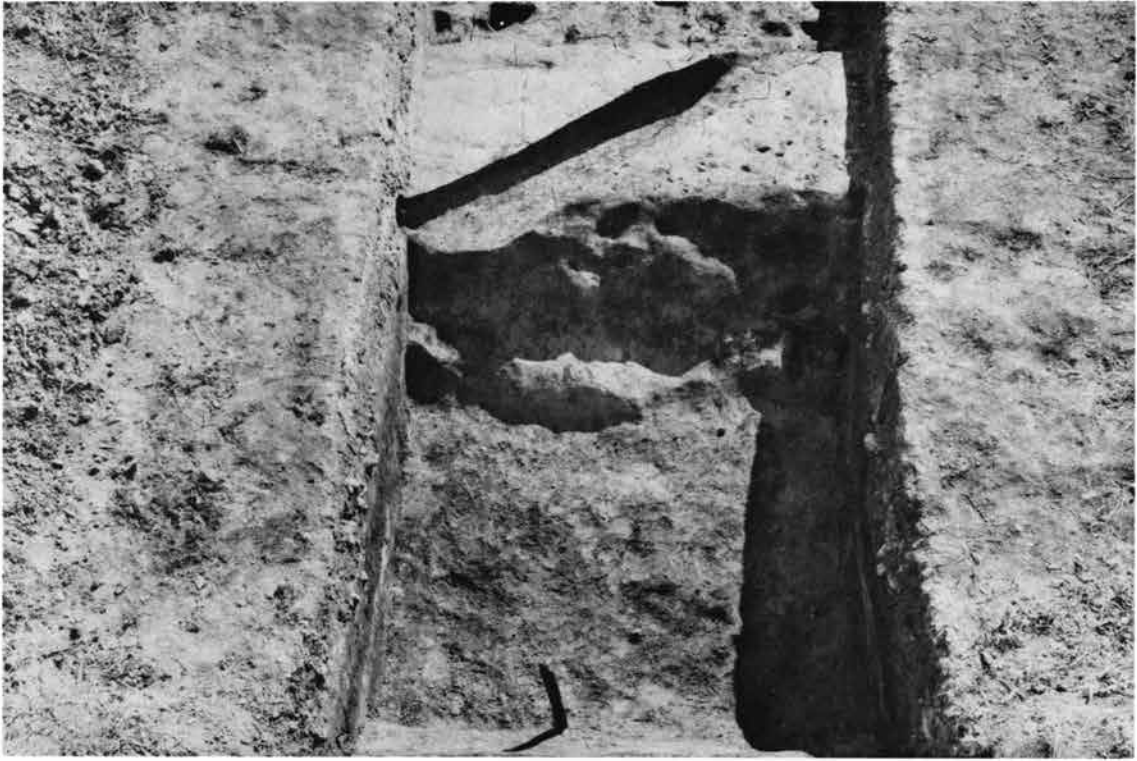
(2) 掘立柱建物 S B11819 (南から)



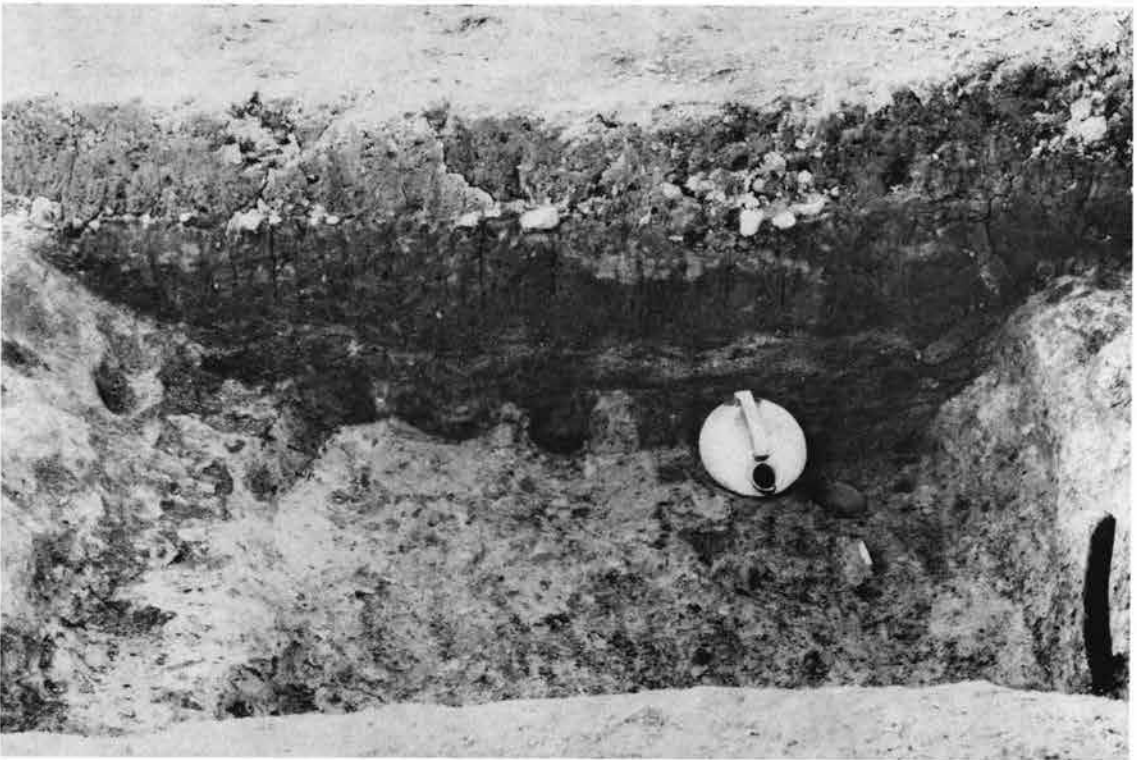
(1) 溝 S B11805・S B11807 (東から)



(2) 溝底足跡 S B11805 (部分, 東から)



(1) 溝 SD11806 (南3トレンチ北から)



(2) 溝 SD11806 (南3トレンチ東から)



(1) 井戸 SE11818 (南から)



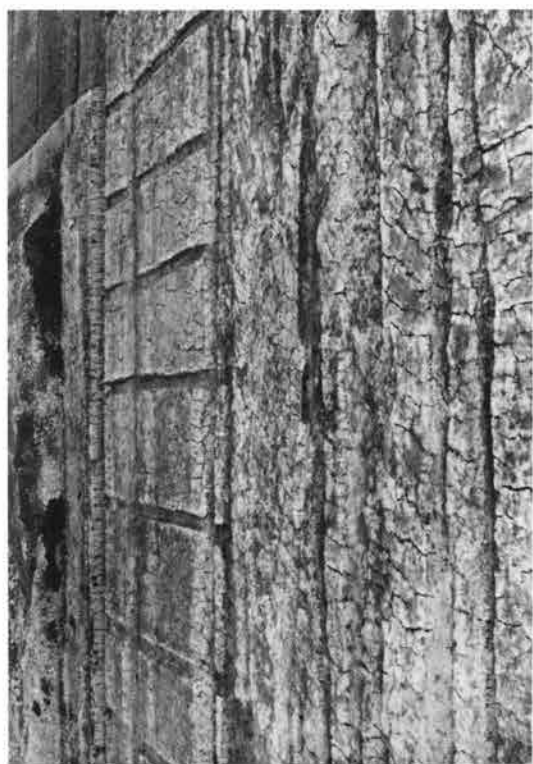
(2) 井戸 SE11818 (南西から)



(3) S B11811柱根 (南から)



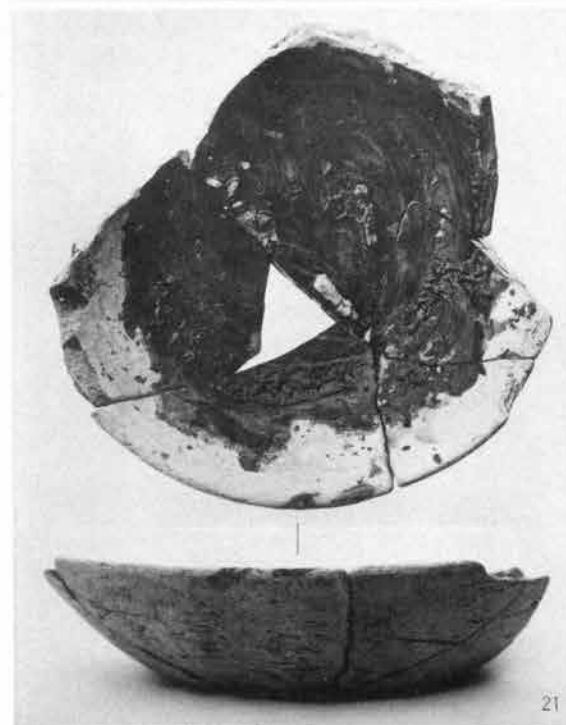
(4) S D11805土層堆積状況 (西から)



(1) 調査地北部溝群 (南から)

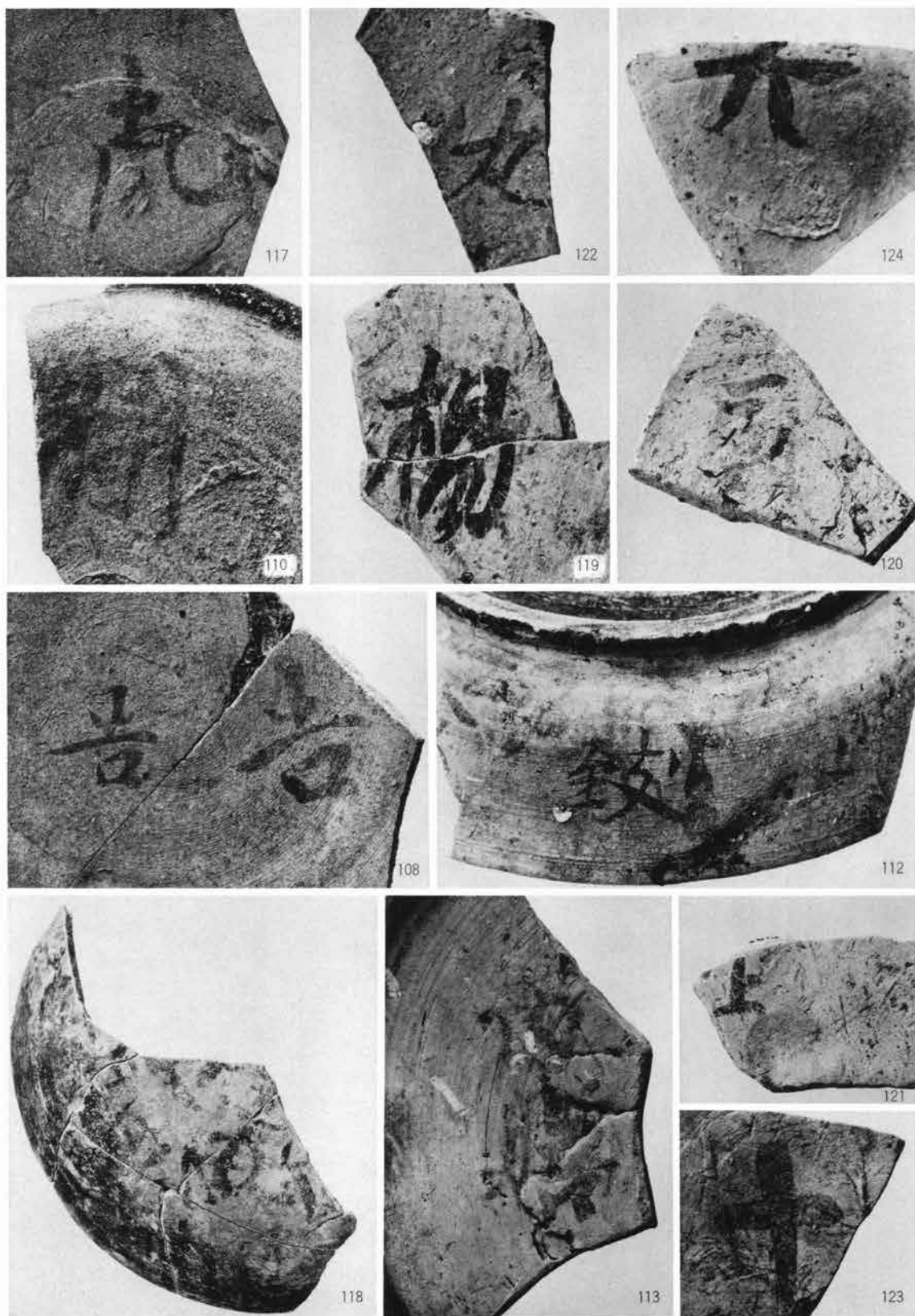


(2) S X11856遺物出土状況

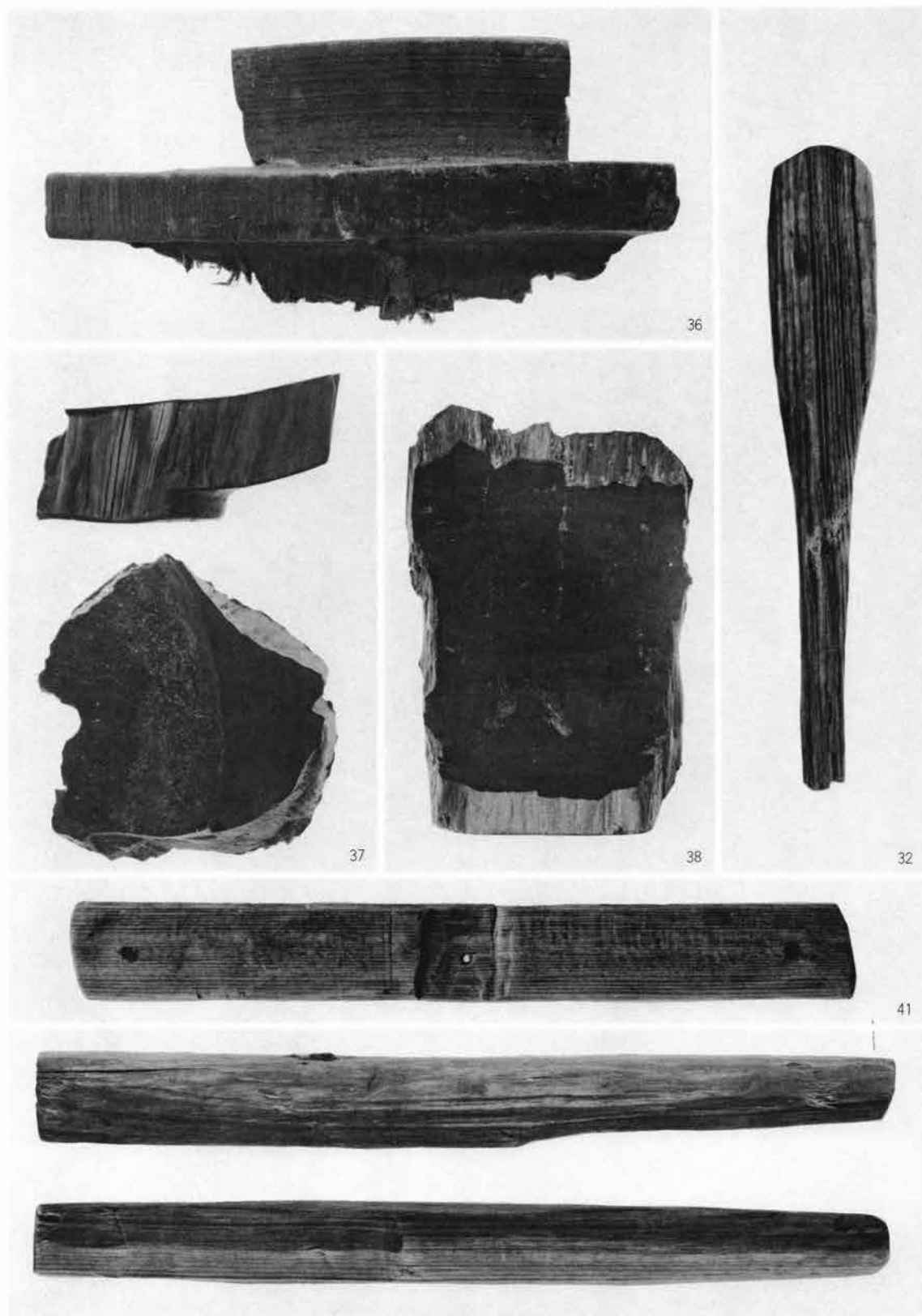




出土遺物(2)一須恵器・瓦一



出土遺物(3)一墨書土器一



出土遺物—木製品—

36~38 挽物容器(37・38は黒漆塗り) 32 ヘラ状木製品

41 不明木製品 最下段 刀子柄(側面・裏)



出土遺物—木製品—

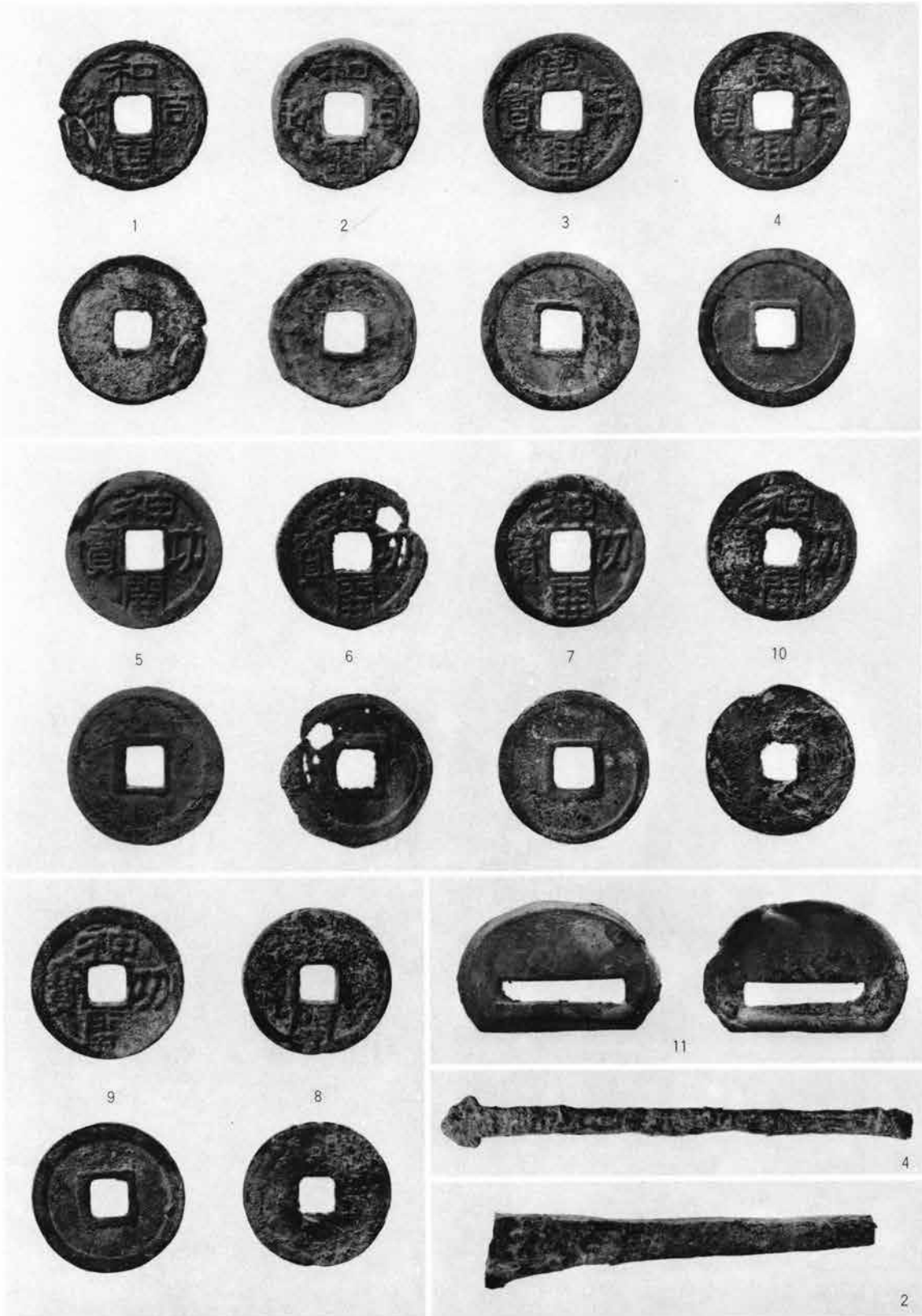
- 1 人形 5 斎串 11・18 櫛 19 木印
27 不明木製品 42・46 不明木製品 51 えぶり状木製品



出土遺物(6)―金属製品―

10 コテ状鉄製品 表・裏 10の下 刃先からの状態

1 刀子 1の下 柄着装状態



出土遺物(7)—金屬製品・錢貨—

1・2 和同開珎 3・4 萬年通寶 5~10 神功開寶

11 銅製丸鞘 4 鉄鎌 2 刀子

京都府遺跡調査概報 第15冊

昭和60年3月20日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 京都府向日市寺戸町南垣内40の3
☎ (075)933-3877

印刷 中西印刷株式会社
〒602 京都市上京区下立売通小川東入
☎ (075)441-3155 (代)